

石列は西側や南および南東側に良く残る。使用された石の殆どは墓石である。上部がやや開いた逆「J」字形をしめし、南側を中心に二段の石組みが観察できる。検出長8mをはかる。南側に並列する石列はコッパ状の墓石残骸で、「結界溝」との間の細い墓道を整地するために置かれたと考えられ、火消し壺形の漆焼き蔵骨器残骸なども投棄された状態で出土した。北側に存在する石列は区画の北限をしめし、かつまた当時の地形を暗示するもので、北側には削平著しい土坑や墓壙群が存在することより、段差最下部に据えられた根石石列である。

区画内は南側を中心に整地・盛土され南側石列上段のみが露呈している。瓦溜り・石溜り状をしめす部分も見られる。中央付近には棺台に使用したと思われる石組みが見られる。また蓮華座の棺台と思われる石片も認められた。石組みは最大東西2m、南北1mの範囲内に収まる。東には「お堂」があり頭を東に向けて安置して最後のお別れをしたのであろうか。「結界溝」や「墓道」に面した石列外側周辺には木の根痕が顕著に見られる。木立に覆われていたようである。

168—OL

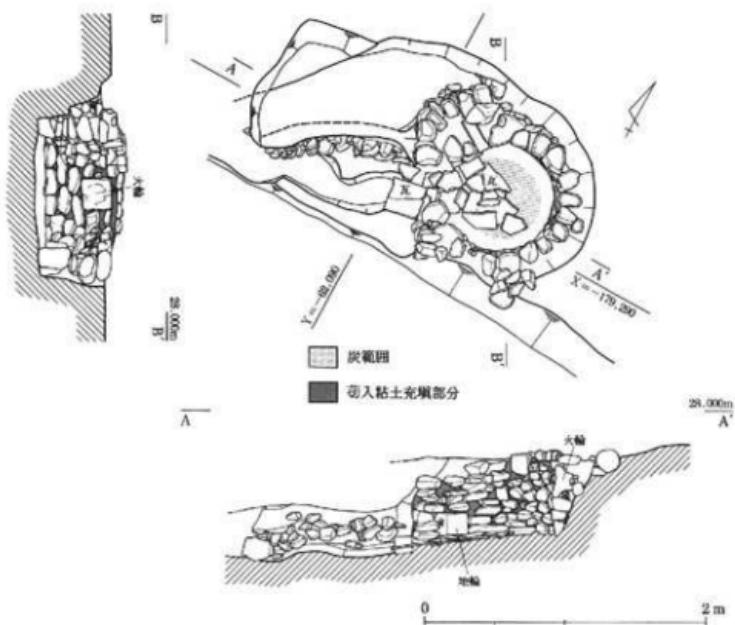
31区北部で検出した。標高28.5mをはかる。西側は161—OB区画溝とつながり、東側は1—OSとつながる。建物に付随する池である。検出長15mをはかるが、池部分と1—OSへと続く導排水部分とに分けられる。導排水部検出長5m、幅2m、深度0.2~0.4mをはかる。1—OSとの接続部付近が深く、池本体との中央部付近が浅い。池本体検出長10m、幅3.7m、深度0.8mをはかる。埋土は黄色土系の砂疊・砂質土が堆積する。遺物は土師器・陶器等が出土した。1—OS出土遺物と変わらない。

161—OBとの関係は区画溝よりの排水機能を持つものであり、1—OSとの関係は導水機能と排水機能を併せ持つものである。導排水部に植などの施設の痕跡はなく、池本体部より溢れた水を流しました逆に溜める機能を有するものと考えられる。

169—OX

31区南部西寄りの「整地土」上で検出した。標高28mをはかる。火葬施設である。平面形状は掘方が長径2.5m、短径1.5mの東西に長い不整梢円形を示す。施設本体は石組みで平面形状は東側が丸い「鍵穴」状を示す。掘方共に南西部は176—OIにより削平を受ける。

燃焼室は地山を階段状に掘り（南側削平のため不明）、河原石（地山疊含む）や墓石（組合せ五輪塔：火輪・地輪等）の平坦面を内側に向け円筒状に組み上げる。隙間部分には苟入粘土を充填し固定する。掘方との隙間には小振りの裏込め疊（丸疊）が充填される。内径0.8mをはかり、高さ0.55m遺存する。底部は排水溝を覆い隠すように貼床される。



第57図 31区169-O X 平面・立面図

焚口から前庭部にかけては掘方下部に拳大から人頭大の礫を積み上げる。検出長1m、高さ0.4mをはかる。裏込め土は礫に接して黄褐色粘土が充填され、さらに外側には灰褐色砂質土が充填される。前庭部には人頭大の礫や一石五輪塔の地輪が敷かれ、地輪は燃焼室奥壁に向かって「ハ」の字に置かれていた。焚口付近に敷石ではなく燃料をくべる作業用の踏み石であろう。

燃焼室中央から前庭部に向かって排水溝が延びる。検出長1.25m、幅0.4m、深度0.08mをはかる。上部には「凸」面を上にした平瓦が乗り蓋の役目をしている。瓦は燃焼室では幾分散乱した状態で検出しており、炭の痕跡が直径0.55mの円形の範囲に拡がる。瓦上部にも痕跡が残るため、棺台に使用された可能性がある。瓦を取り除くと排水溝先端部を中心に直径0.3mの範囲で燃焼部底面の赤化（被熱の痕跡）が見られた。このことは排水溝を通じて空気が送り込まれたことにより、燃焼効率が良くなり高温が得られ赤化したもので、結果的に送風溝の機能をも併せもっていることをしめす。

前庭部石敷き上部に堆積する土層を観察すると、炭・焼土の互層が認められる。焚口付近では窓壁状をしめす部分も認められ、整地を繰り返しながら使用されたものであろう。

燃焼室の形状や規模、床面に遺存する炭の痕跡の形状などを考えると、火葬された棺の形態は「桶形座棺」の可能性が高い。一辺の径が0.55m前後の「箱形座棺」では四隅が支え燃焼室に入らない。また角釘の出土もないことから可能性はほとんどない。

170・171-O X

170-O Xは31・37区で検出した墓道である。埋墓域や木立・櫛に画された景観を想定している。墓道（a）は37区埋墓域南側を画し北東方向へ屈曲しながら延び、さらに東もしくは南東方向に延びるかも知れないが、削平を受けその方向性は不明である。検出した墓道の中でも墓域をほぼ東西に横断することから、また枝道を派生させているので墓道の中心的なものであろう。墓道（b）は途中分岐し埋墓域南側を画しながら東方向へ延びるが削平を受けほとんど遺存しない。墓道（a）の検出長33m、幅1~2m、深度0.1~0.25mをはかる。墓道（b）の検出長5m（推定12m）、幅1m、深度0.1mをはかる。

171-O Xは161-O Bからの墓道と考えているが、建物区画溝との取り付き部が不鮮明で判然としない。埋墓域西側と東側を画するものである。付近一帯は遺構の遺存度も良く平坦な地形が考えられる。墓道（a）に取り付く一時期の墓道かも知れない。

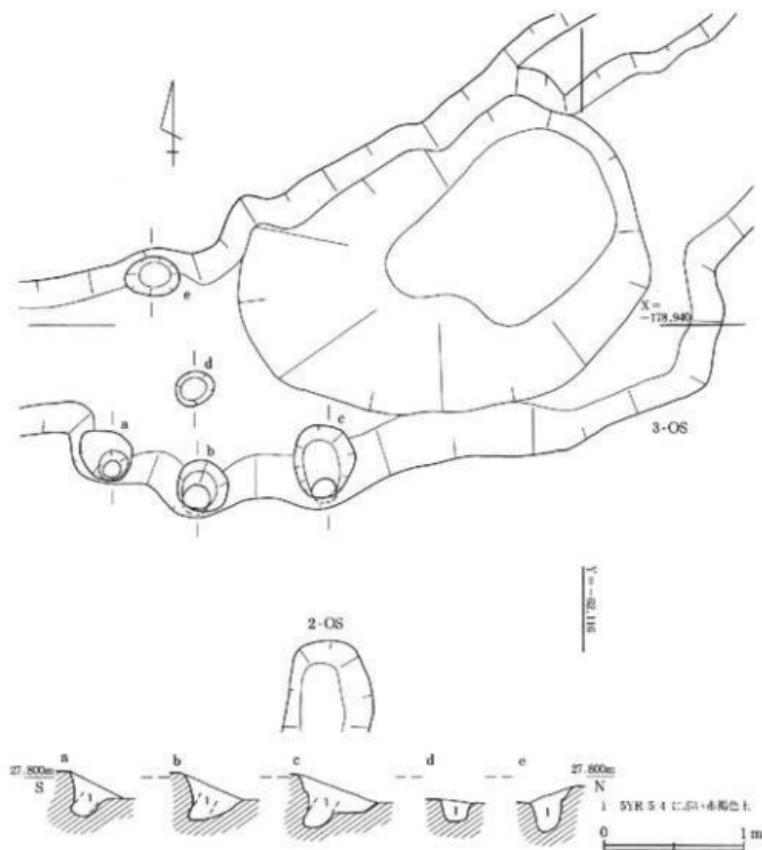
172-O X

37区「整地土」上面で確認した。墓地南東側の入口橋脚基礎と考えている。あるいは墓碑の基壇であろうか。三角形の柱状の石（167-O C棺台と同じ石）を使い2段の方形区画を造る。各辺直線状の掘方を掘り、長辺を外に向けて石を据える。石の抜取り痕も認められる。上段2m×2m、下段4m×3.5mの規模で、それぞれの高さは0.3mをはかる。下段南側上端から下端部にかけてコンクリートで固めた橋梁の取り付き痕が見られた。

173-O X

36区中央部で検出した。標高27.8mをはかる。3-O S内で検出した柱穴群である。2-O Sと3-O Sの分水部と考えている地点のやや西側に位置する。溝接合部付近には土坑状の深まりが存在し、2-O Sに対する分水機能を持った水利施設の存在の可能性を指摘したが、柱穴群を墓地北側出入口に架かる橋の橋脚と考えているので、墓地関連の水場としての可能性も併せて指摘したい。

検出した柱穴は5カ所ある。溝南側肩口矩面3カ所、中央1カ所、北側矩面1カ所確認している。南側の柱穴は推定される柱痕部分が南側に寄り、かつ底部が矩面に食い込むも



第58図 36区173-O X平面・断面図

ので、北側に傾斜して建っていたことが分かる。中央の柱穴は柱痕部分が不明であるが、溝の幅や南側柱痕の角度から考えれば直に建てられていたと考えている。北側矩面には1カ所の柱穴しか確認出来なかった。南側と対比すれば数が足りず、1本ではアンバランスである。北側矩面の抉れ部分にも存在した可能性がある。復元し得る橋脚の構造は溝矩面から中央に向けて斜めに柱を立て、中央部でも垂直に柱を建てる簡便なものと考えている。

柱穴aの掘方直径0.35mをはかり不整な円をしめす。推定柱痕径0.12mをはかる。遺存

深度0.3mをはかる。柱穴bの掘方直径0.35mをはかり不整な円を示す。推定柱痕径0.15mをはかる。遺存深度0.35mをはかる。柱穴cの掘方長径0.5m、短径0.4mをはかり梢円形をしめす。推定柱痕径0.14mをはかる。遺存深度0.35mをはかる。柱穴dの掘方長径0.26m、短径0.22mをはかり梢円形をしめす。遺存深度0.13mをはかる。柱穴eの掘方長径0.38m、短径0.25mをはかり梢円形をしめす。遺存深度0.3mをはかる。埋土はにぶい赤褐色土(5Y R5/4)が堆積していた。

174-O X

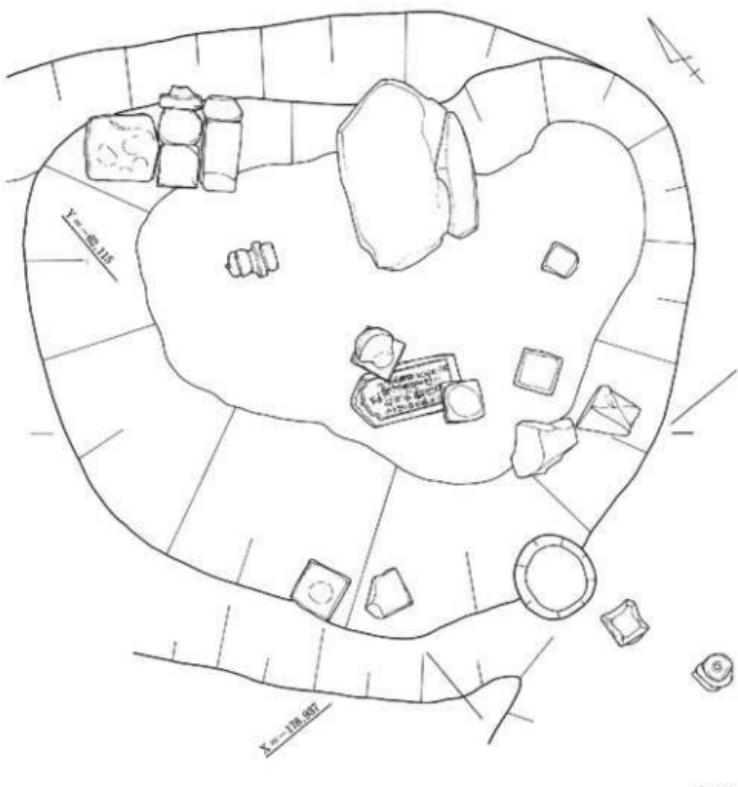
36区中央東寄りで検出した。1-O S内にあり3-O Sとの分水部やや北寄りに位置する。溝底で検出した墓地関連の水場と考えている。形状は長径2.4m、短径1.9mをはかり不整な梢円形を示す。深度は溝底から0.25mをはかる。溝底の標高27.55mをはかる。埋土は灰黄褐色砂礫土(10Y R6/2: 5 cm以下)が堆積している。大きさ65cm×45cm×30cmの礫をはじめとする墓石等の大半は溝底とほぼ同じ標高に水平状態に置かれている。これらは当初の水場が埋没後に置かれた水汲み用の足場であり飛び石であろう。埋没過程にも水場の底に接して礫や墓石が置かれている。

墓地入口の結界溝と橋・水場はセット関係にあると考えられる。南側入口では水桶が確認されたし、南東側は削平され不明な点が多いが入口から近いと思われる位置に井戸を確認している。旧長滝墓地の時間的な変遷の中で、入口が全て同時期に構築されたと考えるのはいささか無謀である。近世絵図で唯一の手掛かりである「長滝村極楽寺三昧境内図」には南東側の入口しか見られない。絵図では「安雲川」(旧安松川)沿いに「北道」「東道」のほか西側には「西道」の名が見える。付近は「俵屋新田」の開発着手以後開発されて、調査で確認されたII安松川の幹線水路等の水利網が発達するのであって、開発の過程あるいは完成により墓地域内への進入路確保(言い換えれば便利な道の確保)が成されたと考えている。調査により確認された三カ所の入口が揃うのは近代以降と考えている。

175-O X

37区「整地土」除去後の傾斜変換点斜面で検出した。東西5m、南北1.6mの範囲に広がる杭列である。杭の直径8~10cmをはかり、標高26.4~26.6mの間に位置する。傾斜変換点ラインにおおむね並行で、規則性はあまりなく、杭列と言うより杭群と言うべきものである。

斜面下位に存在する180-O Rが杭群付近で大きく斜面上位に抉れ込むため、土留めのために垂直に打ち込まれたものと考えている。しかし杭群の集中度や位置などから、一時



第59圖 36區174-O X平面・立面圖

期の橋脚基礎杭の可能性もある。

176・177・178-O I

いずれも墓地移転時に暗渠化された水利施設である。中位段丘面の伏流水を集め、西方の「今井池」方面へ水を供給する。

176-O Iは31区で検出した。標高28.3mをはかる。長径2m、短径1.2m、深度1.5mをはかる梢円形の土坑を段丘疊層に穿つ。土坑内下部には0.8mの厚さで人頭大以上の丸礫（地山礫か）をぎっしりと詰込む。上部には地山礫混じりの粘質土を充填する。最上部には赤褐色土系の地山粘土を0.3mの厚さで充填し土砂の土坑内への進入を防いでいる。土坑壁面よりの湧水は礫の隙間を抜け導水部へと流入する。導水部は検出長21mをはかる。幅0.8m、最大深度1.5mをはかる逆台形状の掘方底部に最大直径0.3mの土管が据えられていた。途中169-O X付近で分かれ並列しながら西方向へ延びるが土管の使用はない。

177-O Iは37区6-O S暗渠化時の土管支え杭の杭列である。「整地土」除去後の斜面下位で検出した。標高26.0~26.2mの間に位置する。ほぼ東南東から西北西方向へ直線的に延びる。検出長14mをはかり、直径8cmの丸杭が使用されている。

178-O Iは1区（36区内）で検出した48-O O湧水土坑の導水部にあたる水利施設である。標高27.6mをはかる。検出長20mをはかり、南西方向に延びる。土坑との接合部は30cm前後の比較的大型の丸礫を1m積み上げる。最下部に直径30cmの土管を湧水壁面最上部の標高に合わせて据え、数条の湧水疊層の水を集めて流す。掘方の幅0.7m、深度1.3mをはかる。断面形状はいくぶん袋状をしめす。接合部より離れると礫も15cm前後のものが使用され、厚さも0.5m程になる。

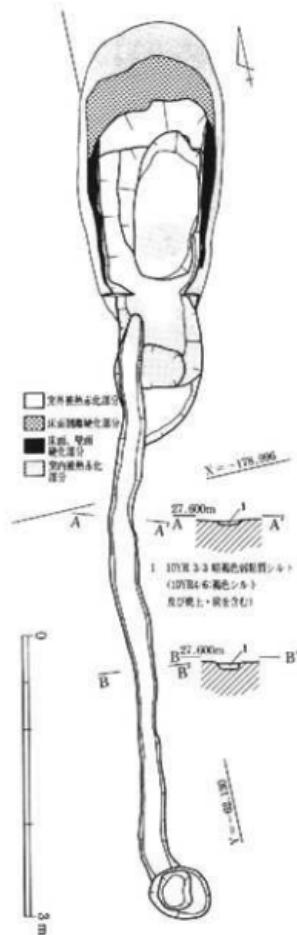
179-O K

南北方向に築かれた有段式登窯である。元来斜面地に構築されていたものと考えられるが、墓地の造成やその後の削平等により周辺の地形は大きく改変されており、現状では平坦面において検出された。

窯の遺存状態は悪く、焼成室の大半を失っており、前庭部から燃焼室、焼成室の一部約3.7mが遺存しているのみである。また、前庭部から延びる排水溝が検出されているが、本窯に伴う灰原は遺存していなかった。

窯体 焚口を南に設けており、主軸はN-12°-Eにとる。地山の黄褐色粘土層中に構築されているが、構築当初どの程度地山に掘り込まれていたかは不明である。現状では焚口から2.1mの部分が遺存しており、焼成室の床面の痕跡及び地山の被熱赤化部分を含め

ると遺存部の全長は2.9mを測る。



第60図 37区179-K全体図

壁面の立ち上がりは5cm程度を測るのみである。焚口から1m程の範囲の床面に被熱による地山の赤化を認めることが出来る。

前庭部の西側に寄せて、焚口付近から排水溝が穿たれている。排水溝は幅20~25cm、深

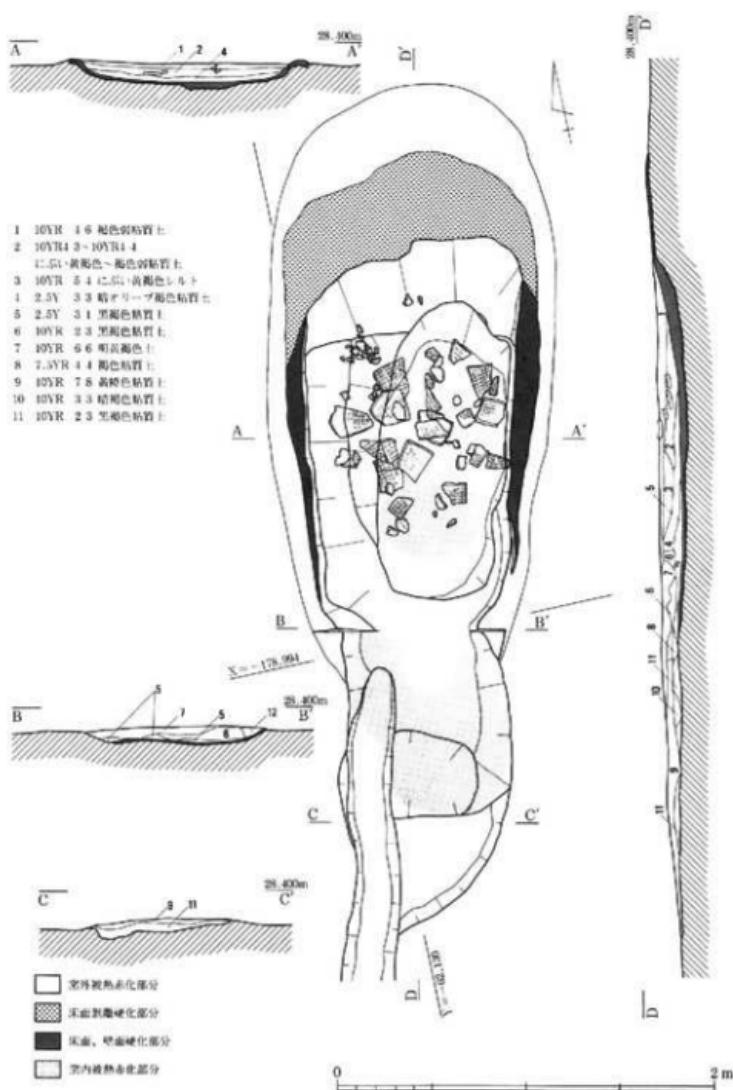
焼成室は1段目の立ち上がり部分と平坦面の一部を残す。ただし平坦面は床面に貼られた粘土の一部と地山の赤化部分によってそれと意識しうる程度である。壁面は全く遺存していないが、現存部分での窯体幅は1.14m程度が復元しうる。

焼成室は全長1.17m、最大幅1.1mをはかる。壁面は最大で約20cmの立ち上がりが確認できた。床面には粘土が貼られており、中央部分が若干舟底状に窪んでいる。床面の粘土は極めて堅緻に焼締まり、灰白色を呈していたが、一部赤化しているところも認められた。床面の厚みは約2cmを測る。床面下は地山の赤化が認められたが、特に焚口付近に顕著で、床面下12cmに及んでいた。

焼成室の埋土には炭や焼土粒が含まれていたが、それらのみの純粋な堆積層は認められなかった。また、この燃焼室部分より平瓦・丸瓦等が出土しているが、何れも床面との間には堆積土が認められ、本来焼成室内に残されていたものが、瓦窯廃棄後若干の時間差において燃焼室内に落ち込んだものと考えられる。

燃焼室で確認された壁面の厚みは約7cmをはかり、床面の粘土と一体で構築されていた。壁面、床面の粘土には筋等の混入物は認められず、補修痕、重なり共に確認されなかった。

前庭部・排水溝 前庭部は半椭円形の平面形を呈し、全長1.60m、最大幅0.9mをはかる。中央部分が若干窪むもののおおむね平坦で、横断面は浅い皿形を呈す。



第61図 37区179-O K案体実測図、遺物出土状況図

さ3～5cmをはかり、ほぼ直線的に南に延びる。現存長は6.2mをはかるが、先端部は30cmにより破壊されている。

180-O R

37区南部の「整地上」を除去して検出した。傾斜変換点斜面下位に沿って蛇行しながら流れる自然流路である。標高26mをはかる。検出長30m、幅1.4m～4.4mをはかる。深度は東側0.2m、中央0.4m、西側0.6mをはかり、西側に向かうほど深くなる。埋土は灰色土系の疎混じりの泥土が堆積する。所々に抉れて深い部分も認められ最深部には比較的粗い疊の堆積が見られる。流路も斜面を抉りながら蛇行している。付近の地形が不安定な状況にあり、未開発な状況にあったことを示している。

埋土中には「整地上」に包含される中世瓦や白土器等の中世遺物の出土を見ており、近世遺物の出土はない。179-O K出土の格子目叩きの瓦片も見られたが、磨耗も著しく数点出土したのみである。灰原はなくその痕跡も確認出来なかった。

流路南側の平坦面で幅0.6m、深度0.1mをはかる溝状の小流路を検出した。流路は本流方向へ向かう。埋土は褐色土系の粘質土である。埋土中からは白土器細片が出土した。調査区西壁の土疊堆積状況と小流路内の出土遺物との関係を考えると、流路北側の「整地上」の形成による自然流路の埋設と流路南側の整地は時間的な差はあまりないようである。むしろ必然的に流路の固定化を目的として双方から整地が始まったと考えるべきで、さらに近世の開発行為と併せて考えるならば、流路北側は墓地域の拡張整備のための整地行為であり、流路南側は耕作地の拡張整備のための整地行為である。その間に介在するものは自然流路から転じた「溝」そのもので、墓地域の「結界溝」機能、「水利溝」機能を合わせもつ。

自然流路は斜面上位からと下位からの拡張整備のための整地により固定化した「溝」として出現するのであって、両者の闇合による産物にはかならず、結果として時間的に移動するものであると言えよう。

第10項 55区

1 位置と層序

本調査地は、今まで畠地として利用されており、調査面積は約2440m²である。

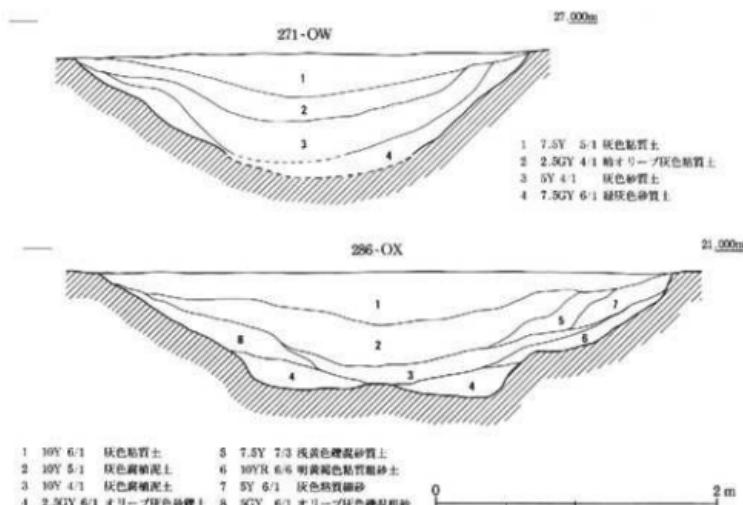
現代の耕作土層（第1層）は、戦後の大規模な整地によって造成されたもので、北東か

ら南西に向かって落ち込む谷状の斜面を埋め立てた後に耕作している。この整地層（第2層）は重機の使用が想定され、一時期に大量の疊層とシルト層（0.2~1.3m）を交互に積み上げていったことが確認できる。整地層に包含される遺物は、近世～現代である。

55区に隣接する長流墓地〔31（8区含む）・36（1区含む）・37・95・96・102・115区〕の遺物と思われる五輪塔等の各種石製品、銭、陶磁器、ガラス製品が斜面において大量に検出された。付近一帯を削平した土が運搬されたと思われる。調査区南西部は墓地を形成した一角とは異なり、斜面下の一段低い部分である。近世の耕作土層と床土（第3層）が水平に堆積しており、連続して耕作した跡が見られる。遺物の量は、ごく僅かに近世の陶磁器が見られるのみである。黄褐色のシルト層（第4層—地山）は、谷底部にあたっており湧き水が多い。



第62図 55区概略図



第63図 55区271-OX・286-OX断面図

2 遺構

調査区北東部は、長滝墓地が墓として機能していた時期に連なる遺構面である。しかしながら、検出した溝・土壙（4・5・279・280～282-O S、12-O O）や澗（279-O Sの湧水分）は何れも近世後期以降であり、またその様相も墓とは大きく異なることから墓域外の開発に伴う溝と考えられる。

調査区南西部においては、近世の溝（275～283-O S、286-O X）や井戸（271・272・273-O W、285・287-O X）を検出した。

第2節 出土遺物（第64～66図、図版129～132）

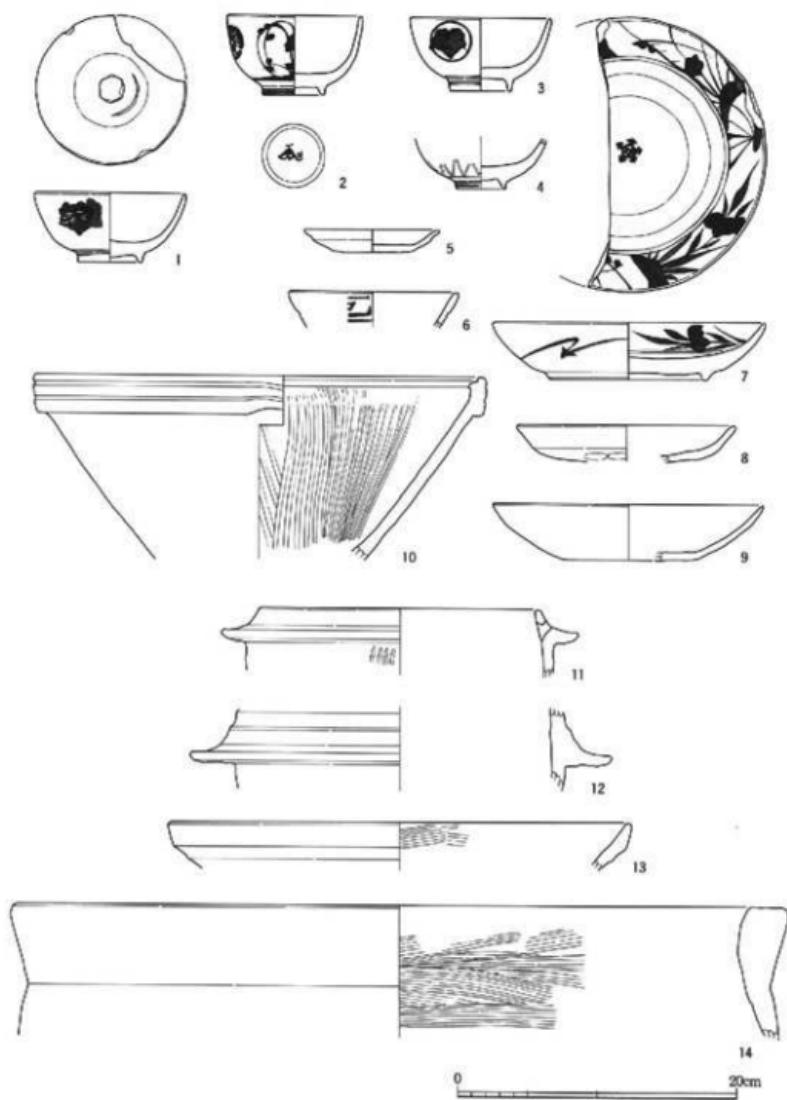
植田池遺跡内からの出土した遺物の大半は旧長滝墓地内からのものである。それらは別項にて詳細を記述しているので参照願いたい。

1～4・7は肥前系染付磁器である。1・2は286-O Xより出土した。3・4・7は273-O Wより出土した。7は見込部輪削ぎと五弁花の形が明晰に残る。6は291-O Wより出土した龍泉窯系青磁で雷紋が見られる。

5・8・9は土師皿である。5は1-O S出土で底部回転糸切りされる。8は270-O S出土でナデ調整される。9は236-O O出土でナデ調整される。10は陶器擂鉢で286-O Xより出土した。擂り目4条を一単位とする。

11～14は270-O Sより出土した。11は瓦質羽釜、12は土師質羽釜で段を有する。13は瓦質練鉢で14は土師質大甕である。

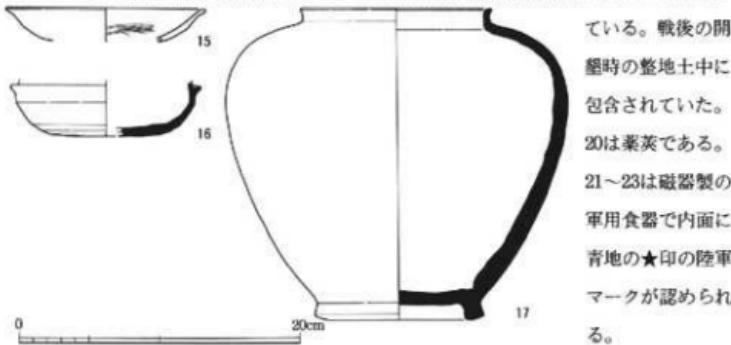
15・17は236-O Oより出土した。同土坑は中位段丘面内の傾斜変換点斜面を削り耕作地として開闢された平坦面で検出している。付近の地形は南に向かって比高を下げる。褐色土系の地山の流れ堆積も認められ、二次堆積土坑と考えている。土坑の立地する傾斜変換点斜面は北西部の旧長滝墓地へと続く。斜面下位から望めば連続した丘陵状の景観を示す。中世段階から確認される旧長滝墓地の中世以前の墓域は丘陵状を呈する斜面上位に存在したと考えられ、それらが時代の要請に従って集約され墓地成立へと至ったと考えられる。これらの土器は斜面上から転落破碎して堆積した土器群と考えられる。他に黒色土器と瓦器の判別の難しい過渡期の土器片も炭とともに出土している。15は黒色土器（A）タイプの土器である。17は須恵器広口壺である。藏骨器と考えており、想像をたくましくすれば9の土師器皿は蓋として使用されたものかも知れない。口径13.4cm、器高22.0cm、体



第64図 植田池遺跡遺構出土遺物（1）陶磁器、瓦器、土師器

部最大径24.2cmをはかる。内面と外面口縁部から体部肩にかけてナデ調整される。体部から高台までの間鎌ヶ折り後ナデ調整される。

16・18～23は包含層より出土した。16は115区現畦畔内から出土した須恵器杯身で口縁部欠損する。18・19は30区より出土した瓦である。18は丸瓦で凸面叩きナデ消しされる。凹面布目が残りコビキの痕跡はない。19は平瓦で凸面格子目タタキされる。凹面布目が残る。20～23は旧飛行場関連の遺物である。主に横風用滑走路南端部付近の調査区で出土し

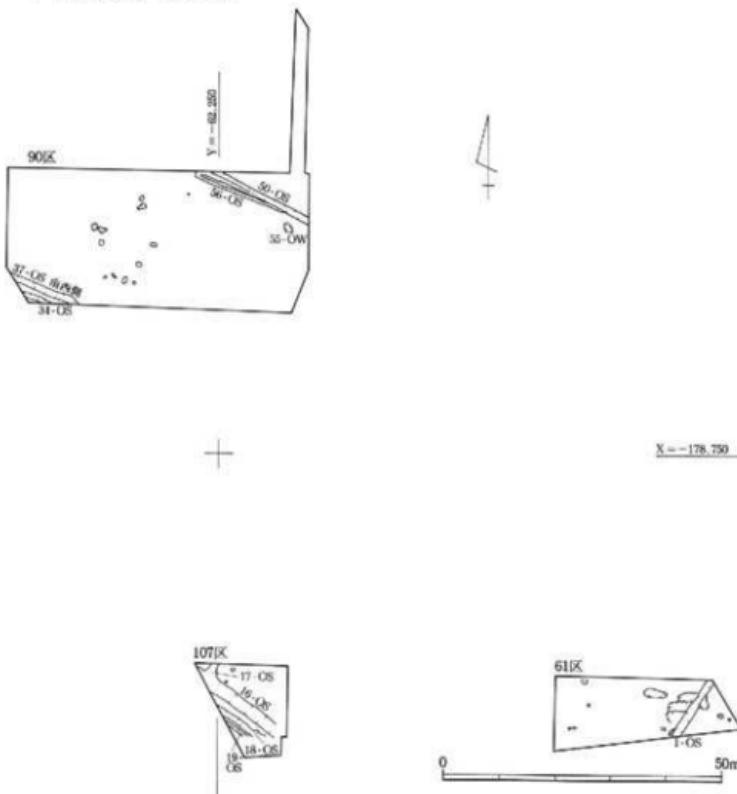


第4章 長滝遺跡の調査

第1節 各地区の位置と層序および検出遺構

第1項 61区

1 位置と層序（第67図）



第67図 61・90・107区概略図

調査前は農地として利用されており、平坦な地形であった。58区の調査時に、用地の問題で同時に調査できずに残った350m²程の広さの調査である。この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が大きく改変されている地域であり、現在の耕作土・床土の下には戦後の整地層があり、その下は削平されたために、洪積層が露出する状況である。

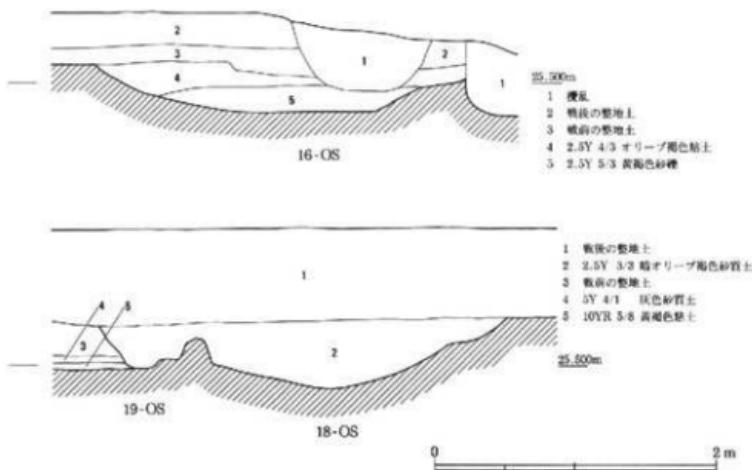
2 遺構

近代以降に粘土を採掘したためにできた浅い土坑と、それらを切って開削された溝（1-O S）を検出した。この溝の規模は、削平されていることを考慮した場合、幅・深さ共に1m程度のものである。一部にコンクリートによる補修が有り、飛行場建設の頃まで機能していたものであろう。これら以外は、まったく検出されなかった。

第2項 107区

1 位置と層序（第67図）

調査前は、宅地として利用されていた土地の一部で、調査区の広さは約200m²である。この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が大きく改変されている地域であり、この調査区でも戦後の整地層が拡がり、その下は削平されているために、洪積層がすぐに露出



第68図 107区16・18・19-O S断面図

する状況である。

2 遺構（第68図）

近世以降の開削時期が考えられる溝を、4条（16~19-O S）検出した。16-O Sとした溝は、幅約2m、深さ0.3m程の断面逆台形を呈する比較的大きなものである。18~19-O Sとした2条の溝は、16-O Sと平行して走る小型のもので、18-O Sの方が幅が広い。17-O Sとした溝は、16-O SにT字形につながる小型のもので、22区に続き、32-O Sと平行して走る溝である。いずれの溝も人為的に埋められており、埋土の状況と併せて考えると、飛行場建設時に埋め立てられたと推定できる。

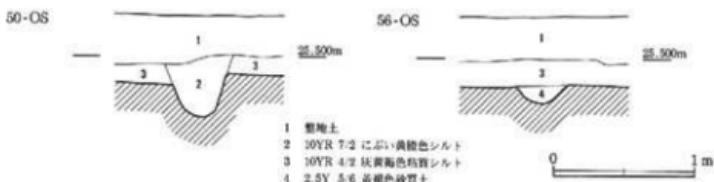
第3項 90区

1 位置と層序（第67図）

調査前は、工場として利用されていた土地で、調査区の広さは約1300m²である。この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が大きく改変されていたと考えられる地域であり、この調査区でも盛り土の下には戦後のものと考えられる耕作土と薄い整地層があり、その下は削平されたために、いきなり洪積層が露出する状況である。

2 遺構（第69図）

開削時期が近世以降と考えられる溝を、6条（34~37-O S：南西側、37~41-O S；南東角部、50~56-O S；北東側）検出した。隣接する22区と44区での溝の続き方から、34~37-O S、37~41-O S、50~56-O Sは2条ずつ対をなして、それぞれが耕作地の南、東、北を画しており幅30m程の細長い区画になる。この区画の北東隅から55-O Wとした井戸を検出した。溝と井戸は同様の黒っぽい土で埋まっており、共に飛行場建設に伴い埋没したと考えられる。



第69図 90区50・56-O S断面図

第4項 22・23・44・45・58 (62区含む)

4-22区の調査 (第70図、図版47・55・56・133)

1 位置と層序

位置と経過

調査地は、4-90区・水路を挟んで4-45・

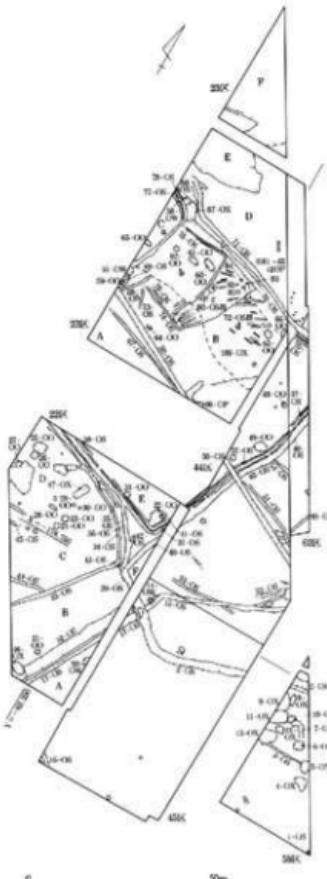
4-44区に接する。地区割りでは、大C-3-1 D13に位置する。現状は、水田と荒れ地。現在の区画5枚が対象で、調査面積約2015m²・人力掘削土量550m³であった。

調査は、1990年2月15日より地味土の掘削を開始。機械掘削・人力掘削を統いて実施し、3月20日ヘリコプターを利用して航空写真測量の後、20日には終了した。昭和17年埋没の水田と水田耕作に伴った水路・溝・ピットが検出され、これらの水田と旧地形を把握することができた。地形は北東よりなだらかな斜面地形となっている。

層序

現標高はT.P.+25.913~25.613mを測る。地山面はT.P.+25.583~25.263m。4-45区との比高差は約1.8m、4-3区とはほである。1層(蜜柑畑造成に伴う盛り土層)・2層(現水田耕作土と元の耕土・床土層)・3層(近世~近代の旧耕作土層)・4層(耕土以外の自然地層)・5層(大阪層群の地山層)に大別される。5層地山は黄橙・灰黄色粘土とその下のシルト質の緑灰色砂層・段丘疊層に分けられる。

1層(盛り土) 約30~20cmの地山土混じりの浅黄色土を基本とする蜜柑畑の盛り土層。株掘り方の新旧の擾乱があった。



第70図 22・23・44・45・58・62区概略図

2層（元の耕作土）蜜柑畑造成に伴って全体に削平を受ける。2aはオリーブ色・灰黄色砂質土、2bは橙褐色土である。1・2-OZでは30~20cmと地味土は厚い。

3層（近世～近代耕作土）3～4枚以上の水田層が認められる。幾度となく繰り返された場整備の結果である。灰オリーブ色の耕土・間層として粘土質の黄・灰色が入る。盛り土は、地山疊層や青灰色・灰白色の堅く締まった土である。1・2-OZでは土手の積み土も黄褐色・灰橙色のよく締まった土で、各時期、外側へ広がっている。

4層（耕土以外の自然堆積層）24-OXや23-OLの埋土にあたる。シマ状に砂を堆積させる地山土混じりの灰白色砂質土で、全体を覆っている。23-OL埋土の黄灰色砂質土は、中世の遺物を包含していた。さらにその下層の黒灰粘質土・黒灰色砂疊層は、植物遺体と共に瓦器類を包含する。

5層（大阪層群の地山層）全体は黄橙色・灰黄色の粘質土が覆っている。その下層には淡灰色の砂疊層が堆積する。粘土や疊層の下には、緑灰色や青灰色のシルト質土層が互層を成しており、沖積状況を示し、非常に土質は硬い。西から東に傾きをもって堆積している。下層ほど鉄分を含み、厚さ1mで再び黄色粘土と細砂とが互層を成している。

2 遺構

4-22区において検出した遺構は、地山直上の水田床土面と地山面で確認できた。遺構は、土坑11基・溝15条・井戸1基・淵状の水溜2基と水田面6面が確認できた。現代の概乱を除いて総ての遺構は、飛行場造成以前の水田耕作に伴ったものと判断され、それぞれ6面の水田に付随するものであった。以下、主要な遺構に解説を加える。

A～F-OZ

調査区内で確認した6枚の水田は、すべて飛行場造成以前の近世から近代（20世紀前半）にかけて踏襲されてきたものである。C・E・F水田に囲まれた三角地帯は坪境の交点の部分で一段高くなってしまっており、考古学では一種の「島状遺構」と呼ばれる部分にあたっている。現在、一番北の区画の東側三分の一が高い畑地であったのはそのためである。畦畔は、C・D水田とE水田には大畦畔が確認され、その他では小畦畔が確認された。ただし、C水田とD水田の畦畔は、痕跡を確認したのみであったが、土層の観察より復原し得た。

17-O S

22区南部を南西から北東方向に走る溝。幅約0.7m・深さ約0.12m。埋土は暗灰色砂質土であった。遺物は、土師器1・瓦質土器1・染付け8・瓦10（丸瓦3）・陶器破片5（堀摺鉢1・片口鉢1）などの破片が出土した。

32-O S

17-O Sと平行する形で検出された水路。46-O Xに取り付いて北流する。幅約2.5m・深さ概ね0.75mで、二時期の切り合いがある。埋土は上層10Y R7/2にぶい黄橙色土混りの疊および砂疊・下層は10Y R7/6明黄褐色土混の砂疊層。一時期古い溝は10Y R7/2にぶい黄橙色砂疊や10Y R6/6明黄褐色砂質土・粘質土が充満している。耕作下土で確認されたこの溝の性格として、不規則ながら多くの疊が充満していたことを考えると、一種の暗渠の性格の溝であろう。遺物は、須恵器1・施釉陶器1・染付け1・瓦2・灯明具などの破片が出土した。

33・34-O S

22区中央を南西から北東へ延びる溝と、南東から北西に続く溝である。幅0.8~0.5m・深さ概ね0.25~0.2m。34-O Sは新旧の掘り直しがある。埋土は黄褐色土混りの灰色砂質土であった。33-O Sから土師器1・染付け1、34-O Sから天目の陶器1が出土した。

35-O S

34-O Sと37-O Sとの間で確認された、幅約0.7m・深さ約0.15mの水路の残骸。埋土はにぶい黄橙色混りの灰色砂質土である。遺物は土師質土器1・瓦1が出土。

36-O S

37-O Sから39-O Sに連なる水路。幅約1.3m・深さ約0.3m。埋土は黄灰色細砂ブロック混りの7.5Y R7/1明褐灰色疊混り砂質土である。染付け3・瓦2（丸瓦1）が出土。

37・40-O S

34-O Sと平行しながら北西から南東方向に走り、北東方向に展開する溝。38-O Sとの間に畦畔が造られ、中央部にはE水田への水口が検出された。幅1.1~0.9m・深さ0.4~0.25m。埋土は疊混りの暗灰色粘質土・橙色土混りの灰色粘質土や灰黄色粘質土であった。遺物は土師器1・瓦類5（桟瓦1）が出土した。

38-O S

37-O Sに平行するE水田の溝。幅約0.43m・深さ約0.15m。埋土は10Y R7/4にぶい黄橙色粘質土。遺物は染付けの碗3・瓦1の破片が出土した。

39-O S

36-O SとジョイントするF水田を取り巻く溝。幅1.8~1.1m・深さ0.3~0.2m。削平により浅くなり、畦畔は確認できなかった。埋土は粗砂・疊混りの灰色細砂と灰色粘質土および黄橙色混りの灰色砂質土である。明らかに流水の痕跡を示す水路。遺物は、土師質

土器1・須恵器3・瓦器1・陶器2（甕1・堀摺鉢1）・施釉陶器2・染付け16・瓦類7などの破片が出土。

41-O S

38-O Sに取り付く溝。北東に北流する。幅約0.8m・深さ約0.3mで、38-O Sとやや性格の異なる溝。埋土は7.5Y R5/2灰褐色砂疊混り粘質土であった。

42-O S

36-O Sに切られた小溝。搅乱で全容は明らかでないが、埋土は灰褐色であり、一時期通る溝。幅約0.42m・深さ約0.15mで、染付け1片が出土。

43-O S

39-O Sの水路と34-O Sとを結ぶ溝。幅約0.5m・深さ約0.15m。埋土は7.5Y R7/1明褐灰色細砂土であった。

44-O S

C水田の耕作に伴う溝。幅約0.6m・深さ約0.11m。埋土は7.5Y R6/6橙色砂質土・7.5Y R5/6明褐色砂質土であった。

45-O S

44-O Sと同じ性格の溝で、西端北寄りで検出した。幅0.66~0.44m・深さ約0.1mである。

21-O O

22区南側で検出した、長径約1.29m・短径約1.21m・深さ約0.12mの土坑。埋土は2.5Y 7/4浅黄色粘質土で、青磁染付け1片が出土した。

22-O O

E水田で確認した、長径約1.25m・短径約1.12m・深さ約0.32mの土坑。遺物は、施釉陶器1・染付け5・瓦類1が出土した。

23・24-O O

22区中央西寄りで検出の土坑。23-O Oは長径約1.68m・短径約1.65m・深さ約0.16mを測り、埋土は2.5Y 6/2灰黄色粘質土で、炭および2.5Y 7/4浅黄色粘質土がバンド状に堆積していた。堀摺鉢1・染付け1が出土した。24-O Oは長径約1.65m・短径約1.47m・深さ約0.17m。埋土は2.5Y 5/2暗灰黄色粘質土で炭の混入があった。

25・26・27-O O

22区北西部D水田で検出した土坑。25-O Oは、長径約3.31m・短径約2.57m・深さ約

0.25m。7.5Y R6/3にぶい褐色砂土で26-OOを切る。26-OOは、長径約1.99m・短径約1.79m・深さ約0.19mで、埋土は25-OOと同様で、所々に礫が混じる。27-OOは、長径約1.28m・短径約1.10m・深さ約0.25mで、埋土も同様の土坑。

46-O X

22区南端A・B水田の境で確認した淵状の井戸。長径約3.82m・短径約2.41mを割り、地山の砂礫層を穿っている。断面ではかなりオーバーハングしており、掘削を断念したが、深さ1.5m以上を測る。今も湧水がかなりある。上層の灰褐色埋土より、染付け大鉢1・瓦類3などが出土した。

28-OO

22区中央西寄りで検出した。長径約2.22m・短径約0.61m・深さ約0.18m。埋土は灰褐色粘質土であった。

29・30-OO

22区中央北寄りで検出した浅い皿状の土坑。29-OOは、長径約0.79m・短径約0.67m・深さ約0.08mで、埋土は灰褐色粘質土。30-OOは、長径約0.73m・短径約0.70m・深さ約0.09m。埋土は暗灰色砂質土であった。

47-O X

22区北部のC水田隅で確認した井戸状の長方形大形土坑。長径約4.42m・短径約1.86m・深さ約1.3mを割り、東側は地山が一段掘り窪められテラス状になっている。埋土は礫混りの2.5Y7/1灰白色砂質土である。上層には2.5Y7/3浅黄色砂質土がレンズ状に堆積する。

31-OO

E水田畦畔際で検出した、長径約1.5m・短径約1.4m・深さ約0.44mの耕作土坑。

20-OW

22区南西東壁で確認の素掘り農業井戸。昭和17年に埋没している。径約0.9mを測る。深さ1.3m以上で、埋土は砂礫を多く含んだ10Y R6/3にぶい黄橙色砂質土であった。

3 遺物

主要出土遺物を遺構ごとに取り上げる。

32-OS : (6)は、32-OS直上より出土した火燈具の皿部分。内外面とも施釉するが、ススによる変色を認める。皿部の直径6.9cm。

34-OS : (4)は、34-OSから出土した瀬戸美濃系の天目茶碗の破片。

39-OS : (1)は、39-OSより出土の土師質の鉢型土器の口縁部破片。肩部に径1.5cm

の穿孔がある。手あぶり・炬鍵の類であろうか。復原口径11.7cm。(2)は、39-O Sから出土した外面に蛸唐草を施した銚子徳利の破片。(3)は39-O Sより出土の盃。口径6.2cm・器高4.5cm・底径3.2cmを測る。外面には薄い緑灰の釉により草花紋を施す。

23-O O : (8)は、23-O Oから出土した丸碗の破片。復原底径3.6cm・高台高0.8cm。内外面プリント紋による。

46-O X : (5)は、46-O X上層から出土した大鉢の破片。復原口径16.4cm・器高5.7cm・復原底径9.1cm・高台高0.8cmを測る。外面群青のゴスで4条の結線と鳳凰の施紋がある。内面は菊花を施す20世紀の製品。

包含層：(7)は、E水田地山直上より出土の、外面に鉄釉を施す盃。復原口径6.8cm・器高3.05cm・底径2.7cmを測る。内面底部に「壽」の施文字あり。(9)は、E水田南側で出土した、灰釉を施した碗の底部破片。底径4.7cm・高台0.5cmを測る。内面砂目掘の痕跡あり。(10)は、C水田地山直上より出土の、瀬戸のおろし皿。内面施釉。(11)は、D水田地山直上から出土した碗底部。底径4.6cm・高台1.2cm。内外面とも鉛釉を施釉。(12)は、B水田地山直上から出土した、18世紀代の伊賀・信楽焼系掘鉢の体部破片。(13)は、D水田地山直上より出土した須恵質の布目平瓦の破片。外面織目痕を残す。

4-44・45区の調査（第70図、図版47・57・58・134）

1 位置と層序

位置と経過

調査地は4-62・22・23・4-90区に接する。地区割りでは、大C-3-1 D 0 8・13にあたる。現状は、キャベツ畑と水田7区画が対象であった。未解決物件の関係で拡張を繰り返し、最終的に調査面積は両地区合わせ約3525m²で、調査を行った。

調査は、機械掘削を平成2年5月25日より開始し、引き続いて人力掘削を実施し、6月21日のヘリコプターを利用した航空測量の後、終了した。

層序

現標高はT.P.+26.21~26.00mを測り、4-22・23区との比高差は約1m程あり段差となっていた。地山面での標高はT.P.+26.06~25.28mである。尚、44区北端には4-23区より続く谷状地形の南肩に当たっている。45区では、現耕作土（戰後の耕作土0層）直下が黄褐色砂礫粘質土の地山面が露呈し、昭和17年以前の土層は完全に削平されている。44区南半区も同様の状況であるが、0層床土を0.1mほど認めるのみである。44区北半区

の上層は、0層下には2.5Y7/4浅黄色砂質土と粘質土の2層の盛り土を0.4~0.35mの厚さで認める。1層として、水田・畑の耕作土が0.15~0.1m（1a層）・旧耕作土（1a'層）・2.5Y6/6明黄褐色粘質土の床土（1b層）、0以下、地山を確認できる。地山は鉄分が混る2.5Y6/4にぶい黄色砂土と灰色シマ粘土混りの黄橙色粘質土とが0.5~0.2mあり、その下層はマンガン混りの段丘疊層となっている。

2 遺構

4-44・45区における遺構は、全て地山面で検出した。遺構は、溝9条・井戸1基・土坑2基と谷状地形である。近代の水田面は5面を把握できる。尚、近世の水田耕作に伴う溝44区52・53-O S・44区54-O S以外は、現代の擾乱を除いて、4-22区の延長の飛行場造成以前の水田耕作に伴ったものであった。4-44区側の4-23区より延びる谷地形の延長上に存在する44区48-O Oは4-23区のものと一連の土坑である。以下、主要な遺構に解説を加える。

2-O S

45区北部を東西に横切る、幅約2.86~2.02m・深さ約0.61~0.51mの水田水路。埋土は、地山土混りの灰色砂が溝底に堆積しており、流水があったことが知れる。中層として耕土の10Y R6/1褐灰色砂質土および床土の10Y R6/6明黄褐色粘質土などがブロックを混じる。上層は10Y R6/1褐灰色砂質土や10Y R7/8黄橙色砂礫が充満されており、埋め戻された堆積を示す。遺物は、土師器3・陶磁器9（碗6・火燈具1・水滴1）・サヌカイト・瓦5（巴紋軒丸）などが出土した。

15-O S

44区南部から45区北部を東西に斜行して45区2-O Sと交差する溝。幅約1.0m・深さ約0.4m。南岸に一部石による護岸が認められた。埋土は2.5Y6/2灰黄色砂質土と礫混りの灰色土で埋め戻されている。44区52・53-O Sを切っている。遺物は、土師器4（土鍤1）・染付け碗1が出土した。

14-OW

45区北西部、溝コーナーで検出した素掘り井戸。径約0.9~86m・深さ約2.1m。井戸底は一段分の石積みが確認され、杭でそれを止めていた。埋土は黄灰色砂土で下層は青灰色粘土が堆積していた。遺物は平瓦1・丸瓦1が出土した。

16-O S

45区南西隅で確認した幅約1.7m・深さ約0.7mの溝。4-32区より延びる一段下がった

旧耕作水田の水路である。遺物は、土師器1・陶器3（ognifrons 1・壺1）・染付け4・瓦類8（丸瓦3）が出土した。

50-O S

44区中央を北西方向に横断し、4-23区を貫く暗渠の溝。幅1.3~1.0m・深さ0.71~0.22m。人頭大の川原石にて溝本体を包み込む。溝の上層を10Y R7/6明黄褐色砂質土で覆う構造である。部分的にコンクリートを検出し、昭和17年造成の盛り土を切り込んでおり、戦後の造作である。44区37・40-O Sを切っており、砾の入る小暗渠が取り付く。遺物は、陶器1（壺）・陶磁器3（水滴）・瓦類6・土管1などが出土した。

40-O S

44区を北東から南西に走行する水路。西肩は盛り土による畦畔である。水口が三箇所確認された。幅1.43~1.33m・深さ0.63~0.45m。埋土は、地山上混り10Y R6/1褐灰色砂質土・7.5Y R6/2灰褐色細砂土が溝の堆積土である。その上に旧層として砾や床土の混る10Y R6/2灰黃褐色砂質土と上層の耕作土混りの10Y R6/8明黄褐色粘質土で埋め戻されている。遺物は、土師器1・陶器2・施釉陶器3・染付け2・瓦類15（丸瓦9）・ガラス瓶1などが出土した。

37-O S

40-O Sに平行する水田側の溝。幅0.92~0.53m・深さ0.37~0.13m。埋土は10Y R6/2灰黃褐色砂質土であった。染付け2・瓦類8（丸瓦1）などが出土した。

48-O O

44区北端の谷状地形上面で検出した。長径約1.25m・短径約1.13m・深さ約0.15m。地山の2.5Y7/4浅黄色粘質土層を切り込んでおり、遺構上面は谷の堆積土と水田床土が覆っている。埋土は7.5Y R6/6橙色粘質土であった。褐色土を基調とする奈良時代以後近世以前の遺構である。遺物は出土しなかった。

49-O O

44区北部の下がった水田面で検出した、長径約3.40m・短径約2.70m・深さ約0.24mの土坑。埋土は、黄橙色粘土混り2.5Y6/1黄灰色砂質土であった。遺物は、須恵器1・施釉陶器1・染付け碗1が出土した。近代前半の土坑であろう。

51-O S

44区を東西に横断する旧水田の落ちと溝である。幅約0.45m・深さ約0.2m。埋土は2.5Y8/3淡黄色砂質土であった。

52-O S

44区南側で検出した溝で、45区15-O S や戦後の擾乱坑により大半が破壊を受けている。幅約0.63m・深さ約0.15mの痕跡を確認した。埋土は堅く締まった10Y R7/3にぶい黄橙色砂質土で、近世にまで遡る溝である。

53-O S

44区南端を東西に横切る、44区52-O S と同様の性格の溝。幅約0.66m・深さ約0.15m。埋土は10Y R7/3にぶい黄橙色砂質土であった。近世の耕作に伴うものであろう。

54-O S

44区北部で検出した44区40-O S に取り付く溝。幅約0.75m・深さ約0.15m。埋土は10Y R7/3にぶい黄橙色砂質土であった。

3 遺物

2-O S : (1)は、サヌカイト塊である。打撃痕跡より近世の火打ち石と思われる。質量59.56gを計った。(2)は、内面施釉の陶器皿の破片。胎土は白色粘土であり、復原口径7.8cm・復原底径4.4cm。(3)は、肥前系の丸碗口縁部の破片。復原口径9.9cmを測る。印花の施紋。(4)は、プリント形押しによる水滴の断片。プリントは桜と桔梗の図柄。(6)は、青磁染付けの丸碗。復原底径5.5cm・高台高1.1cm。(7)は、19世紀の丸碗。底径3.4cm・高台高0.7cm。(8)は、無地の施釉碗。復原口径8.8cm・器高4.3cm・底径3.3cm・高台0.7cm。

15-O S : (13)は、丸碗の底部の破片。内外面とも灰色の施釉。底径4.7cm・高台高1.0cmを計る。(14)は、大型の管状土錘の破片。摩滅が著しい。

16-O S : (16)は、丸碗の口縁部破片。復原口径8.2cm。(17)は、丸碗底部破片。体部から高台にかけて4条の結線がある。復原底径3.9cm・高台高1.0cm。(18)は、丸碗。内外面ともコンニャク印判による朱と群青による染付施紋。復原口径9.8cm・器高5.4cm・復原底径4.0cmを計る。(22)は、陶器の壺底部の破片。復原底径9.0cm。底部に脚をイミテーション化した飛び出しがある。内外面ともロクロによる成形で、わりと薄手の製品。

50-O S : (5)は、外面に緑色の施釉を施す陶器製の水滴。長さ3.5cm・幅1.5cm。

40-O S : (9)は、土瓶の蓋の破片。径6.6cm・軸は上面のみ。京焼系の焼物。(10)は、瀬戸かみ田窯の染付け小盃。復原口径8.1cm・器高4.0cm・復原底径3.0cmを計る。(11)は、急須の口部分破片。京焼系の陶器である。(12)は、唐津焼の碗底部。山茶碗風で底部へラ削り痕を認める。内面砂目積み痕を残す。底径4.9cm・高台高0.7cm。(15)は、20世紀の目薬の瓶。高さ8.1cm・瓶本体の幅3.6cm・厚さ1.9cmである。「東京薬品」と「チーム水」

と背文字が陽刻してある。

37-O S : (19)は、外面に二重輪目紋のある肥前鍋島窯の丸碗。高台際に圓線を施す。底径3.9cm・高台高0.8cm。(21)は、肥前系の波佐見焼、いわゆる「くらわんか」茶碗。外面草花紋。底径4.2cm・高台高0.9cm。

49-O O : (20)は、丸碗。内面砂目の跡顯著。外面全面に施釉の肥前系陶器。復原口径10.5cm・器高4.9cm・底径4.2cm。

包含層：(23)は、44区地山面直上から出土した土師質の釣鐘形飯蛸壺の釣り手部分。摩滅が激しい。正面釣り手部の幅5.0cm・孔径1.9cm・釣り手部高4.2cmを計る。

4-58区の調査（第70図、図版47・52・58）

1 位置と層序

位置と経過

調査地は4-61工区に接し、市道をへだてて4-45区に隣接する。地区割りは、大C-3-1 D14にあたる。現状は、タマネギ畑と水田、3区画が対象であった。調査面積約660m²で、人力掘削の総土量は約364m³であった。

調査は、機械掘削を平成2年7月10日より開始し、引き続いて人力掘削を実施、7月17日のクレーンによる写真測量図化の後、終了した。

層序

現標高は、T.P.+26.9~26.7mを測る。北と南では地山面の高低差がある。すなわち、北では昭和17年の耕作土が確認されるが、南では現耕作土直下が段丘粗砂礫および黄灰色シルト混り粘質土の地山が露呈する。地山面での高さはT.P.+26.6~26.1mである。1層（現耕作土）・2層（昭和17年の盛り土および整地層）・3層（昭和17年以前の元の耕土・床土）・4層（洪積段丘の地山）に大別される。

1層 約20cmの灰色土を基調とする1a層と、10~5cmの黄橙色粘土層の床土1b層、更に15~10cmの旧耕土1c層とそれの床土を中央水田では認めるが、その下層は4層となる。

2層 北部の水田では灰色粗砂礫土および灰色耕土あるいは橙色粘土混りの土層が40~30cmの盛り土となっている。部分的には大きなブロック状の堆積を示す。

3層 北部水田のみで認められ、2.5Y7/1灰白色粘質土の耕土（3a層）と10YR7/8黄橙色粘質土の床土（3b層）が確認できる。

4層 中央部では黄橙色粗砂礫の粘土混り地山（4a層）が頭を見せるが、全体的に2.5Y7/8黄色粘質土（4b層）が覆っている。

2 遺構

遺構は総て耕作土下の地山面で確認した。旧耕作土に伴う3-O S、昭和17年埋没の1・2-O Sと近代以前の所産であろう粘土採掘坑を検出した。

2-O S

45区へ延びる水路を58区北端で確認した。幅約2.8m・深さ約0.65～0.6m。埋土は溝底に10cm程の10Y R6/1褐色細砂土が堆積している。10Y R5/1褐色砂礫混り砂質土と10Y R6/2灰黃褐色砂質土で埋め戻されている。北には淡黄色粘質土や淡黃褐色砂礫土による大畦畔が確認された。北側には溝に平行して、幅約0.6m・深さ約0.15mの溝が水田側に設けられている。

1-O S

58区南端で確認した溝で、幅約1.20mを測る。この溝も昭和17年に埋没している。上部は削平を受けており畦畔等は確認されない。大半は4-61区に延びている。

3-O S

58区中央を東西に横切る溝。幅0.4～0.3m・深さ約0.15m程度。1c層旧水田の区画溝である。

4-13-O X

58区北半部全域で検出した粘土採掘坑群。形状は不整方形あるいは梢円形を呈している。最大のものは6m弱である。埋土は、7.5Y R6/8橙色粘質土及び礫混り土と7.5Y R6/6橙色粗砂混り土の上下2層に分けられる。地山の黄橙色粘質土を求めて採掘しており、その後を地山に混じっていた砂礫で埋め戻している。出土遺物は特に無い。

3 遺物

無し。

4-23区の調査（第70図、図版48・56・57・135）

1 位置と層序

位置と経過

調査地は4-44・4-24調査区に接する。地区割りは、大C-3-1 D08にあたる。現状は、畑地と水田5枚が対象であった。調査面積2655m²で、人力掘削の総土量は900m³で

あった。

調査は、1990年3月25日より地味土の掘削・機械掘削を開始し、30日より人力掘削を始めた。4月17日航空測量の後、28日終了した。

層序

現標高はT.P.+25.46~24.24mを測る。地山面はT.P.+25.22~23.11mである。北と南では地山面の高低差がある。すなわち、北では昭和17年の耕作土が確認されるが、南では現耕作土直下が段丘粗砂礫層および黄灰色シルト混り粘質土の地山である。

1層（現耕作土）・2層（昭和17年の盛り土および整地層）・3層（昭和17年以前の元の耕土・床土）・4層（洪積段丘の地山）に大別される。

1層（耕作土）約20cmの灰色土を基調とする1a層と、10~5cmの黄橙色粘土の床土1b層、更に15~10cmの旧耕土1c層とそれの床土が中央水田では認めるが、その下層は4層となる。

2層 北部の水田では灰色粗砂礫土および灰色耕土あるいは橙色粘土混の土層が40~30cmの盛土となっている。部分的には大きなブロック状の堆積を示す。

3層 北部水田のみで認められ、2.5Y7/1灰白色粘質土の耕土（3a層）と10YR7/8黄橙色粘質土（3b層）の床土が確認できる。

4層 中央部では黄橙色粗砂礫の地山粘土混層（4a層）が頭を見せるが、全体的に2.5Y7/8黄色粘質土（4b層）が覆っている。

2 遺構

遺構は溝15条・井戸2基・土坑8基・ピット6個・粘土採掘坑2基などである。それらは昭和17年埋没の水田と水田耕作に伴った水路や溝と旧水田の溝群・ピットが大半である。さらに中世から近世期の谷水田・旧地形を把握することができた。また、時期不明ながら奈良の須恵器を含む土坑が数基、水田層下層から確認された。地形は北東よりなだらかな斜面地形となり、南半部が谷地形にあたり、谷は4~24区に連なる。

A~F-OZ

調査区内で確認した6枚の水田は、すべて飛行場造成以前の近世から近代にかけて踏襲されてきたものである。A水田は、67-O-Sを境溝として4-90区に広がる水田。B水田は、A水田の北側70-O-Sまでの東西に長い水田。高低差により、74-O-Sの落ちが境となり、東と西とでは区画されている。C水田は大半が4-44区に延びるが、77-O-Sを周溝とする水田。D水田は、B水田とは坪境畦畔・溝を挟んで北に展開する。E・F水田は、

その西に展開した水田と思われるが、削平が激しく、側溝等は確認されなかった。中央部西側が坪境の交点になるようである。

水田は全容が調査区内で収まらないで大きさの推定はできないが、長地型の水田が地形に沿う形で東西方向に展開していたようである。

中央部の谷水田は、元水田（B水田）下に明らかに3面の水田層が5区画（a～e）確認される。10cm程の耕土と0.5cmの床土間層が観察され、明らかに近世水田層と把握された。最下層の1枚は中世後期にまで遡る可能性を持ち、c・d水田では床土下に唐鋤痕跡が確認される。近世末から近代と考えられる上層の水田では、1.2m程度の間隔を置いて、幅20～15cm・高さ10cmの小畦畔を認め、苗代・或は短冊形の小区画と考えられるものが把握された。水田の造成時期は大きく3時期あるようである。それらの層には、染付け・焼塩壺・施釉陶器・奈良時代の須恵器・布目瓦と中世の土師器や瓦器などが包含されていた。特に3層とした最下層水田層には、周辺地区では殆ど確認できない中世土器細片の包含がある。

以下、主要な遺構を解説する。

67-O S

23区南端を走る区画溝。幅約0.39m・深さ約0.15mで、埋土は2.5Y7/1灰白色砂質土であった。北側に小畦畔が存在した事を痕跡で確認できる近代の溝。

50・69-O S

23区南端を東から西へ斜めに走行する大形暗渠と、それに取り付く暗渠である。ともに拳大の疊層の上層に2.5Y7/6明黄褐色粘質土が取り巻く堆積を示す。4-44区50-O Sから延びるもので、20世紀半ばの造成である。50-O Sは、幅約1.1～0.8m・深さ約0.55～0.4mである。遺物は、土師質土器3（炮烙・七輪・炬燧）・滑滑鉢・染付け8（皿・碗）・瓦類12（丸瓦・棧瓦・巴の軒丸・レンガ）などが出土した。69-O Sは、幅約0.6m・深さ約0.33m。埋土は拳大の疊層の上層に2.5Y7/6明黄褐色粘質土が覆う。遺物は、施釉陶器（天目）1片が出土した。

68-O S

23区西端で検出した溝。69-O Sに切られる。B水田とC水田の畦畔上段側の側溝と考えられる。幅約0.5m・深さ約0.26m。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色砂質土と上層が2.5Y7/3浅黄色粗砂混り砂質土であった。染付け1・瓦1が出土した。

57-OW

23区西端で検出した井戸。径約1.9m・深さ約0.72m。

59-OO

23区西端で検出した。長径0.76m以上・短径約0.77m・深さ約0.29m。

60・61・62-OO

下層奈良の土坑。

60-OOは23区中央西寄りで検出した。長径約3.65m・短径約1.56m・深さ約0.21m。

埋土は、上層が2.5Y7/3浅黄色マンガン混り粘質土、下層が2.5Y7/2灰黄色粘質土であった。土師器14・須恵器1が出土した。

61-OOは60-OOの西隣で検出した。長径約2.25m・短径約1.25m・深さ約0.12m。

埋土は2.5Y6/4にぶい黄色粘質土であった。

62-OOは61-OOの西隣で検出した。長径約1.39m・短径約1.14m・深さ約0.16m。

埋土は疊混り2.5Y6/4にぶい黄色粘質土。

81~85-OP

23区中央やや東寄りで検出した。埋土は2.5Y7/3浅黄色粘質土。

81-OPは径約0.89m・深さ約0.17m。遺物は、土師器3・須恵器1・瓦器1が出土した。

82-OPは径約0.77m・深さ約0.13m。

83-OPは径約0.81m・深さ約0.21m。須恵器甕1が出土。

84-OPは径約0.80m・深さ約0.12m。

85-OPは径約0.53m・深さ約0.09m。

70-OS

71-OSと平行する溝。幅1.24~0.44m・深さ0.21~0.13m。埋土は、上層が2.5Y6/6明黄褐色ブロック、間層として2.5Y7/3浅黄色細砂土、下層が2.5Y7/2灰黄色粗砂混り粘質土であった。遺物は、土師器1・須恵器3・陶器1が出土した。

71-OS

23区ほぼ中央を東西に横切る溝。幅0.97~0.80m・深さ0.17~0.11m。埋土は2.5Y7/3浅黄色細砂混り砂質土であった。遺物は、土師器25・須恵器7（环底部1）・瓦器1が出土した。

87-O X

23区西部で検出した。長径約4.4m・短径約4.1m・深さ約0.31m。遺物は、土師器3(羽釜1)・須恵器7(甕5・坏1)・施釉陶器3・染付け5・瓦類4(丸瓦2)が出土した。

88-O X

23区西端で検出した。長径約4.4m・短径3.28m以上・深さ約0.78m。須恵器1・染付け3(井碗1・行平1)が出土。

72-O S

小溝群。23区中央東寄りで検出した。幅約0.5~0.25m・深さは約0.1m。遺物は土師器20・染付け1が出土した。

63-O O

奈良期の土坑。23区東端で検出した。長径約2.07m・短径約1.20m・深さ約0.11m。埋土は10Y R7/8黄橙色マンガン混り砂質土であった。遺物は、施釉陶器1・染付け6(落し蓋1)・平瓦2が出土した。

64-O O

近代。23区南部で検出した。長径約1.36m・短径約0.66m・深さ約0.47m。施釉陶器2・染付け1・平瓦1が出土。

73-O S

23区南部西寄りで検出した。幅約0.4m・深さ約0.1m。埋土は2.5Y7/4浅黄色細砂混りの砂質土であった。

74・79-O S

23区南部で検出した溝。

74-O Sは、幅約0.5~0.3m・深さ約0.1m。埋土は2.5Y7/2灰黄色砂質土であった。

79-O Sは、幅0.45~0.30m・深さ約0.06m。

75・76-O S

23区中央で検出した溝。

75-O Sは、幅約0.27m・深さ約0.11m。

76-O Sは、幅約0.27m・深さ約0.08m。

埋土はともに2.5Y7/2灰黄色砂質土であった。

65-OO

23区西端で検出した奈良期の土坑。長径約1.3m・短径約1.2m・深さ約0.24m。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色砂疊混り粘質土。

77・78-OS

23区西端で検出した溝。

77-OSは、幅約0.83m・深さ約0.13m。

78-OSは、幅約0.47m・深さ約0.14m。

埋土はともに2.5Y6/2灰黄色砂質土であった。

86-OP

不定ピット。23区南端に位置する。長径約1.75m・短径1.0m以上・深さ約0.04m。

80-OS

小溝群。23区中央南寄りで検出した。幅0.5~0.3m・深さ0.09~0.05m。埋土は2.5Y7/3浅黄色砂質土。

66-OO

23区東端に位置し、大部分は調査区外に延びる。埋土は10YR6/1褐灰色細砂質土であった。

58-OW

23区西端で検出した。長径約0.97m・短径約0.86m・深さ約0.53m。

3 遺物

(1) a区2層地山直上より出土した須恵器口縁部破片。

(2)須恵器坏身の破片。平城宮IV~V型式。

(3)須恵器坏蓋。

(4) a区2層地山直上から出土の須恵器。

(5)須恵器坏底部破片。

(6)須恵器坏身破片。

(7) a区2層地山直上から出土した須恵器坏身破片。

(8) a区2層地山直上より出土した須恵器。

(9)69-OSから出土した瀬戸美濃系天目茶碗破片。復原底径4.8cm。

(10)87-OX周辺の上層で出土した碗底部破片。底径4.7cm・高台高1.0cm。

(11)87-OX周辺の上層で出土した丸碗。復原口径10.7cm・器高5.1cm・底径4.2cm。

- (12) 63-O O 灰褐色土から出土した、トチリ鍋の落し蓋形式の蓋。上面内部につまみを有し、釉を施してある。
- (13) d 区水田 2 層から出土した伊賀信楽焼系摺鉢体部の小破片。
- (14) 50-O S 暗渠疊から出土した摺鉢体部の破片。
- (15) c 区 2 層地山直上から出土した取っ手。
- (16) c 区 2 層地山直上から出土した、染付けの破片。内面蛇ノ目剥ぎ。復原口径13.1cm。
- (17) c 区 2 層地山直上から出土した丸碗底部の破片。底径4.6cm・高台高1.1cm。
- (18) 50-O S 暗渠疊より出土した肥前系陶磁の皿破片。高台は蛇ノ目凹形。底径9.9cm・高台高1.0cm。
- (19) c 区 2 層地山直上より出土のプリント紋の碗。復原口径10.2cm。「福寿」である。
- (20) d 区水田 2 層から出土した赤手釉の碗。底径3.5cm・高台高0.6cm。
- (21) a 区 2 層地山直上から出土の、「泉州麻生」に伴う焼塙壺の蓋である。型造りで内面に布目の痕跡顯著。黒くススけている。再利用されていたためである。
- (22) a 区 2 層地山直上から出土した、弥生土器壺底部の破片。底面に木の葉痕跡あり。中期の土器である。

第5項 24・25（9区含む）区

1 位置と層序（第71図）

調査前は、農地として利用されていた土地で、調査区の広さは 2 地区で約4200m²である。この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が改変されたと考えられる地域である。この調査区でも現在の耕作土及び床土の下には整地層が認められる。この整地層の時期は、飛行場建設時か戦後のものかを判断する資料に乏しい。またこの下には、耕作土、床上が認められる。これは飛行場建設時に廃絶した農地に伴うものと考えられ、この一群の堆積層の形成時期としては、上限を近世頃と漠然と推定している。この整地層を除去すると 24 区の南側部分では地山である疊層となるが、北側部分1200m²程の範囲では黄褐色を呈する微砂と粘土の混合層が広がっている。その最上層部分は、さらに古い厚さ20cm程の近世以前の整地層と考えられるもので、この層を除去すると、やはり黄褐色を呈する微砂と粘土の混合層が今度は、自然堆積層としてあり、浅い埋積谷状の地形を検出した。この谷地形の埋土は大きく上下 2 層に分けられ、上層からは瓦器等の中世以後の遺物が出土し、下層

からは平安時代の須恵器を主として、古墳時代から平安時代の遺物が出土した。堆積層を除去し終えたところで古墳時代終末ごろの遺物を出す遺構群を検出しているので古墳時代を上限とする地形であった。この深さ1m程の谷状地形も地山は、礫層である。

2 遺構（第72図）

大きく2面に分けて検出している。第1面は前述したように時期が近世を上限と考える耕作地の遺構である。溝や畦で区画されていたと考えられるが畦は削平により遺存していない。この他には、24区の谷状地形が埋没している部分で溝の中に瓦や石などを詰めた暗渠群を検出した。第2面とした遺構面は、削平のため24区の北側部分のみ遺存していた。谷地形を掘り下げていく過程でまず中世後半から末ごろの井戸（90・91・92・93-O W）や井戸からの水を流したと思われる水路を検出した。さらにこれらの遺構に切られるさらに古い遺構を検出している。谷地形の真ん中付近で幅2～5mの自然流路（106・107-O R）があり、この流路は、古墳時代から平安時代の遺物を多く包含する上砂で埋没していた。堆積土を除去すると深さは0.5mほどのもので、流路が二股に分かれた部分において拳大から人頭大の石を幅2m程に積み並べたもの（108-O X）を検出しており、流れを堰止めて水深が深くなる部分を造るためか、或いは、流れを渡るための施設と推定している。流路の時期はその出土遺物から7世紀の前半から9世紀頃と考えている。さらにこの流路に切られるより古い遺構として、この流路と重複した状態で細長い土壤群（96～98-O O）や建物状の遺構（105-O B）を検出しているが、それぞれの埋土から遺物の出土はなく時期は不明である。これらに類似した埋土をもち、掘方の一辺が70cm程の方形の土壤（95-O O）を流路の北側で検出しており、谷状地形の北側の削平されているあたりにさらに遺構があった可能性が指摘できる。



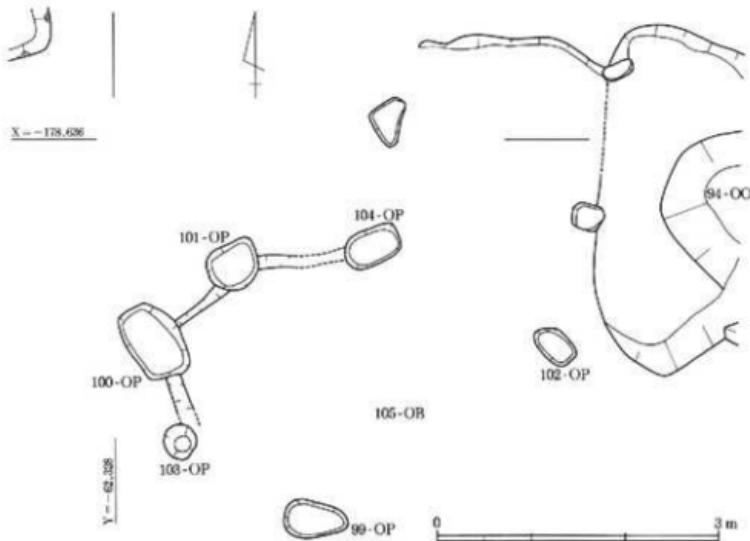
第71図 24・25(9区含む)区概略図

環状遺構 (108-O X)

拳大から人頭大の円礫の集積が、自然流路跡が二股に分流している部分で検出された。平面形が長方形に近い礫の集積は、図に示したようにそれぞれの流れを直線で切るように対になって検出した。集積礫の間には荒い砂と遺物があたかも流されて来て引っ掛かるよう堆積しており、水が流れていた時の集積であると推定できる。礫の種類は地山礫層に普通にみられる砂岩が主であるが、若干チャートや花崗岩も含まれていた。

柱穴群 (105-O B)

自然流路が分流して 2 本の流れに挟まれるように 10m四方の微高地が形成されており、その下流隅あたりで一辺30cm程の柱穴を 6 カ所検出している。それぞれの柱穴は、埋土に、この辺りでは検出していない茶黒色の砂混じり土が詰まっており、わざわざ埋土として運んだものと考えられるが、これらの柱穴を結ぶとその平面形は梢円になり、建物跡と推定するには疑問であるが、とりあえずそう分類しておく。



第72図 24区105-O B柱穴群検出状況図

第6項 79区

1 位置と層序（第73図、図版54・61・62）

長滻遺跡の東南部寄りで道路予定地の西南辺に当たり、25区の西、27区の南に隣接している。調査直前は水路の北側が資材置場と空地、南側が水田であった。標高は24.05mである。調査区の形状は直角の対辺が西南を向いた直角三角形であるが、水路により南側が直角三角形、北側が台形の2カ所に分断されている。調査面積は1408m²である。

調査により確認した土層は基本的に6層あり、第1・2層で近・現代の、第3層で近世の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4・5層上面で土坑、溝、流路、落ち込み、池を検出した。

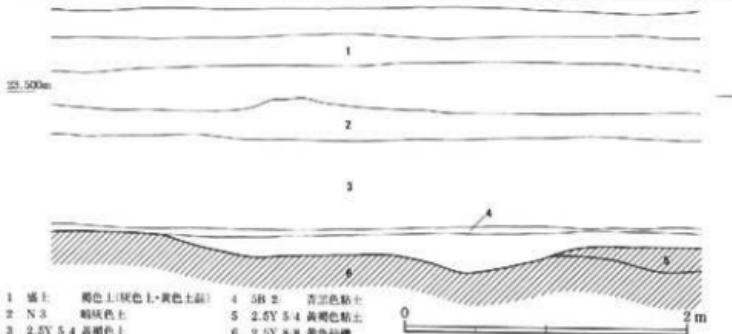
第1層 北側調査区に水平堆積している。層厚は0.65mを測る。盛土である。遺物は現代の陶磁器・瓦が出土した。

第2層 西南辺中央部で途切れている。上面の高さは23.40mである。層厚は0.2mを測る。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第3層 西北部の池（121-O L）に当たり、低い部分に堆積している。上面の高さは23.20mである。層厚は0.6mを測る。池（121-O L）の埋土である。遺物は近世以降



第73図 79区概略図



第74図 79区基本層序図

の陶磁器が出土した。

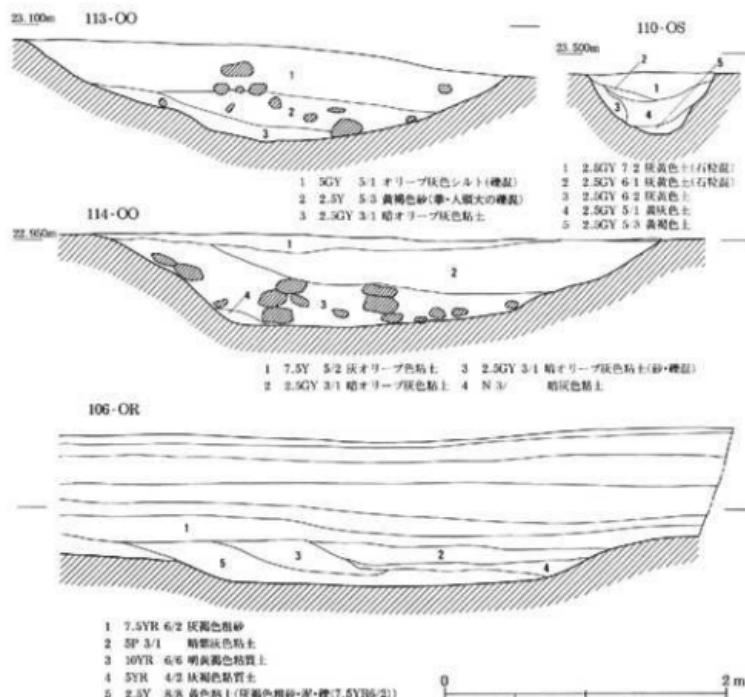
第4層 西北部の池に当たり、低い部分に堆積している。上面の高さは22.60mである。層厚は0.05mを測る。池(121-O L)の堆積土である。遺物は出土しなかった。

第5層 部分的に薄く残存している。上面の高さは22.55mである。地山である。遺物は出土しなかった。

第6層 全域に広がっている。上面の高さは22.45mである。段丘疊層である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

113-O O (第75図) 北側調査区の西南部で検出した屈曲した楕円形の土坑である。肩部長径5.4m・短径3.6m、底部長径4.6m・短径2.8m、深度0.7mを測る。断面形状は口



第75図 79区113・114-O O、110-O S、106-O R断面図

の開いた浅いU字形である。埋土は3層ある。遺物が出土した。

114—OO (第75図) 北側調査区の西南部で検出した不整椭円形の土坑である。肩部長径6.3m・短径3.4m、底部長径3.4m・短径1.8m、深度0.65mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は4層ある。遺物が出土した。

115—OO 南側調査区の西南部で検出した扇形の土坑である。長軸が西北方向を指す。西側は調査区外へ広がっている。肩部長辺2.4m・短辺1.0m、底部長辺1.6m・短辺0.6m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色粘土 (10Y R6/1) である。遺物は出土しなかった。

116—OO 南側調査区の西側中央部で検出した不定形の土坑である。肩部長径1.8m・短径0.8m、底部長径1.6m・短径0.6m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰青褐色土 (10Y R6/2) である。遺物は出土しなかった。

117—OS 中央部から北部まで東南方向に直線的に延びる溝である。検出長27.0m、幅1.0~1.5m、深度0.43mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土 (5 Y5/1) である。遺物は出土しなかった。

118—OS 中央部で検出した底辺が北を向いたL字形の溝である。検出長11.0m、幅1.0~1.5m、深度0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層あり、上から黄灰色砂質土 (2.5G Y5/1) が0.2m、黄灰色土 (2.5G Y6/1: 粘土・礫混じり) が0.1mである。遺物が出土した。

119—OS (第75図) 中央部で検出した湾曲した溝である。東南端は25区の溝に続き、西北端は114—OOに切られている。検出長11.0m、幅0.5~1.0m、深度0.4mを測る。断面形状はU字形である。埋土は5層ある。遺物は出土しなかった。

120—OS 中央部で検出した屈曲して延びる溝である。検出長8.0m、幅0.8m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層で、下から灰色粘土 (微砂混じり) が堆積していた。遺物が出土した。

106—OR (第75図) 南側調査区の東半部から北側調査区の西南部にまたがる流路である。検出面での平面形状は屈曲して東南から西北西に延びている。東南方向は24区の106—ORに続き、西北方向は121—OLにつながる。長さ34.5m、幅7.0~12.0m、深度は南側調査区で0.2m、北側調査区で0.4mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は5層ある。遺物は灰褐色粗砂から奈良時代の須恵器・土師器・石器が出土した。

120—OR 西北端部、121—OLの底部で検出した西北と東北の角に溝状の、長さ6.0m、

幅1.5mの突出部をもつ不整長方形の落ち込みである。西南西側は調査区外へ延びる。長軸が北北西～南南東方向を指す。長辺16.0m、短辺6.0m、1段目肩幅6.5m・深度0.4m、2段目肩幅4.0m・底幅3.0m・深度1.42mを測る。断面形状は2段で上部は口の開いた逆台形、下部は逆台形である。埋土は1層で、黒褐色粘土（10Y R2/3：小礫・粗砂混じり）である。遺物は出土しなかった。

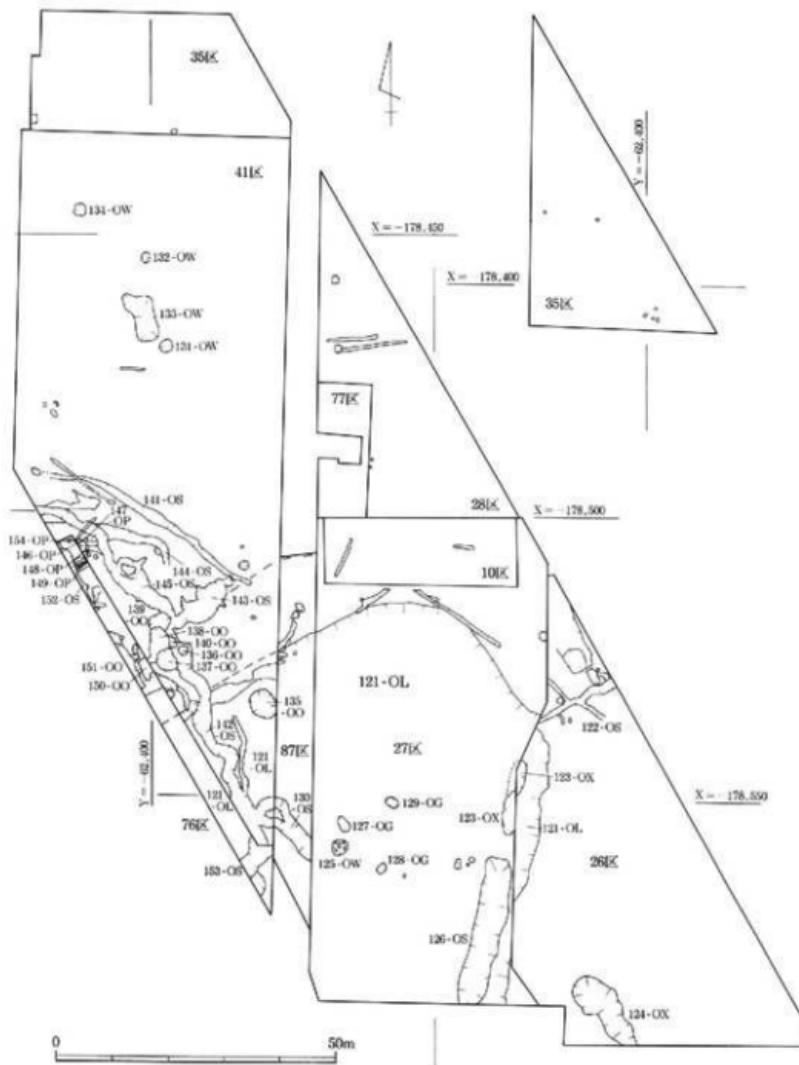
121-O L 北側調査区の中央～西北部で検出した東南に開く扇形の池である。北側は27区の121-O Lへつながり、西側は調査区外へ広がる。径16.5～19.5m、深度0.6mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は3層で、下からにぶい赤褐色粗砂（5Y R4/4：青黒色粘土混じり）が0.1m、青黒色粘土（5B2/）が0.1m、黄褐色土（2.5Y 5/4：礫混じり）が0.4mである。遺物は近世～近代の陶磁器・瓦が出土した。

第7項 26・27(10区含む)・28・35・41・76・77・87区

1 位置と層序（第76図）

長瀧遺跡のほぼ中央付近を占める調査区であり、調査前は農地として利用されていた比較的平坦な地形であった。調査区の広さは9地区で約13000m²で、この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が改変されたと考えられる地域である。この改変のため現代の耕作土及び床土の下には、他の多くの調査区同様に整地層が認められるが、この付近では厚さ20cm程の比較的薄い層となっている。その下位にはまた耕作土及び床土が認められ、これもまた他の調査区同様に飛行場建設時に廃絶した耕作地のものと考えられる。さらにこの一連の層の下位には、27区の大部分と41・76・87区の一部で厚さ0.5～1mの瓦等の廃材を多く含む整地層が認められるが、これは遺構の項で後述する池を埋め立てたものと考えている。41区の南側部分から76区にかけての地域では、自然堆積と推定できる褐色のシルトを主体とした厚さ20cm程の堆積が認められ、その下位で中世の遺構検出面となる。

その他の26・28・35・41・87区の北側部分等では、地山である段丘礫層或いは黄褐色粘土層が出土する。さらに下位の堆積として、前述の27区付近では池の堆積が、10cmほどの厚さで認められ、やはり前述した41区南側部分約2000m²程には、中世遺構面のベースとなっている灰色シルトを主体とする層が厚さ20cm程で広がっている。そのさらに下位では、部分的に黄色粘土と砂礫層が分布しており、浅い埋積谷の地形が検出される。



第76図 26・27(10区含む)・28・35・41・76・77・87区概略図

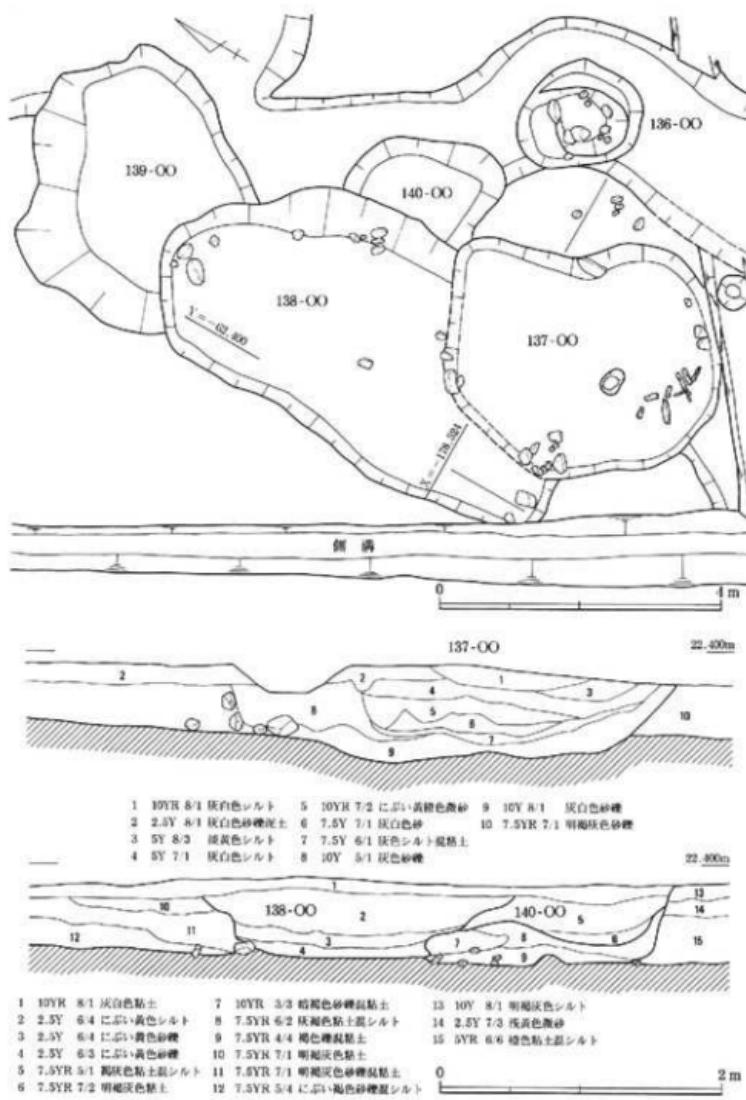
2 遺構（第77～81図）

この調査地域でも前述の24・25区同様に遺構面を大きく2面に分けて検出している。第1面は、現耕作土及び床土を除去したレベルで検出されるもので、近世を上限と推定している。この面で検出される遺構は耕作地に関連した遺構で、不定形に耕作地が区画されていたことが、水路等から半うじてわかる状態で検出している。

27区は大半が池跡とその堤の基底部跡で、池跡はその一部が26・41・76・87区へと広がっており、不定形な約1万m²程の池の約半分を検出したと考えている。この池の堤の痕跡は41区付近で検出しておらず、2条の杭列及び溝からその幅は約11mと推定している。この池は灌漑用の溜池と考えられ、池へ貯水用の水を引いたと考えられる水路（122-O S）及び耕作地へ水を灌漑したと考える水路（141-O S）をそれぞれ検出している。この他の遺構として、井戸（131・132・134-OW）や池底の堤付近の大溝（123-O X、126-O S）等があるが、池周辺の谷状地形以外の部分は近世以降の削平が激しく遺構がほとんど遺存していない。

第2面とした遺構面は27・87区の池底部分と、41・76区の池底と堤基底部下及び池の北西部分の約8000m²に遺存しており、古墳時代終末から中世にかけての遺構群である。耕作地との関連の薄い遺構群と考えており、むしろ集落等との関連性を推定している。この面で最も下位で検出される古相の遺構としては、部分的に人工的に改変されている可能性があるが自然流路であろうと推察している溝状遺構（142～145-O S、152・153-O S）がある。また、この流路に切られるピット群（146～149-O P、154-O P）があり、L字状にあるところから棚のような施設を推定している。

これらの遺構の時期を推定する資料としては、この流路から出土する遺物のみで、古墳時代終末から平安時代初頭の土器類が比較的多量に出土していることから、流路については遺物の示す存続期間を考えている。柱穴については時期を示す資料に乏しい。その他には、池の堆積層を除去して、池の底部であるシルト混じりの黄色粘土が多い段丘疊層面で検出された井戸（125-OW）、土壙群（127～129-O G）等がある。井戸は、木組みの井筒をもつ丁寧な造りで、出土遺物から奈良時代末頃を推定している。土壙群は墓ではないかと考えており、出土遺物から平安時代の前半を推定している。また、41・76区の第1面で検出した堤より北西部分でも土坑群（136～140-O O、150-O O）等を検出している。これらの土坑群は貯蔵施設と推定しており、時期を出土遺物から平安時代後半から南北朝と推定している。



第77図 41区136~140-O O平面・断面図

池跡 26・27・41・76・87区 (121-O L)

27区を中心に多くの調査区に跨がって検出している遺構である。現耕作土下にある厚い盛り土を除去したレベルで、瓦片等を多く包含する池底堆積と推定される厚さ10cm程の灰黒色粘土層が検出される。この粘土層の検出される範囲が池の底部と考えており、約1500m²を検出している。この粘土層が認められる範囲の外側には、幅20m程の傾斜して高くななる地形があり、さらにその外側は、また比較的平坦な地形となっている。

41・76区では、その傾斜が途切れて平坦になる地域に約12mの間隔で2条の杭列を検出している。その両杭列に沿ってそれに伴う幅2.5mのブロック状の土の集積を示す堆積が帯状に認められ、築堤の遺存したものと考えている。これによりこの傾斜部分から内側の範囲を池本体と考えており、その外側に基底部幅が約12mの築堤があったと推定している。面積約1万m²を推定している池の半分程を検出しており、堤に沿った池底部で土坑(135-O O)や溝状遺構(26区123-O X、27区123-O X・126-O S)を検出している。いずれの遺構も池底堆積と同じ灰黒色粘土のみが堆積しており、池に先行する遺構であるとも考えられるが、一応池に伴うものと考えている。

上坑群 (136~140・150-O O)

41区の南寄りで5基の土坑が群を成すように検出されている。3時期の遺構の切り合いが認められ、本来は1、2基単位であった施設と考えられる。139-O Oと140-O Oとした土坑が最も古い段階のもので共に138-O Oに切られているが、139-O Oと140-O Oの間では遺構の切り合い関係が無く、その規模などから同時期のものと考えている。

次に、これらを切っている138-O Oとした長楕円形を呈する土坑は、76区へ続き、一段浅くなつて不定形に広がっている。

さらに、138-O Oを切って137-O Oとした土坑があり、掘方の一部が現代の暗渠で切られている以外は遺構の遺存状態は非常に良く、松の枝が覆い状にあったものが落ち込んだ状態で検出された。また、その上に堆積した土から完形の瓦器碗が出土しており、北東にある136-O Oとした土坑と併存して第2面で検出した遺構の中で最も後出のものと推定しており、南北朝の頃を比定している。

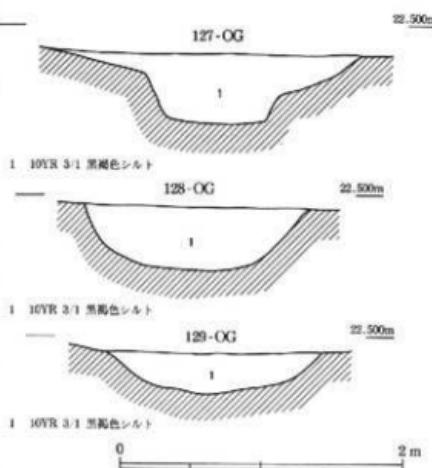
土壙墓群 (127~129-O G)

27区の池底の堆積土を除去したレベルで、地山である疊層を掘り込んだ楕円形の土壙を3基検出している。いずれの土壙も黒褐色のシルトで埋まっており、ほぼ同じ頃の遺構と考えられ、出土した土器から平安時代前半頃を推定している。各土壙での遺物の出土状況

は、もともと完形品かそれに近い状態の物が1個体だけ埋納されていたようであり、骨片等の出土は皆無であったが、状況から土壤墓とその副葬品と考えている。

井戸（125-O W）

前述の土壤墓群に近接して検出した遺構で方形と円形が一つになった様な平面形の掘方をもった木組みの遺構である。地上部の遺存状態も良好で井筒の上端部周辺には、拳大から人頭大の石を四方に敷き並べており、さらに、外側には一辺1.3~1.4mの建物の存在を示す円形の柱穴を

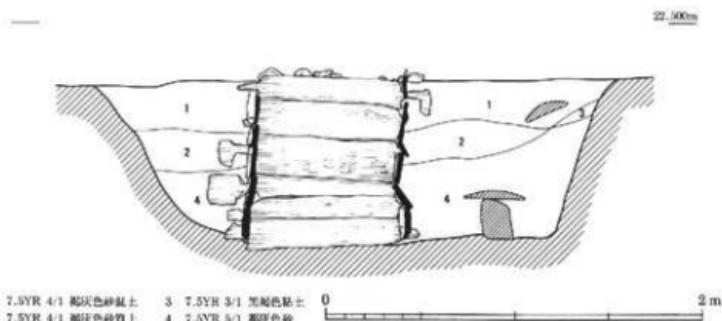
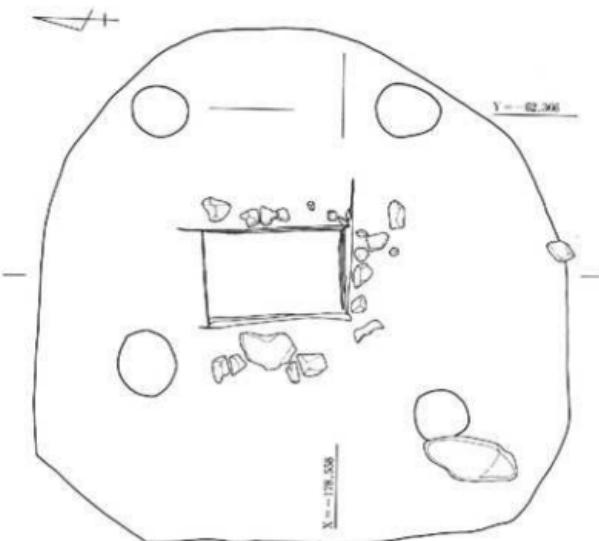


第78図 27区127~129-O G断面図

4カ所検出しており覆い屋を有していたと推定している。逆にこれらの施設から井戸枠はなかったと考えている。井筒は、0.4m×0.7mの長方形で、長さ、幅とも不揃いの板の両端にコの字状の抉り込みを上下にもつ部材を、抉り込みを合わせながら長辺、短辺を交互に6段組み上げている。井筒内の堆積は大きく3層に分層でき、上層はブロック状の堆積で、埋め戻したことを示すものと考えられる。中・下層は自然の堆積であるが、その厚さが井戸の深さの6割程を占め、最下層から井筒上端付近の石敷きのものと考えられる疊が下層の砂に多数混在しており、この堆積も井戸の廃絶後のものと考えている。この中・下層の境あたりで斎車と完形の木鍤が出土しており、井戸廃絶に伴い何等かの祭祀を行ったのではないかと推察している。その後放置されていた井戸が最終的には埋め戻されたと考えている。井戸の時期としては出土遺物から奈良時代末を推定している。

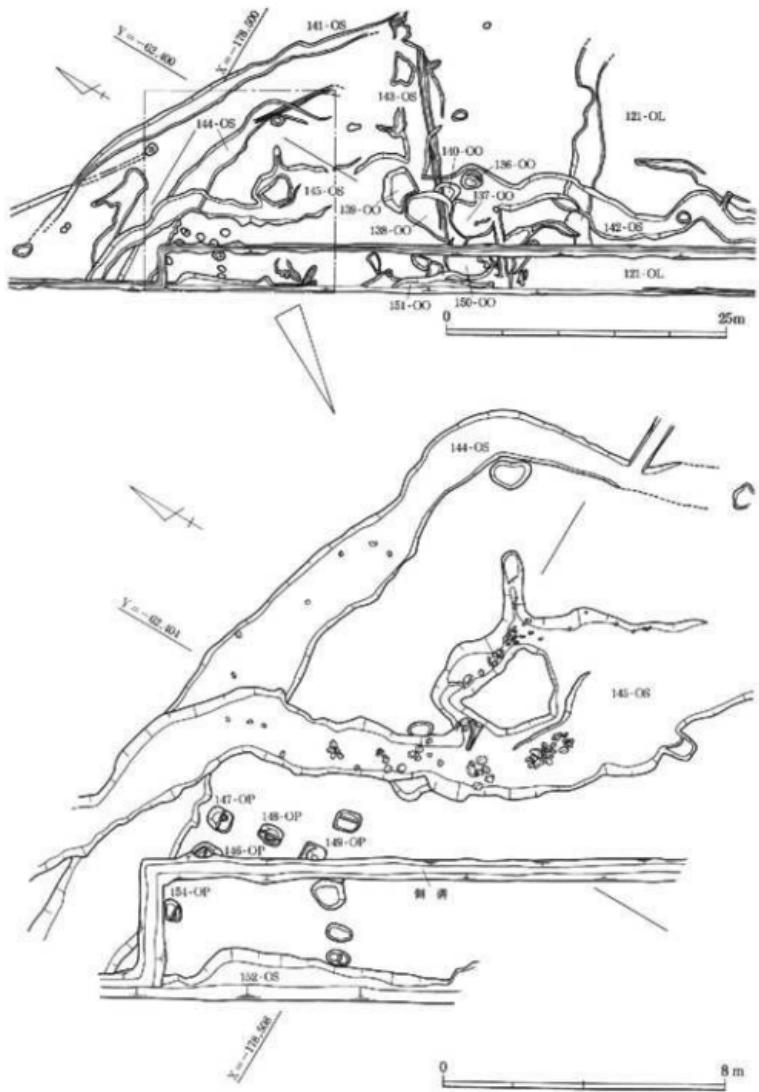
自然流路（130・142~145・153-O S）

その大部分を検出している41区では、幅2~5mでいくぶん蛇行しながら南東から北西へ延びる流れである。検出した総長約80mの両端では、共に南西へ大きく蛇行する様子を示しており、段丘面上の比較的軟質部分を浸食して流路を形成していると考えている。図でも分かるようにその流れは143-O S→144-O S→142-O Sへと幾度も位置を変えている。その最終段階が、柱穴群を切り、土坑群に切られている流路で、多量の遺物が出土してい



第79図 27区125-OW平面・断面図

る。この流路からの遺物の出土状況は、流れの真っ直ぐに延びる部分の約60mにわたり満遍なく出土しているが、流路北西部の小さな中州がある地点では、ほぼ完形の大型土師器鉢が拳大から人頭大の砾群にあたかも引っ掛けた状態で出土しており、砾を用いた構を推定している。時期としては、出土遺物から古墳時代の終末から奈良時代頃を考えている。



第80圖 41°76'區142~145—O S平面圖

柱穴群 (146~149・154~O P)

前述した自然流路が大きく直角に近く曲がる地点で検出している一群である。それぞれ一辺0.5~0.7m程のしっかりとした掘方をもつ柱穴で、埋土は付近の褐色シルトとは異なる黒褐色の粘土混じりシルトの明確なものであった。検出したのは、図示したようにL字状に2間ずつの5カ所だけであり、橢様のそうした施設であろうと推定している。時期としては、遺物の出土が皆無のため直接的に推定できないが、間接的には前述の自然流路のうち最後の41区の142~145-O Sとした流れに掘方の一部が浸食されていることから、この流路以前と考えられるが、柱穴群の検出状況から判断するとはば同時期に近いと推定している。

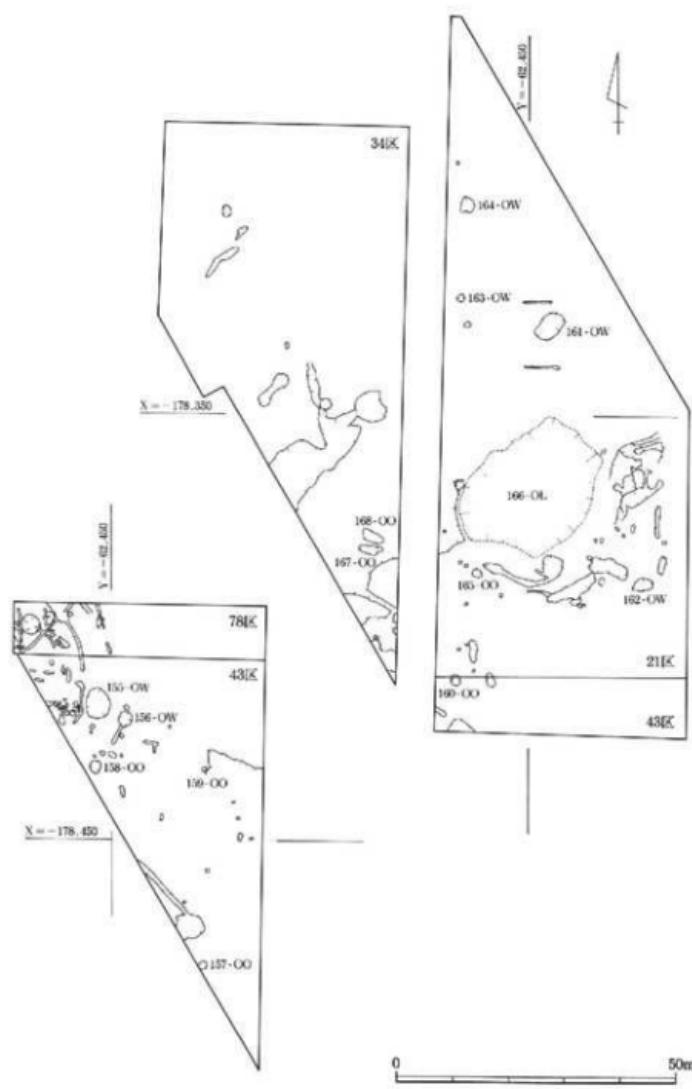


第81図 41・76区柱穴群平面図

第8項 21・34・43・78区

1 位置と層序 (第82図)

前項で報告した26区以下の地域と同様に、長流遺跡のほぼ中央に位置し、調査前は農地



第82図 21・34・43・78区概略図

として利用されていた。35・43・78区と34区の間の里道を隔てて一段低くなる耕作地の区画になっており現況としては東から西へ低くなっている地域である。調査区の広さは4地区で約9500m²で、この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が改変されたと考えられる地域である。この改変のため現代の耕作土及び床土の下には、他の多くの調査区同様に飛行場建設時か或いは、戦後に耕作地を再造成した時のものと考えられる整地層が認められる。この整地層の厚さは、43区から21区にかけては厚さ10cm程に薄くなってしまっており、一段低くなっている34区では厚さ20cm程となっている。この整地層のさらに下位においては、この地区では戦前の耕作土及び床土と考えられる土層は明確には認められず、41区の南側部分であったような中世から近世頃の遺物を含むシルト質の堆積が10~20cmの厚さで堆積している。この堆積層は43区西側では、厚さ1~5cm程の薄い堆積が幾層も認められ、それぞれが近世頃の耕作に伴う堆積と考えられる。この地域とは別に、間に若干の礫層の露出する地域を挟んだ21区の中央部分では、同様のシルト質の堆積が認められ、この堆積は前述の43区とは異なり耕作とは無関係と考えられる。それらを除去するとそのさらに下位においては、この地域の南北両端にあたる43区の南部分や21区及び34区の部分では、地山である段丘礫層が、それらに挟まれた中央及び西側では乾痕の認められる黄色粘土層が検出される状況である。

2 遺構（第83図）

この地域では、前記した整地層を除去すると、21区及び34区の北側半分と43区の南端部分の約3500m²程の範囲においていきなり地山である段丘礫層上面となる。その他の範囲では、シルト質の土層が認められ、その堆積を除去すると周囲と同様の礫層と黄色粘土層の地山面が検出される。この地域で検出される遺構面は前記の2種類の地山面であるが、後世の削平のため地形的には比較的平坦であり、中世以前の遺構と近世以後の遺構がこの面で同時に検出される。この大きく分類した2時期の遺構は、遺構内に堆積している土の連いで容易に区別でき、灰黒色~灰色を呈するものは近世以降のものであると判断できた。この時期の遺構としては、43・78区西端部の約500m²で、前記のシルト質の堆積を掘り下げていく過程で小溝を若干検出しておらず、畑の歴の痕跡と考えている。また、21区では、中央部付近で長径30m、短径20m程の池（166-O L）の痕跡を検出している。他に、この池の南東で掘方の平面形が上部では長椭円形であるが、0.5m程の深さでは長方形の井戸（162-OW）や同じく池の北側で2基の井戸（163・164-OW）を検出している。これらの21区で検出した遺構群はいずれも耕作地に伴うものとは考えにくい。34区では、近

世の遺構は全く認められなかった。次に、この遺構面の近世以外の時期と考えられる中世以前の遺構であるが、それは43区から21区にかけて多数検出している。これらもその遺構内の堆積から灰褐色に近いものから茶黒色に近いシルト混じり粘土のものまで幾種類かに分類できるが、時期を推定し得るような遺物が出土したのは2基の井戸（155・161-OW）と土壙（160-OO）が1基だけで、他の不定形土坑を主体とした遺構はこれら3基の遺構内堆積との比較による類推である。21区と里道を隔てて西側に位置する34区でもやはり不定形土坑（167・168-OO）が2基検出されているだけである。この34区南側では、こうした中世の遺構に切られている自然流路の痕跡が認められ、前述した41区周辺で検出している自然流路と同様であろうと考えている。

池跡（166-OL）

近世の遺構であることは検出層位と遺物から容易に推察できるが、その開削時期については不明である。この池の南側周囲を取り巻くように、中世頃のものであろうと漠然と推定している不定形の土坑や溝を検出しているが、これらとの位置関係から相互に規制しあっているとも考えられることから、この池の時期を中世以前まで遡らせて考えることもできる。池の検出状況は40m×30mの不定形な平面形を呈しており、池本体にあたる窪地部分の周辺では、堤の存在を示す痕跡は全く認められなかった。このため、池の用途としては水利以外を推察したほうがよいと考えている。

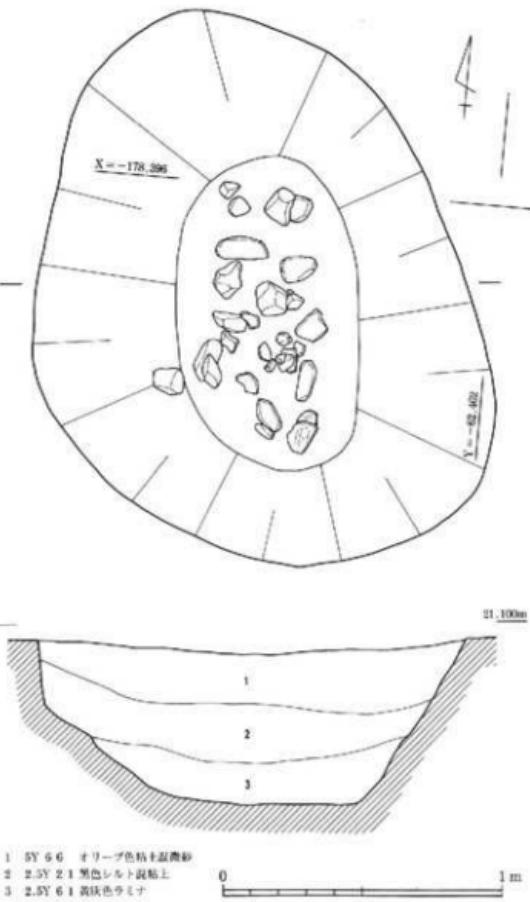
井戸（155・156-OW）

155-OWとした井戸は、43区の中央部西側で検出した径4～5mの浅い鉢状の掘方をもつ。深さが60cmしかないため検出面である黄色粘土層とその下の疊層の途中まで達しているだけで、湧水を得るのに適した深度になっていないと考えられる。この南東に近接して検出した156-OWとした井戸は径2m、深さ1m程の素掘りであるが、疊層の上部の湧水レベルに達しており、この井戸の方が水を得るには適していたと推察できる。この2基の井戸は共に中世後半で同時期のものと考えられ、対をなすものとして156-OWで得た水を155-OWで溜めていたものと考えている。

中世土壙（157・158・160・165-OO）

43区と21区の境で両地区に跨って検出している長径2m、短径1.5m、深さ0.55mの平面橢円形の土壙（160-OO）である。検出面は黄色粘土層であるが厚さ10cm程と薄くなる地域で疊層が露呈する地域に近く、掘方の大部分はこの疊層を掘り下げた状態となる。土壙底部は1.0m×0.5m程の範囲が平坦に近い状態に整形されており、拳大から子供の頭

大の礫を疎らに散在している。出土遺物としては、土壤底の中央付近で瓦器碗が2個体発見され、土圧に壊された状況を示して出土しているほかは、骨片等何も認められなかった。が、検出状況から墓の可能性が有力と考えられる遺構である。この他に、43区では2基(157・158-OO)、21区では1基(165-OO)の合計4基の類似した土壤を20m~40mの間隔で検出している。これらからは礫も遺物も出土せず性格はほとんど不明であるが、160-OOとした土壤同様に散在する土壤墓である可能性が最も高いと考えている。



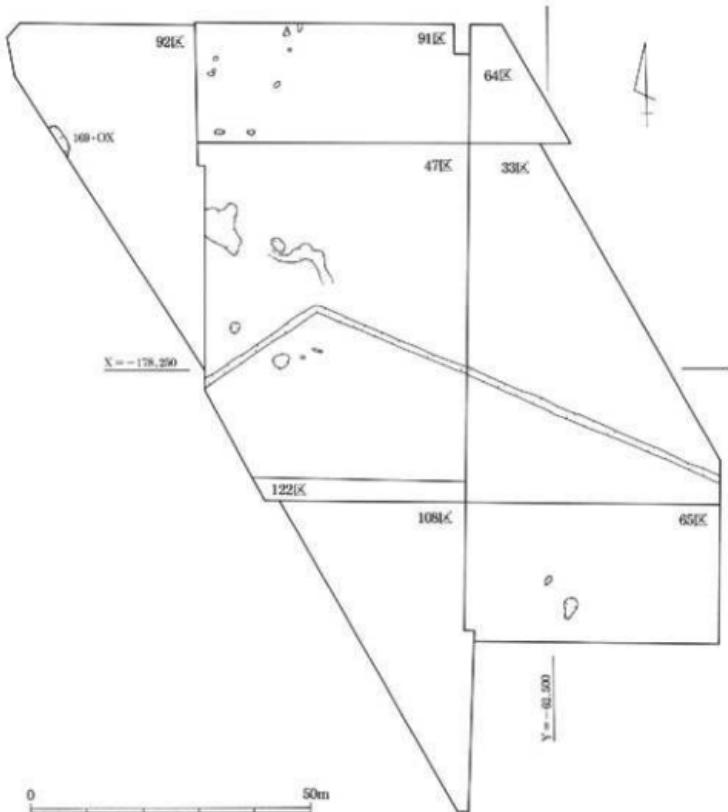
第83図 43区160-OO平面・断面図

第9項 33・47・64・65・91・92・108・122区

1 位置と層序 (第84図)

長塗遺跡の中央付近からやや北西に寄った地域で、調査前は、108区は倉庫の一部とし

て、92区は宅地、91区は工場として利用されていた地域である。農地であった地区以外の91・92・108区では現代の耕作土の上に盛り土をする事で地形が起伏をもって見えるが、農地であった頃はほぼ全域にわたり平坦であった。調査区の広さは7地区で約1万m²であり、この地域もまた旧陸軍飛行場の建設時に、地形が改変されたと考えられる地域である。この改変のため現代の耕作土及び床土の下には、他の多くの調査区同様に飛行場建設時か或いは、戦後に耕作地を再造造成した時のものと考えられる厚さ20cm程の整地層が認められる。この整地層の下位は、33・47・64・65・91区と92・108区の大部分では地山となる。



第84図 33・47・64・65・91・92・108・122区概略図

このため近世以前の古い堆積層は削平により全く失われており、削平が大規模であったことがわかる。ただ、前述した108区の南端と92区の北西端で地山地形が低くなり始めており、近世頃の堆積と考えられるものが一部遺存していたため削平の特に激しい範囲が1万数千m²と推定できる。地山の状況としては大部分で疊層が露出する状況であるが、47区の西側部分を中心に108区の一部にかけて黄色粘土層が最大20cmの厚さで認められ、削平される以前は地山地形としては起伏のある地域であったと考えられる。

2 遺構

この地域は前記のように旧飛行場建設時の削平のため地山の形状をさらに変更しているため全ての地域においてこの工事以前の遺構は検出されなかった。従って削平以前の状況を調査結果だけから推察することはできない。遺構写真で見られる土坑、溝、轍等は戦争関連の遺構で、キャタピラ等は戦後の農地再造成の痕跡と考えられ、これらのものも地形が大きく変化していることを如実に示している。

第10項 11・46区

1 位置と層序（第85・86図）

本調査区は、宅地及び耕地として利用されていた。

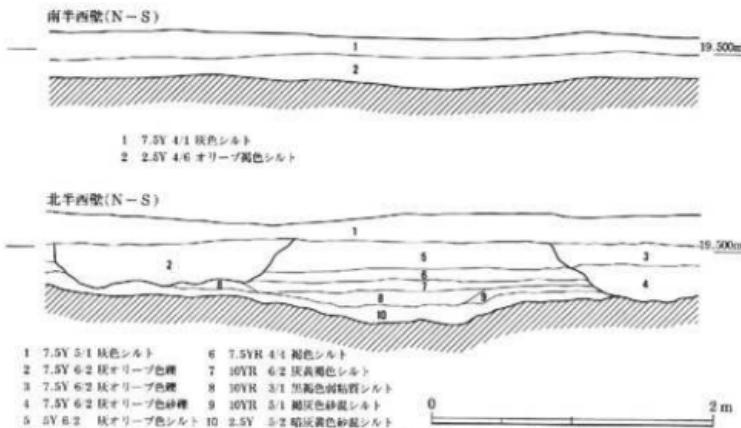
調査面積は約1846m²である。

戦前戦後の大規模な土地改変によってかなりの削平を受けており、畑地には随所で東西方向の排水施設、石敷や瓦敷暗渠が施されている。

調査区南半は現代耕作土・床土層（第1層）・耕作に伴う整地層の直下に地山が検出されるのみである。遺物は整地層に近世陶磁器が含まれる。調査区北半は、地山が北西方向に傾斜しているため、現代耕作土・床土層の下層に近世包含層（第2層）・中世包含層（第3層）・中世以前の包含層（第4層）が確認できる。いずれの包含層も0.1m前後とごく僅かな堆積で、遺物も近世陶磁器・瓦器・須恵器の破片がごく僅か出土したのみである。



第85図 11・46区概略図

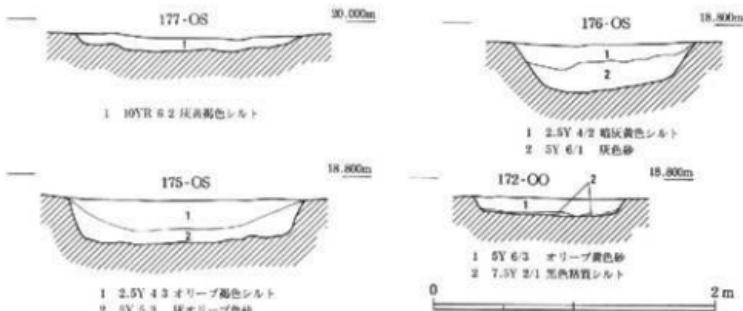


第86図 46区基本層序図

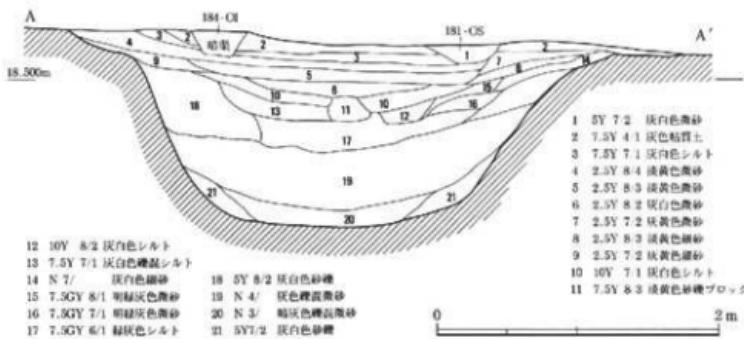
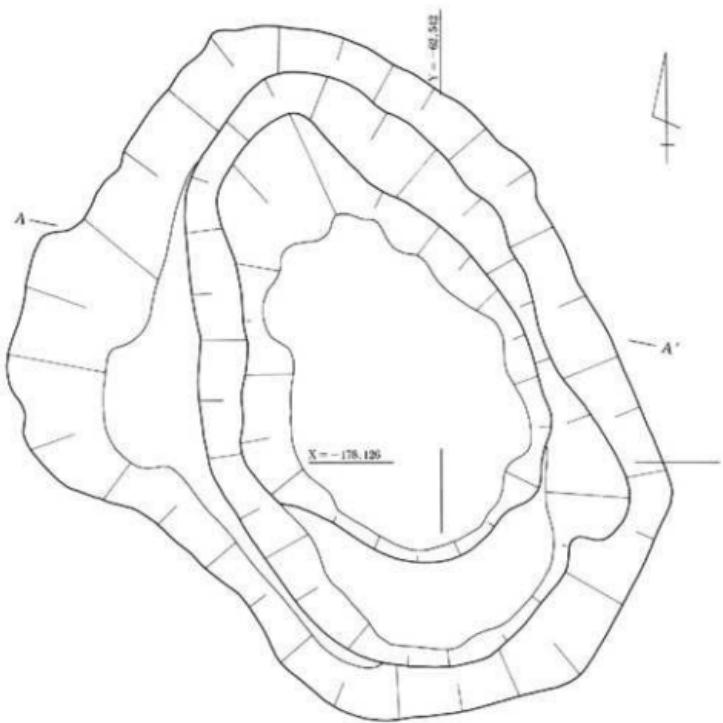
2 遺構 (第87・88図)

46区北半においては、地山直上に近世遺構の跡溝が数条検出された。東西方向(179-OZ)と南北方向(178-OZ)の2方向があるが、いずれも浅く埋土は灰色シルトで時期差はないと思われる。土師器の細片が出土する。また、南東から北西方向に流れる近世の自然流路状の溝(177-OS)が検出された。しかしながら、畠地となった時点で削平を受けており溝底部の痕跡を残すのみである。近世陶磁器が出土する。

11区北半は、近現代の排水施設によって良好な遺存状態とは言いたい。部分的に近世の焼土壌(172-OO)、南北・東西方向の溝(173・174-OS)及び中世の溝(176-OS)



第87図 46区175~177-OS・172-OO断面図



第88図 11区186-OX平面・断面図

S)、落込み(170・171-O O)を検出した。瓦器片が出土する。

186-O X

11区で検出した湧水土坑(淵)である。長庵遺跡から安松遺跡にかけて検出した自然流路源流部の湧水点にあたる。湧き出た水は複雑に蛇行し流路の離合集散を繰り返しながら北西方向に向かい小さな谷状の地形を形成している。流路南側にはほとんど遺構の検出はない。もとの標高が高く、旧飛行場建設時に大きく削平を受けたために消滅したものである。日根郡長瀬村「切岡」にみえる旧蟻通神社の境内域にあたると思われ、調査では境内域と谷部との間やその周囲を近世溝が巡っているのが確認された。

長径5.1m、短径3.4mの不整橢円形を示す。深度は1.3mをはかる。断面形状は部分的にテラス状の段を有するが基本的には口の開いたU字形を示す。埋土は上層部層厚0.1m程でレンズ状に堆積し灰白や淡黄色を示す微砂が多い。中層から下層にかけては比較的層厚もあり、灰色土系の砂礫や微砂が堆積する。埋土中からは羽釜・瓦質土器・瓦片等の中世遺物が松葉などの植物遺体とともに出土した。

湧水の速度は速く、調査中溢れた水が西側のテラス状の窪みから谷部へと流れ込む様子が確認出来た。近世の水溜め遺構も重複して存在し、境内域と谷部の間を流れる。

第11項 74区

1 位置と層序(第89・90図)

本調査区は、戦後屋敷を取り壊し移転した後、畠地として耕作していた一角であるという。調査面積は、837m²である。

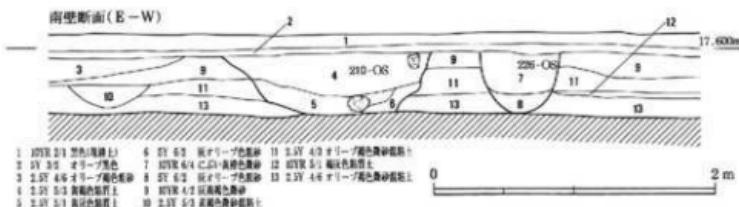
基本層序は現代耕作土・床土層(第1層)、近現代包含層(第2層)、近世包含層(第3層)である。近世以降居住空間であったためか、各層が薄く水平に堆積し大きな変化は見られない。60区、63区など付近で検出された谷部と様相を異にしており、一段高く全体的に黄褐色のシルト層である。

2 遺構(第91・92図)

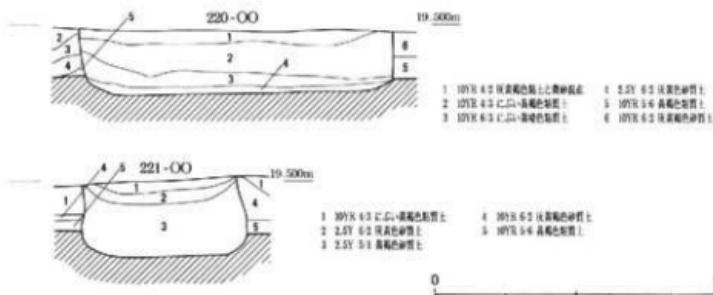
南北方向の中世溝(225-O S)を1条検出した以外、近現代の溝、井戸、土坑群である。特に井戸



第89図 74区概略図



第90図 74区基本層序図



第91図 74区224-OS、220・221-OO断面図

が多く(211~214-OW)、近世陶磁器と瓦が大量に廃棄されている。

土壤には焼土を含むものが多い。遺構内には豊富な各種近世遺物とともに現代の遺物の混入が多くみられ、近世に井戸を伴う屋敷があったことは想像に難くないが、検出面が比較的上層からであり、また埋土も新しく存続時期・廃絶時期ともに確定し得ない。現代の

可能性も高く、74区については今後の詳細な遺物の検討を待つことにしたい。

第12項 57・60・63・75・ 80~82区

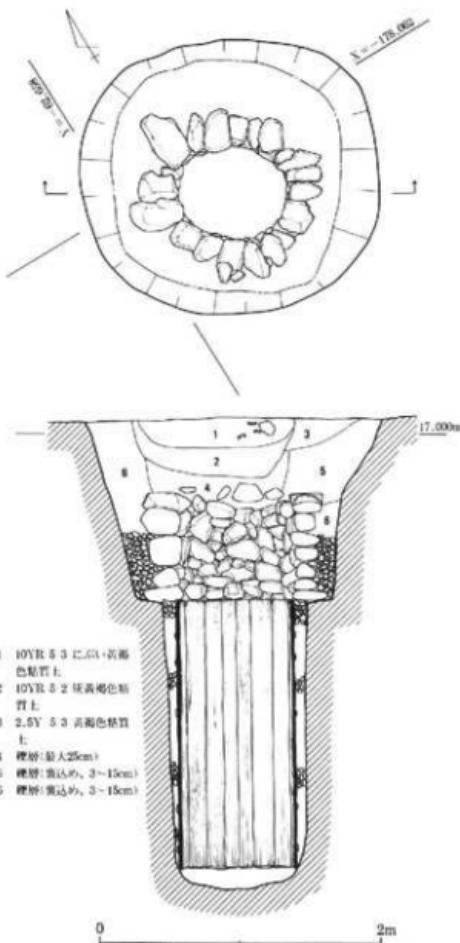
長池遺跡の北西端部東側一帯にあたる。調査前の現況は工場や居宅などのほか資材置場や農地などに供されていた。調査地の一部は旧飛行場メイン滑走路跡地にあたり、後に調査地内に建設された主要施設を外れた場所に一部遺存していた。断面にはっきりと滑走路のコンクリートが認められる。

1 位置と層序 (第93~97図)
 調査地は利用目的の違いにより、形状は方形・台形・不整多角形などさまざまである。調査地は連続して北西方向に長く連なる。

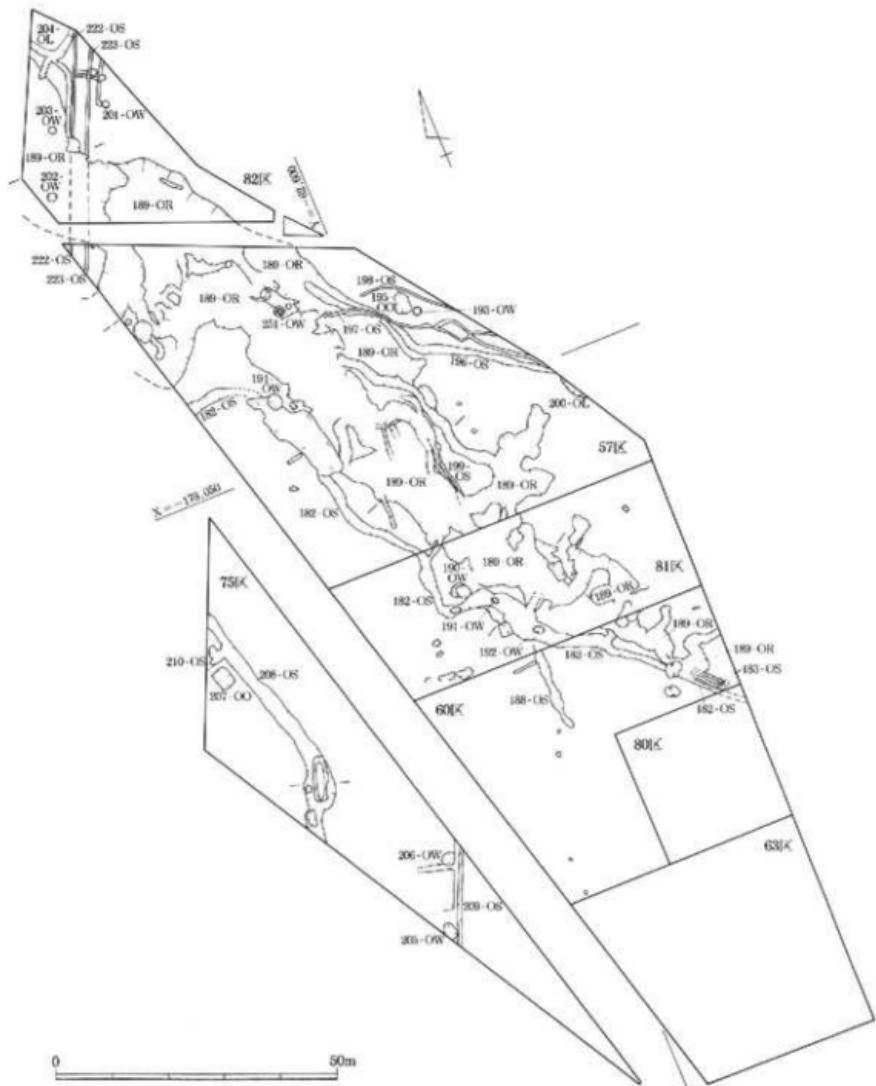
57区の標高は18.5mをはかる。

第1層は現代の整地土で、層厚0.08mをはかる。第2層は戦後の耕作上で層厚0.1~0.25mを

はかる。第3層は床土で層厚0.05~0.12mをはかる。第4層は中世包含層で層厚0.8~0.12mをはかる。第5層は189-O R谷部上層の埋土で層厚0.05~0.1mをはかる。第6層から第8層は谷部の一時期の流路埋土である。



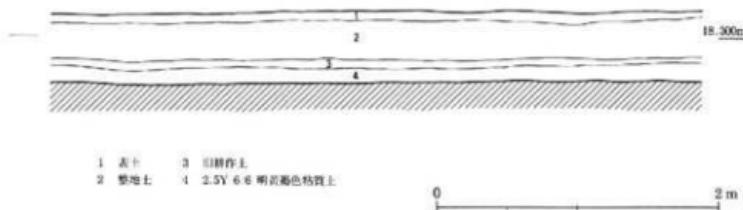
第92図 74区213-OW平面・断面図



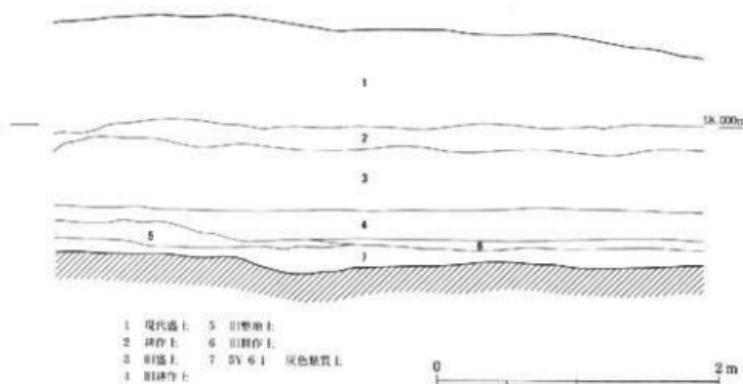
第93図 57・60・63・75・80~82区概略図



第94図 57区基本層序図



第95図 60区基本層序図



第96図 75区基本層序図

60区の標高18.5mをはかる。第1層から第4層はともに戦後のものである。調査地北東隅部に遺構の集中を見るのみで、ほとんどは削平を受ける。

63区の標高18.5mをはかる。調査地のはほとんどは深度約1mまで搅乱を受ける。戦前・戦後の耕作土や整地土は確認出来ない。

75区の標高は北側で18.1mをはかるが、南側はさらに約1m程度盛土される。第2層から第4層と第6層は新旧の耕作上で、第5層は耕作地造成のための整地土である。地山面で水溜め状の土坑と耕作時の踏み込み跡を検出している。埋土は第7層と同じである。第7層は耕作土かもしれない。

80区は居住用地で盛土・整地される。標高・層序とも60区と変わらない。北東端部に溝の埋土層が確認されるのみである。

81区の標高と層序は57区と変わらない。工場建物の基礎や整地による擾乱が顕著に見られる。

82区の標高18.0mをはかる。第1層から第3層までは整地層である。第4層は耕作上でいずれも戦後のものである。第5層から第7層は204-O L埋土である。第5層は旧飛行場建設時の整地土である。旧熊野街道の北西側側溝である222-O Sも埋設されている。



第97図 82区基本層序図

2 遺構（第98～104図）

調査では「旧蟻通神社」境内域の北端部域と周囲を巡る溝や東側を大きく蛇行しながら北西方向に向かう自然流路のほか旧熊野街道の側溝と考えられ並進する溝などを検出した。82区北西壁面に残る「旧飛行場滑走路」跡

調査地の現況は北西側隅部を除き大部分が資材置場に供されていた。北西側は現在の道路部分に面している。調査対象地域内の可能なかぎりの面積を調査している。北西側や西側には樹齢数十年と思われる櫟が数本あり切り株の際まで調査したが平面的には検出していない。断面精査中滑走路のコンクリートが水平方向に敷かれているのを確認した。畦畔

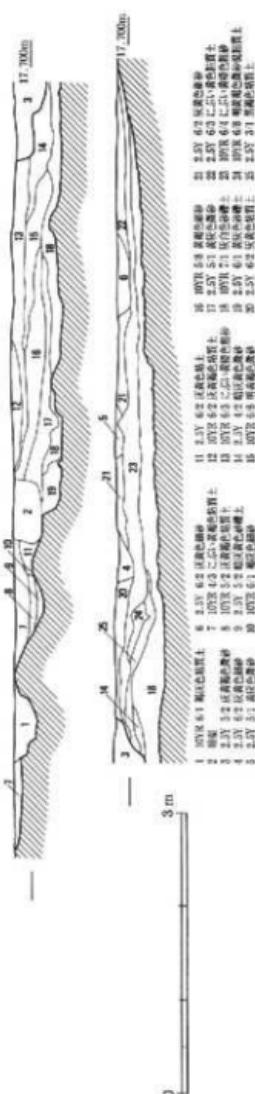
や土壌に転用されているものと同様に砂の含有率が高いのが肉眼でも良く判る。谷部最上層上に旧耕作土の痕跡が残る。旧耕作土除去後整地された上に構築されている。滑走路の土層には耕作土ではなく戦後の開墾を免れたようである。遺存した一因には樹木の存在も考えられよう。検出した滑走路跡は断面層序やその遺存状態から現位置を保っているものと考えている。標高17.36mで検出した。厚み6~7cmをはかる。僅か7mの範囲の遺存であるため、滑走路の勾配角度を割出す事は出来ないが、戦後の開墾がコンクリートを剥がし苦労して耕作地を造成したと聞き及んでいるので、戦後の耕作土の標高から角度を割出す事も可能であると考える。

「旧蟻通神社」境内域北端部の範囲

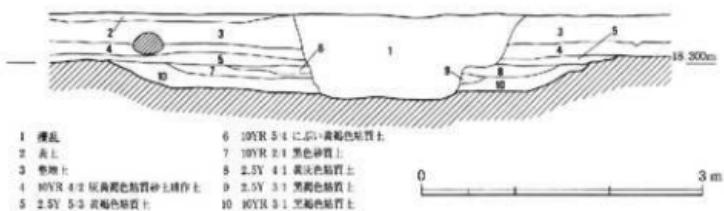
75区208—O S 東側や82区を除く182—O S (第93図)
西側は旧飛行場建設による削平が著しい。遺構は戦後のものや深度のあるものを除いてほとんど遺存しない。中位段丘面内のテラス状に突出する地形上に位置していたと考えられる。周囲より高い部分が削平を受けたため、「旧蟻通神社」域裾部の低い部分の遺構のみ遺存している。神社域周囲を巡る溝によりその範囲をとらえることが出来た。また日根郡長瀬村「切図」に載る水路部分の比較も出来よう。

182-O S

境内域東側を巡る近世～近代にかけての溝である。11区185-0 I から北西方向に伸び57区北半部で西に屈曲する。81区で分岐し189-0 Rの上層部にも延びる。谷部最終の流路と考えているが判然としない。溝内外には190～192・194-0 Wがあって、直接溝より水を引き入れる。検出長150m、幅0.6～4 m、深度0.3～0.5mをはかる。埋土は灰色土系の砂・粘質土・シルトが堆積する。



第98圖 57區谷部断面圖

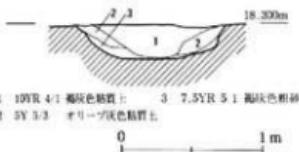


第99図 60区182-O S断面図

埋土中からは近世～近代の遺物が出土した。

188-O S

60区北部中央で検出した。標高18.3mをはかる。検出長17mをはかる。81区内にも延びて189-O Rと合流する。途中182-O Sに切られる。土器・須恵器を検出している。81区内では瓦器碗の出土を見た。最大幅1.05m、深度0.25mをはかる。埋土は底部に粗砂、上部に粘質土が堆積する。



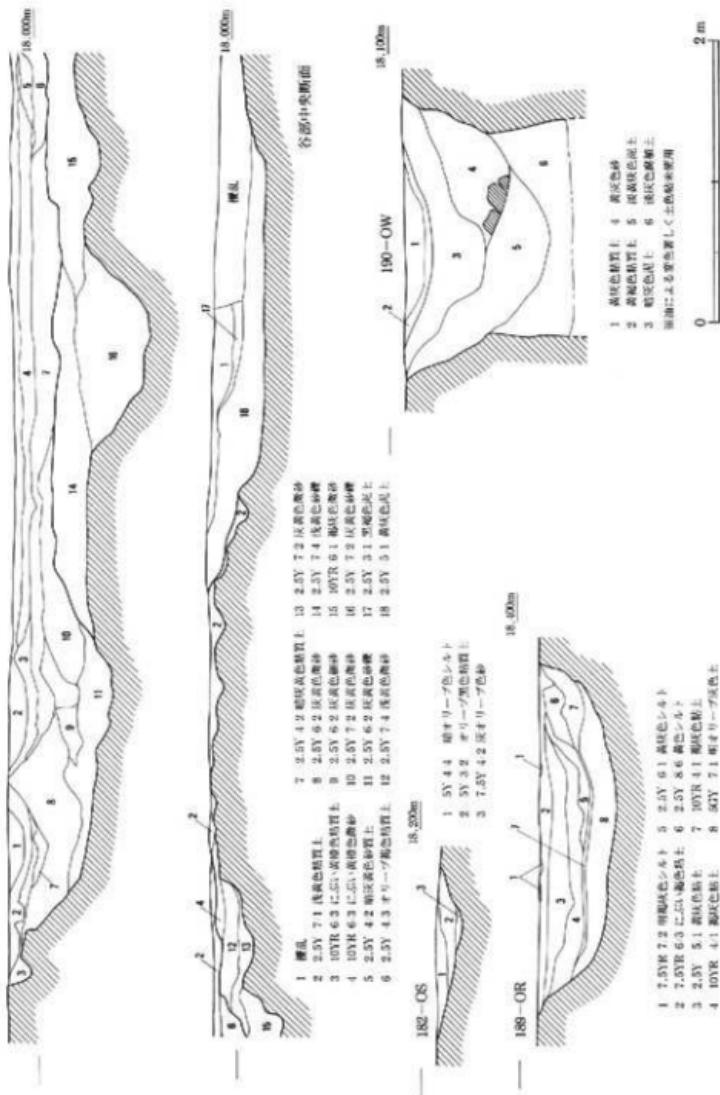
第100図 60区188-O S断面図

189-O R

境内域東側を北西方向に進む自然流路である。11区186-O Xを起点として大きく蛇行しながら幾筋もの流路を集め浅い谷地形を形成している。安松遺跡内にも延び「三ヶ尻池」跡付近まで確認出来る。総検出長450mをはかる。最大深度1mをはかる。

流路は最終的に埋没するが近世段階にはいまだ不安定で氾濫を繰り返していたようである。比較的安定するのは182-O Sの掘削によると考えられる。流路は結果的に埋没し地下水脈化したため、流路西側への水脈を分断する結果となった。

流路西側の調査時に異常な程の井戸が密集して検出され、たまたま視察に来られた民俗調査担当の先生に「これだけの井戸が集中するのは異常であり、本当に井戸か。」との批判を受けたが、付近の調査の結果「流路による地下水脈の分断の結果」であることを御報告したい。つまり標高の高い部分からの地下水は流路に流れ込み西側の幾分高い部分には流路を横断して地下水はほとんど流れ込まないということである。境内域の高い部分からの地下水はほとんど供給されず周囲を巡る溝に雨水とともに流れ込む程度である。もちろん検出した全ての井戸が同時期に存在したものでもないし、いわゆる野井戸的なもので埋没すれば掘り替えるであろうし、水脈が断たれ井戸が枯れても位置をずらして掘り替える



第101図 81区189-O R 谷部中央・182-O S・190-OW断面図

ものである。各井戸の出現には時間的な差があると考えている。

190-OW

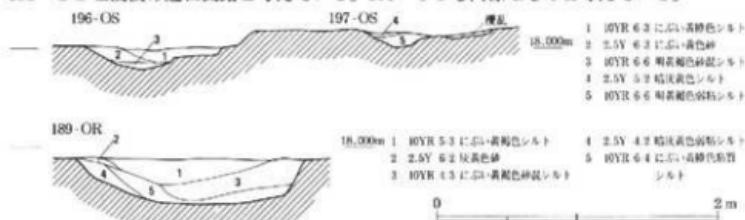
57区で検出した。標高18mをはかる。182-OSと接続する井戸である。井戸肩口には溝より水を引き込む小溝が見られる。いわゆる野井戸的な水溜めを主とした井戸であろう。長径3.5m、短径2mをはかる。断面は深度0.6mまでの上部が口の開いたU字形を示し、下部は下方に開き気味に直に掘り込まれる。深度1.1mまで確認した。埋土は黄色や灰色土系の砂・粘質土・泥土・腐植土などで埋め戻されていた。埋土中の遺物は溝と変わらない。

196-OS

57区で検出した。標高18mをはかる。北北西方向に屈曲して延び189-ORに合流する。検出長47m、最大幅1m、深度0.15mをはかる。断面は口の開いた浅いU字形で、埋土は黄色土系の砂・シルトが堆積する。埋土中からは焼や小皿などの瓦器片が出土した。

197-OS

57区で検出した。標高18.1mをはかる。北東方向に屈曲しながら延びる2条の溝で調査区内で合流し189-OR上層で消滅する。検出長40m、幅0.35~0.45m、深度0.05~0.1mをはかる。埋土は黄色土系のシルトが堆積している。埋土中からは染付磁器の細片が出土した。中世溝である196-OSを切ることや出土遺物あるいは谷部との接合層位より観て、196-OS埋没後の近世流路と考えている。198-OSも同様なものと考えている。



第102図 57区189-OR、196・197-OS断面図

200-OL

57区南東部で検出した。標高18.35mをはかる。戦後の耕作土直下で検出している。検出長6.6m、検出幅0.75m、検出深度0.65mをはかる。一部のみの検出でほとんどは調査地外のため全容は不明である。埋土は灰黄褐色粘質土(10YR 4/2: 砂混じり)が堆積している。埋土中からは主に近代の陶磁器片が出土した。

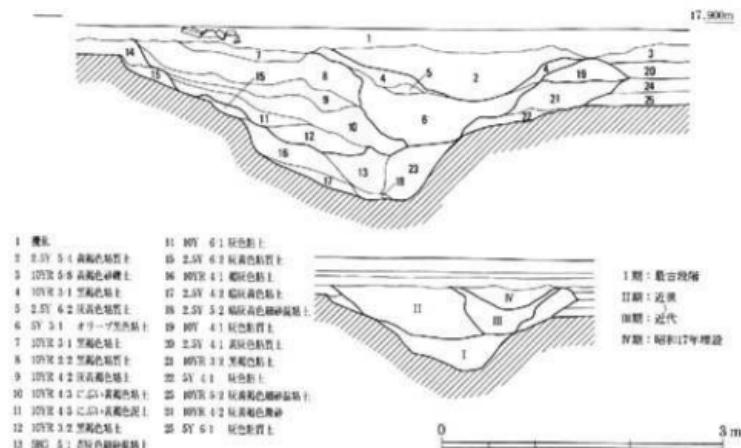
204-O L

82区北端部で検出した池である。標高17.4mをはかる。検出長径8.2m、検出短径7mをはかる。深度1mまで確認した。埋設以前の腐植泥土の西端肩口も確認しており、規模は検出長径と変わりなく隅丸方形形状を呈し、深度も2m程度の規模を想定している。埋土中からは近世～近代の陶磁器ほか中世瓦が出土した。

222-O Sとの切り合い関係は最終埋土の肩口と同レベルであり、同時期に存在したと考えられる。溝が池下層埋土を切ることから、層位的に見て溝よりも古いといえる。ある程度池が埋まり道の側溝と考えられる溝が穿たれたものであろう。調査地北端部での一部のみの検出であり全容は不明であるが、現道路を挟んだ調査区では検出しておらず、その規模はあまり大きくはない。現道路は熊野街道跡とされており、道は旧飛行場建設時以前の熊野街道と考えている。「旧蟻通神社」近くの熊野街道沿いに「冠の瀧池」があったとの聞き取り調査の成果もあり、この池に該当する可能性が大きいと考えている。

208-O S

75区で検出した「旧蟻通神社」境内域西側を巡る近世～近代にかけての溝である。湾曲しながら105区まで延びるが182-O Sとの連続性は調査では見いだせなかつた。総検出長78mをはかる。途中74・75区ではほぼ直に南北方向に分岐する。耕作地の区割りもしくは居宅敷地の区割りと考えている。74区では竪跡の検出もあり、近代以降の板硝子片が出土し



第103図 75区208-O S断面図

ており、限りなく現代に近いと考えている。

東側肩口は標高17.45mの地山面で検出した。地山面は断面観察によると東側の神社側が高く西側が低い。溝は西側肩口では標高17.65mから切り込まれていることが分かる。溝幅2.5~4.5m、深度0.5~1.5mをはかる。

溝内で長径8m、短径2.5mをはかる隅丸長方形を示す水溜め状の落ち込みを確認している。堆積土層は溝上部の最終埋設土を含めて4期に分けることが出来る。I期は最も古く瓦器碗の出土を見ているので中世段階まで遡ることが出来ると考えている。II期からIII期は近世~近代にかけての堆積層で染付磁器や瓦片の出土を見ている。IV期は旧飛行場建設時の埋設土できわめて新しい。落ち込み内の出土遺物よりみて、現状では神社を巡る溝の開始期は中世に遡らせることもでき、11区検出の186-OX湧水土坑の存在などを考え併わせると、日根莊古絵図に見られる「荒野」中の「古作」に該当しないまでも、付近の開発の先駆けを中世段階にまで遡らせるることは出来ないであろうか。

222・223-OS

57区西北端部から82区北端部にかけて検出している。82区北端部での標高17.4mをはかる。82区の189-OR谷部上にあたる部分は平面では判然としなかったが断面にてその方向性を確認している。両溝間の距離2.5mをはかる。上部の幅0.5m、下部0.45mとあまり差ではなく、ほぼ直に掘り込まれている。深度は最大0.6mをはかる。遺物の出土はない。

両溝の間の空間は幅約2.5~3m程の「道」と考えており、旧熊野街道と言われる現在の拡張・固定された道路とは少し南東側に寄った位置で検出した。105区付近で西に湾曲し現道路面と重複するもので、総検出長123m程を検出している。

層位関係より観てこの「道」は旧飛行場建設以前の熊野街道跡と考えているもので、両溝はその側溝部分に当たると考えている。日根郡長瀬村「切図」の「旧鐵通神社」境内域とその周囲を巡る溝などとの比較も出来よう。

251-OW

57区北部で検出した。標高17.3mをはかる。1.7m×1.6mの規模の井戸である。掘方は上部が北東と南西に突出するが下部は基本的に直径1.3mの円形である。下部はほぼ直に掘り込まれている素掘りの井戸である。上部が家屋の梁などや角材・丸材など柱の廃材を加工使用して簡便な井戸枠のみをしつらえている。上部は形状も違い断面も口の開いたU字形を示す。井戸枠と掘方との間には裏込めに礫を充填する。深度1.3mまで確認したが、189-OR谷部上に位置するため湧水が著しく掘削を断念している。埋土は粗い砂により

埋め戻されている。埋
土中からの遺物の出土
はないが井戸枠などの
遺存具合や検出層位な
どからみて井戸の時期
は近代を考えている。

第13項 105区

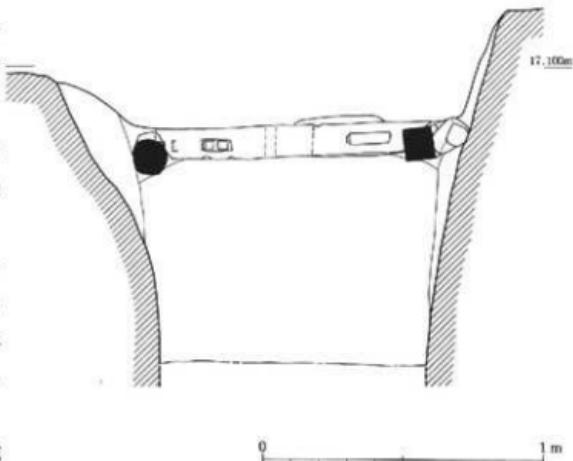
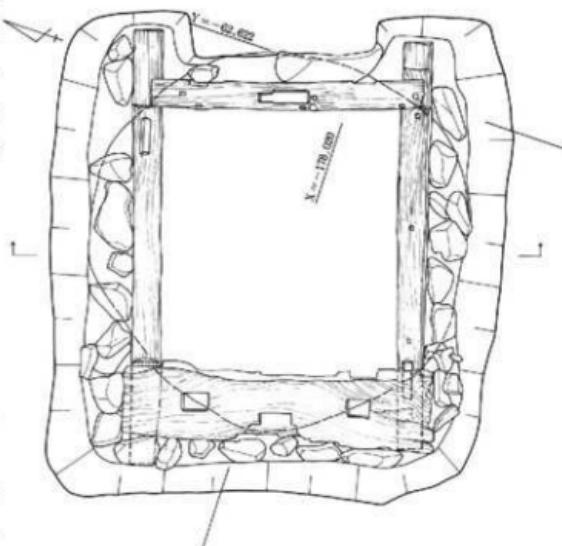
1 位置と層序

(第105・106図)

長滻遺跡の西北端に
当たり、109区の南に
隣接している。調査直
前は個人住宅であった。
標高は17.80mである。
調査区の形状は底辺が
西南を向いた多角形で
ある。調査面積は887
m²である。

調査により確認した
土層は基本的に5層あ
り、第2・3層で近・
現代の遺物が出土した。
遺構の検出面は1面で、
第5層上面で井戸、土
坑、溝、流路を検出し
た。

第1層 ほぼ全域
に水平堆積している。



第104図 57区251-O W平面・立面図

層厚は0.7mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さは17.10mである。層厚は0.05mを測る。旧耕作土である。遺物は近・現代の陶器・瓦が出土した。

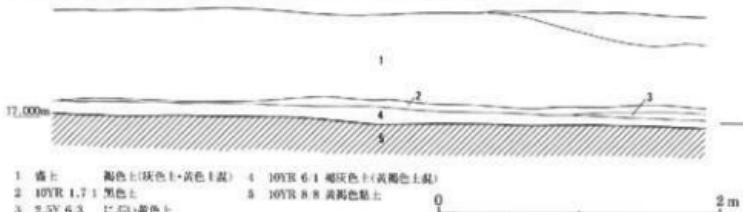
第3層 ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さは17.10mである。層厚は0.05mを測る。床土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第4層 ほぼ全域に水平堆積している。上面の高さは17.00mである。層厚は0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 東北へ向かって約0.2m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは17.00mである。層厚は0.3mを



第105図 105・109区要略図



第106圖 105區基本層底圖

翻る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 演講

230 - QW

南部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は口の開いた逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部直径1.9m、2段目直径1.7m、底部直径1.1m、深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土(5Y4/1)である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

231-OW

南部で検出した円形の井戸である。肩部直径1.2m、底部直径1.2m、深度0.68m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋

土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

232-OW

中央部で検出した隅丸長方形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部長辺1.5m・短辺1.4m、2段目長辺1.1m・短辺0.9m、底部長辺1.2m・短辺0.9m、深度1m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

233-OW

南部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は東北側が2段でテラスを有し、上部は口の開いた逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部直径1.7m・深度0.75m、2段目直径1.5m・底部直径1.15m・深度1.05m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y5/1）である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

234-OW

西南部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径1.3m、底部直径1.0m、深度0.81m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

235-OW

中央部で検出した不整椭円形の井戸である。上部南側は攪乱坑により削られている。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部長辺1.7m・短辺1.1m、2段目長辺1.5m・短辺1.0m、底部長辺1.1m・短辺0.85m、深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

236-OW

中央部で検出した不整隅丸長方形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部長辺1.4m・短辺1.0m、2段目長辺1.1m・短辺0.95m、底部長辺0.9m・短辺0.85m、深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

237-OW

西部で検出した不整椭円形の井戸である。上部東側は攪乱坑により削られている。断面

形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。肩部検出長径1.5m、2段目長径0.8m・短径0.6m、底部長径0.7m・短径0.5m、深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

238-OW

中央部で検出した不整椭円形の井戸である。肩部長径2.4m・短径2.1m、底部長径1.9m・短径1.8m、深度1.38m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

239-OW

中央部で検出した不整円形の井戸である。上部は攪乱坑により削られている。肩部直径1.4m、底部直径1.0m、深度1.64m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

240-OW

中央部で検出した円形の井戸である。肩部直径1.6m、底部直径1.2m、深度1.02m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

241-OW

北端部で検出した円形の井戸である。肩部直径1.9m、底部直径1.4m、深度1.06m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では逆台形であった。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

242-OW

東部で検出した椭円形の井戸である。東側は調査区外へ広がっている。肩部長径1.5m・短径1.0m、底部長径1.2m・短径0.8m、深度0.82m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では口の開いたU字形であった。確認した埋土は2層あり、上から黄褐色土（2.5Y5/6）が0.35m、灰色粘土（N5/）が0.47mである。遺物は黄褐色土から瓦片が出土した。

243-OO

中央部で検出した北方向に長い椭円形の土坑である。208-O Sに切られている。肩部

長径2.8m・短径0.8m、底部長径2.4m・短径0.6m、深度1.65mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色粘土（10Y R4/1）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

208-O S

南端部から中央部まで北西方向に緩く曲線的に延びる溝である。東南部と北西部は攪乱坑により切られている。検出長18.0m、幅1.0~1.5m、深度0.34mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

225-O S

南西部から中央部まで北東方向に直線的に延びる溝である。南西端は74区225-O Sに統き、北東端は攪乱坑により切られている。検出長11.0m、幅0.5~1.5m、深度0.11mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

244-O S

南西端部で検出した北東方向に緩く曲線的に延びる溝である。検出長7.5m、幅0.5m、深度0.13mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

222-O S

南西端から北北東端まで北北東方向に緩やかに延びる溝である。中央部で攪乱坑に切られている。南西端は74区222-O Sに統く。検出長30.0m、幅0.4m、深度0.2mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。東南側の223-O Sと約3.0m離れて平行して延びる。

223-O S

南西端から北北東端まで北北東方向に緩く曲線的に延びる溝である。中央部で攪乱坑に切られている。南西端は74区223-O Sに統く。北北東端は直接続かないが、57区223-O Sに統く。検出長20.0m、幅0.3m、深度0.32mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。西北側の222-O Sと約3m離れて平行して延びる。

245-O S

東部で検出した南西から北東方向に緩く曲線的に延びる溝である。南西端は攪乱坑に切

られ、北東端は調査区外へ延びる。検出長5.5m、幅0.5m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(7.5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

189-OR

北端部で検出した流路である。検出面での平面形状は屈曲した橢円形である。北東端は109区189-OR南東側に続く。長さ13.5m、幅2.0~3.0m、深度0.2mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、にぶい黄色土(7.5YR6/4:黄色粘土・微砂混じり)である。遺物は出土しなかった。

第14項 109区

1 位置と層序 (第105・107図)

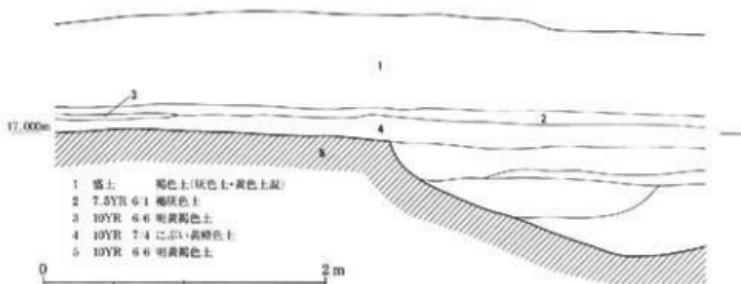
長滻遺跡の北西端で105区の北に隣接している。調査直前は工場であった。標高は17.70mである。調査区の形状は底辺が北西を向いた三角形である。調査面積は153m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第4層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸、土坑、流路を検出した。

第1層 全域にはば水平堆積している。層厚は0.6mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは17.20mである。層厚は0.05mを測る。旧耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは17.15mである。層厚は0.05m



第107図 109区基本層序図

を測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 全域にほぼ水平堆積している。上面の高さは17.10mである。層厚は0.1mを測る。床上である。近世以降の陶磁器が出土した。

第5層 北に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さは17.00mである。層厚は0.2mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

246-OW

南端部で検出した円形の井戸である。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。肩部直径1.5m、底部直径1.3m、深度0.72m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

247-OW

西端部で検出した円形の井戸である。肩部直径1.2m、底部直径0.9m、深度1.5m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層で、灰色粘土（5Y5/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

248-OW

南東端部で検出した梢円形の井戸である。北西側は攪乱坑、東側は側溝に切られている。肩部長径1.6m・短径0.7m、底部長径1.3m・短径0.6m、深度0.5m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。確認した埋土は1層で、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

249-OO

西部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が南北方向を指す。東側で189-OR北側の西南肩を切っている。肩部長径1.4m・短径0.8m、底部長径1.0m・短径0.4m、深度0.22mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（7.5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

250-OO

西端部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が南南西から北北西方向を指す。247-OWと切り合うが、先後関係は不明である。肩部長径0.8m・短径0.6m、底部長径0.7m・短径0.5m、深度0.3mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層であり、褐灰色土（7.5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

189-O R北側

中央部で短くL字形に屈曲し、北西端と東南東端が調査区外へ延びる流路である。西肩部を検出しており、検出長5.0m、検出幅2.0m以上、深度0.6mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層で、下から褐色粘土（7.5Y5/1）が0.3m、黄橙色粘土（7.5YR6/6）が0.3mである。遺物は出土しなかった。

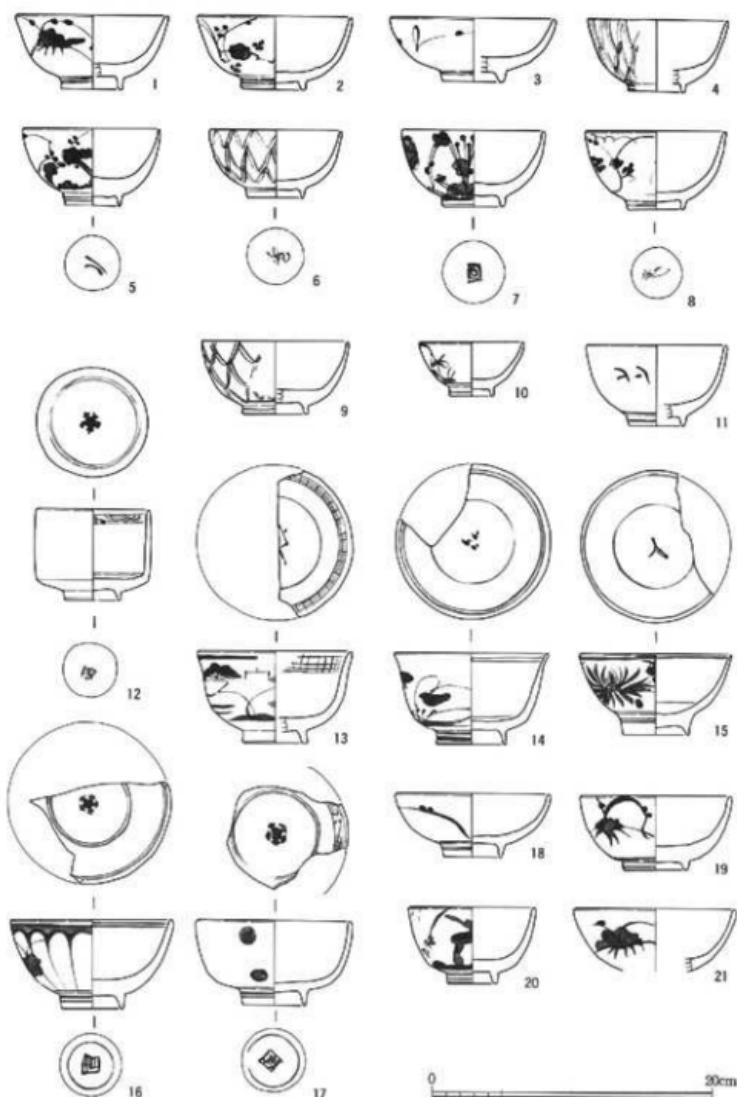
189-O R南側

東南隅で検出した弓形で東側が調査区外へ広がって延びる流路である。長さ6.0m、幅5.0m、深度0.69mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は4層で、①浅黄色砂（2.5Y8/3）、②にぶい黄橙色砂（10YR7/4）、③褐色粘土（7.5Y5/1）、④にぶい橙色砂（7.5Y6/4）である。遺物は出土しなかった。

第2節 出土遺物（第108～123図）

長流遺跡から出土した遺物は量的にも多い。それらの時期幅も大きい。種類は弥生式土器・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・瓦・羽釜・陶器・磁器等多種類におよぶ。遺存率の良いものを選び、でき得る限り図示した。

1～30・32～36は磁器である。1・10は213-O Wより出土した。肥前系染付碗で草花文が見られる。見込み部に蛇の目釉剥ぎが見られる。9は231-O Wより出土した肥前系染付碗である。2・5は233-O Wより出土した肥前系染付碗である。2は見込み部に蛇の目釉剥ぎが見られる。5は波佐見焼きである。12は236-O Wより出土した肥前系筒茶碗で五弁花印判の形が潰れかけている。3・6・13は113-O Oより出土した肥前系染付碗である。6は伊万里焼きである。13は風景文様が見られる。25・33は135-O Oより出土した白磁碗である。7は220-O Oより出土した肥前系染付碗である。菖蒲の文様と菊の印判文様が見られる。32は16-O Sより出土した龍泉窯系青磁碗で錦蓬弁が見られる。4・8・14・16は182-O Sより出土した肥前系染付碗である。4・16は波佐見焼きで、14は伊万里焼きである。8は墨付けに砂付着する。14の五弁花は完全に潰れる。16は五弁花印判明瞭に残り、墨付けに砂付着する。11は208-O Sより出土した肥前系碗で墨付けに砂付着する。15は224-O Sより出土した広東碗で、墨付けに砂付着する。17～19・21は碗で、22・23は皿である。121-O Lより出土した。24は盤型の皿である。28は青磁香炉である。17～19は墨付けに砂付着する。17の五弁花印判は明瞭に残る。19は波佐見焼きである。22・23は

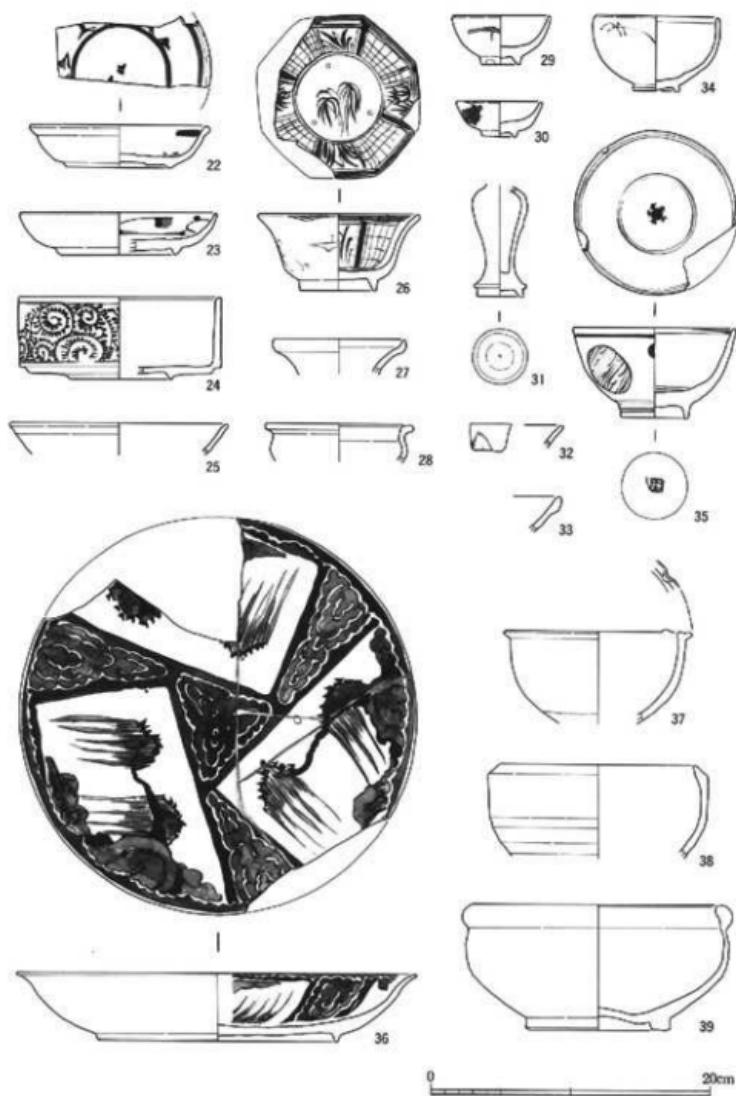


第108図 長滻遺跡遺構出土遺物（1）磁器

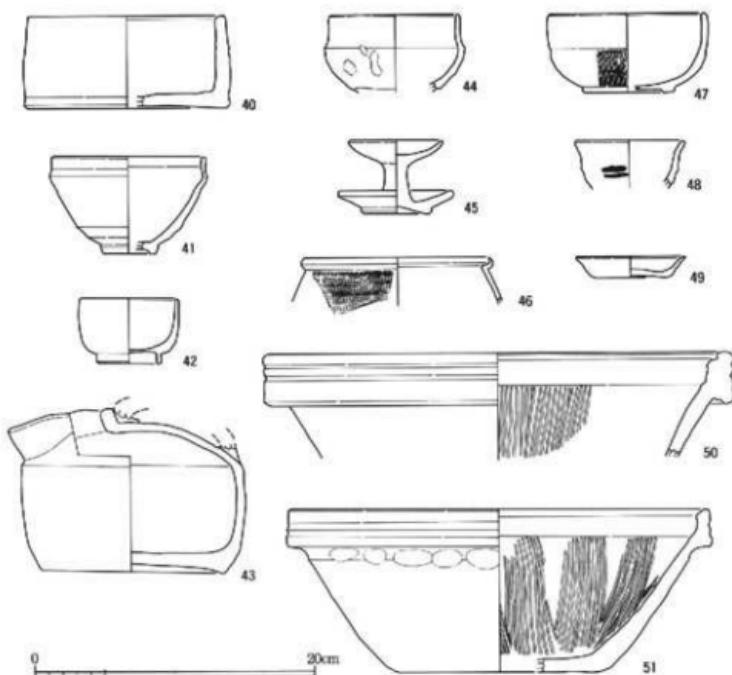
見込み部釉剥ぎされ疊付けに砂付着する。24はコバルトブルーの蛸唐草文様が見える。28は内面口縁部付近から外面に釉を被る。20・26・29・30・36は200-O Lより出土した肥前系染付碗と皿である。20は伊万里焼き。26は見込み部に胎土目が見られる。29・30は疊付けに砂付着する。36は膠で織り焼きされた19世紀初頭を降らない伊万里焼きの皿である。27は189-O Rより出土した青磁花瓶である。34・35は228-O Xより出土した肥前系染付碗である。共に疊付けに砂付着する。35は波佐見焼きで五弁花印判も明瞭である。

31・37~51は陶器である。41は161-O Wより出土した天目茶碗で二次焼成を受ける。40・50は備前焼で230-O Wより出土した。40は香炉で、50は描り目9条を一単位とする描鉢である。42は232-O Wより出土した京焼系の碗で、高台部削りだされ、高台部を除く外面施釉される。44は235-O Wより出土した天目茶碗である。高台部付近の体部外面を除き内外面とも鉄釉を被る。外面体部中央から高台部付近にかけて、さらに盛り上がった飛沫状の白色釉を被る。31は113-O Oより出土した仏花瓶で高台部を除いた外面に銅緑釉施釉される。高台部は削りだされる。49は117-O Sより出土した灰白色を呈する小皿で、内面口縁端部釉剥ぎされる。51は224-O Sより出土した描り目11条を一単位とする描鉢である。37~39・46・48は121-O Lより出土した。37~39は京焼系の施釉鉢である。37は小振りで碗とも思えるが注ぎ口が認められる。高台部から腰部にかけて無釉である。38は外面体部中央付近から高台部にかけて無釉である。39は見込み部に復元6カ所の胎土目が見られ、高台部は無釉である。46は体部に鉄釉施釉される。48は小型の碗で鉄釉と白色釉がビラ状に施釉される。萩焼かもしれない。45・47は200-O Lより出土した。45は燭台で下部の皿外面から高台部削りだされ無釉である。47は京焼系の碗で内面と外面体部中央まで灰白釉を被り、体部中央から高台にかけて鉄釉を被る。高台部削りだされる。43は204-O Lより出土した尿瓶である。把手部分欠損する。全面施釉される。

52~75は瓦器、76は瓦質甕である。68は246-O Wより出土した。内外面とも箇ミガキ調整される。内面は密に磨かれ、外面指頭圧痕が顕著に見られる。12C後半~13C頃のものか。59・61・62は95-O Oより出土した。59は磨耗著しく調整不明である。61・62は小皿で内外面ともナデ調整される。60は137-O Oより出土した。内外面ナデ調整される。内面底部を中心に波紋状に箇ミガキされ、箇の傷跡が残る。52・53は160-O Oより出土した。52は内外面箇ミガキされ、内底面は斜格子状のミガキが見られる。53は内外面箇ミガキされる。内面底部近くまで密に磨かれる。底部は平行線状のミガキが見られる。12C後半~13C頃のものか。55・56・58は165-O Oより出土した。55・56は内面箇ミガキさ

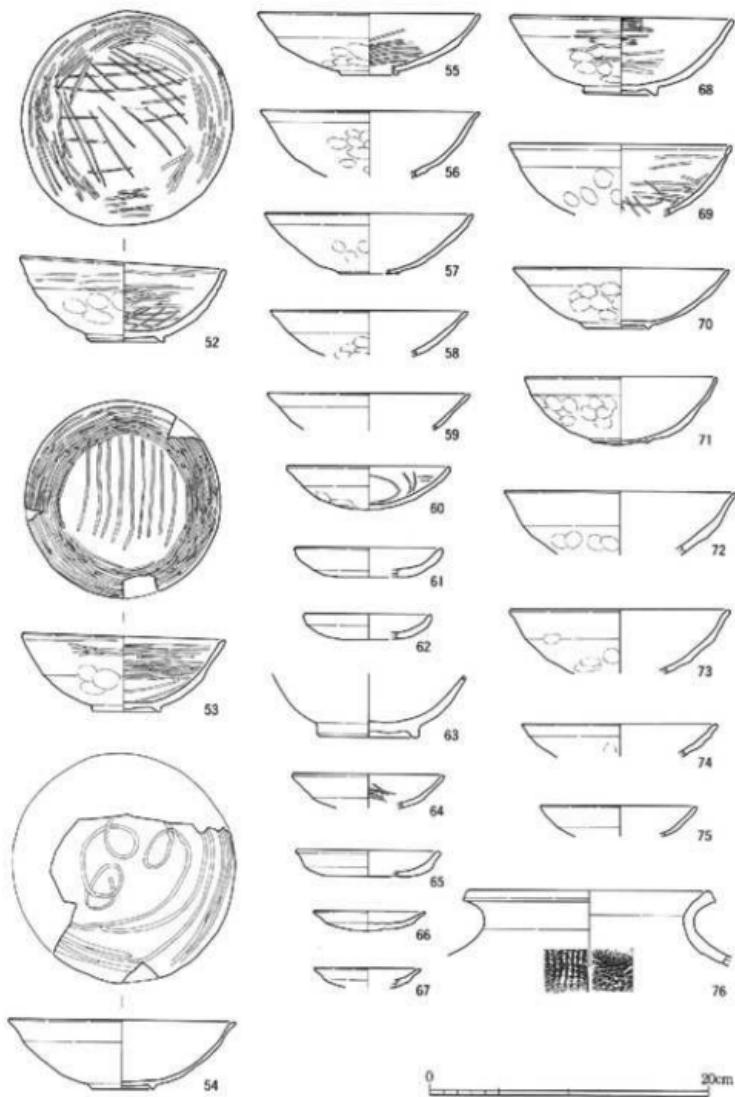


第109図 長淹遺跡遺構出土遺物（2）磁器、陶器



第110図 長瀬遺跡遺構出土遺物（3）陶器

れる。外面磨耗著しく調整不明。58は内外面箄ミガキされる。13C後半～14C頃のものか。66は110～O Sより出土した。内外面ナデ調整される。63・67は117～O Sより出土した。63は内外面磨耗し調整不明。高台径も幅広でがっしりとしている。12C前半頃迄のものか。67は内外面ナデ調整される。69は188～O Sより出土した。内面箄ミガキ調整される。65は196～O Sより出土した。内外面ナデ調整される。64は208～O Sより出土した。内面箄ミガキ調整され、外面ナデ調整される。14C末頃のものか。54・57・70・71は189～O Rより出土した。54は内面粗く箄ミガキ調整され、底部は螺旋状の簡便なミガキが見られる。57・70は内外面とも磨耗著しい。71は磨耗著しいが内外面箄ミガキ調整されているようである。13C中～後半頃のものか。72～76は109～O Xより出土した。磨耗著しいが72～74は箄ミガキ調整されている。75は内面箄ミガキ調整され、外面ナデ調整される。76は瓦質甕で瓦器甕ともども13C～14C末迄の範疇に収まる。



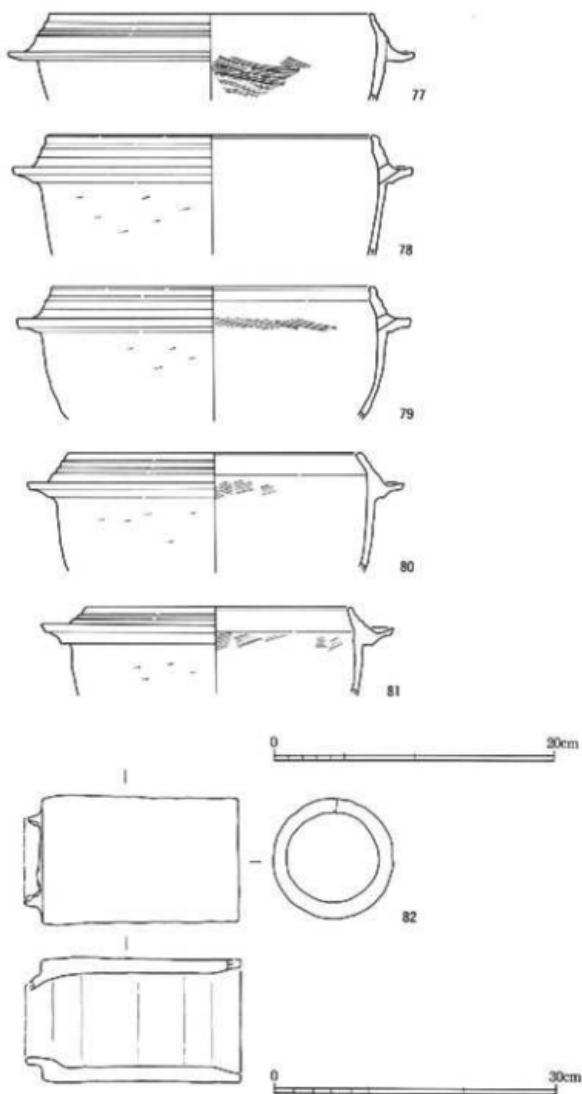
第111図 長淹遺跡遺構出土遺物（4）瓦器、瓦質土器

77～81は瓦質羽釜である。いずれも鍔から口縁部にかけて段を有する。15C中から後半にかけてのものか。77は186-O Xより出土した。78～81は133-OWより出土した。80は口縁内傾し、他は端部立ち上がり気味である。

82は瓦質の土管である。近代以降のものである。玉縁状の接続部を巡らし、反対部分端部は内径を広げる。

83～89は瓦である。83・84・86は230-OWより出土した。83は右巻三巴文軒丸瓦で、瓦当側面厚は薄く、外縁高も低い。外縁幅はやや広い。巴の頭は離れて、盛り上がりが大きい。尾部は接することなく三分の一ほど内区を巡るが圓線はない。珠文は盛り上がり、推定11個が巡る。84は左巻三巴文軒丸瓦である。83と比べて瓦当側面厚やや厚く、外縁高もやや高い。巴尾部は接することなく二分の一ほど内区を巡り圓線もない。珠文は13個を数える。86は唐草文軒平瓦で瓦当文様は簡略化される。文様帯幅は狭い段頸で平瓦凸面・凹面ともナデ調整される。瓦当面・平瓦面とも離れ砂の付着はない。87・88は184-O Iより出土した。87は唐草文軒平瓦で平瓦凹面のみ離れ砂付着する。88は丸瓦で玉縁短く端部の幅も狭い。凸面縦方向のタタキが見られる。凹面布目・吊り紐の痕跡はなく、横方向のコビキ痕が見られる。胴部側縁の幅も狭い。85は186-O X上層部より出土した丸瓦である。凸面ナデ消されタタキの痕跡はない。凹面布目とコビキ痕が見られる。胴部側縁の幅は狭い。89は189-O Rより出土した。凸面の粗い格子目タタキは玉縁部にもおよぶ。玉縁は分厚く大きい。玉縁基部の胴部との境目付近は強くナデられ溝状を呈し、胴部狭端縁は盛り上がる。胴部は広端縁に向けて開き気味に伸びる。凹面は玉縁端まで粗い布目が残り、胴部および玉縁端の面取りはなく、両側面は玉縁端まで幅を狭めながら真っすぐに伸びる。胴部側面および玉縁端は凸面と凹面に対して直角で平坦である。

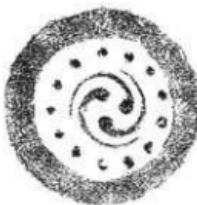
90～114・246は土師器である。108・112・114・246は125-OWより出土した。108は碗で内面底部から口縁に向かって放射状のミガキが施され、外面には指オサエが見られる。112・114・246は水汲用に使用されていた壺で、112は体部中央から口縁にかけて欠失している。246は底部付近のみで、それぞれ外面ハケ目、内面ケズリ調整される。114は底部丸いがやや尖り気味で、口縁部は外反しほぼ直に立上がる。口縁端部は尖り気味である。外面と内面口縁部はハケ目調整、内面体部はケズリ調整される。90・94は161-OWより出土した。小皿で内外面ナデ調整される。92・99は110-O Sより出土した。92は皿で内外面ともナデ調整される。体部外面頸部近くに断面三角形の貼り付け突帯が巡る。胎土は粗く2～



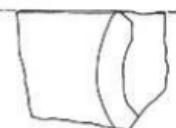
第112図 長淹遺跡遺構出土遺物（5）瓦質羽蓋、土管



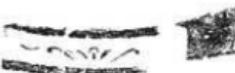
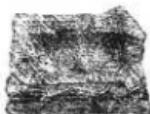
83



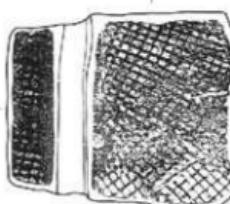
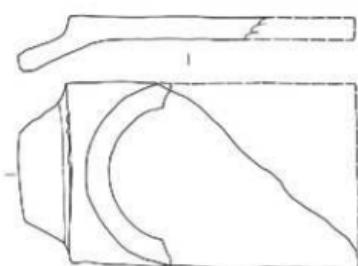
84



86



87



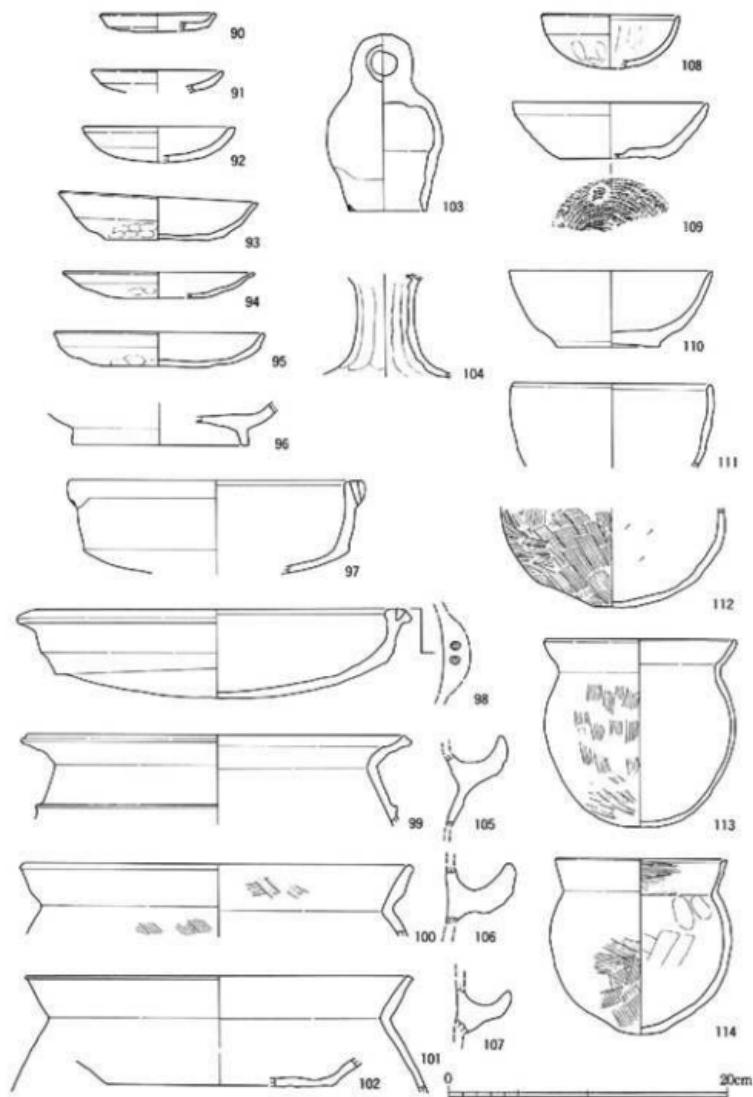
0

20cm

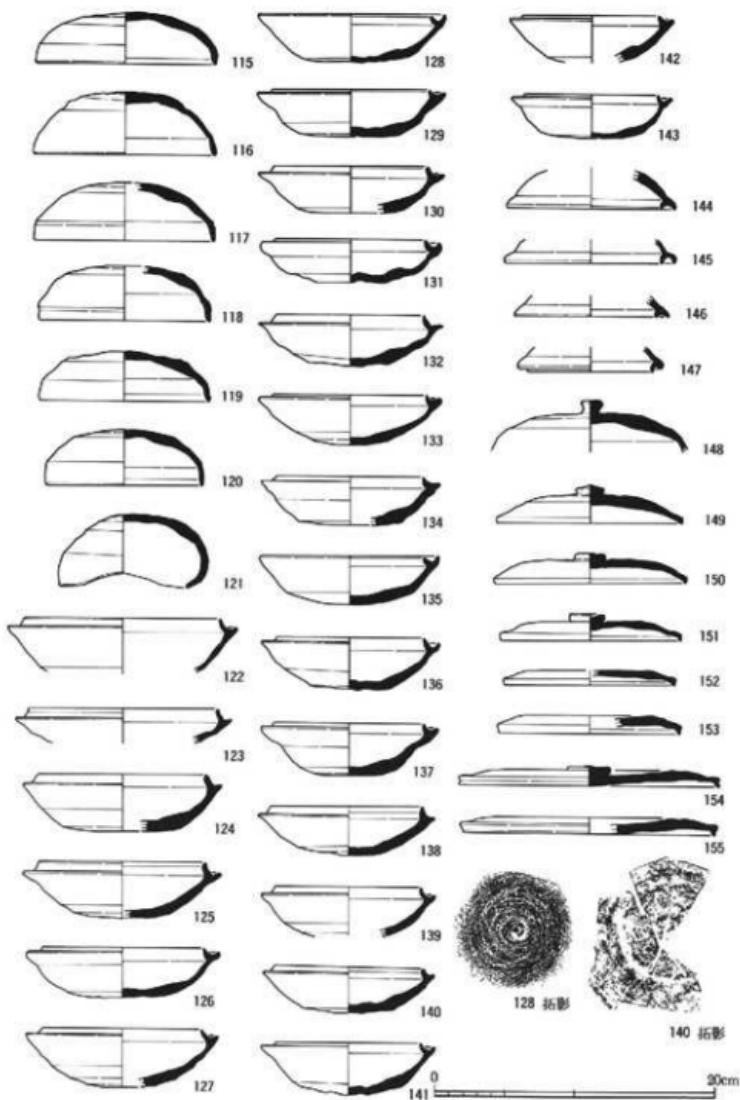
第113図 長滝遺跡遺構出土遺物（6）瓦

3 mmの灰白色の砂粒を含む。96は117-O Sより出土した高台付きの皿である。内外面とも磨耗著しく調整は不明である。104は118-O Sより出土した面取り高杯の脚部である。杯部および脚底部欠損し、磨耗も著しく調整などは不明である。100~102は142-O Sより出土した。100の口縁部外面剥離し調整不明のはかは内外面ともハケ目調整される。102は101の底部である。内面底部と底部付近の体部および口縁部外面はナデと指サエ調整される。ほかは内外面ともハケ目調整される。それぞれ底部に平坦面をもつ耳付きの甕かも知れない。97は224-O Sより出土した焰壺で、内外面ナデ調整される。把手部は貼り付けで1孔を穿つ。109は127-O Gより出土した碗で、底部に回転糸切り痕が残る。内外面回転ナデ調整される。110は128-O Gより出土した碗で調整は109と同じである。93・95・98・103・113は189-O Rより出土した。93・95は皿で底部未調整、ほか剥離のため不明である。98は焰壺で外面体部と内面が回転ナデ調整され底部は未調整である。把手は貼り付けで未貫通の2孔を穿つ。103は釣り鐘形の飯蛸壺である。ナデ調整され、器部の口径を狭める。113は壺で外面体部ハケ目調整される。内面と外面口縁部は磨耗のため調整不明で、体部に黒斑が見られる。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。91・105~107・111は109-O Xより出土した。91は小皿で内外面ナデ調整される。105~107は壺もしくは甕の耳で比較的幅広である。先端部は尖り内湾し立ち上がる。111は碗と考えられるが外面暗赤褐色を呈し、胎土も粗く1 mm前後の砂粒が多い。在地の土器ではないようだ。

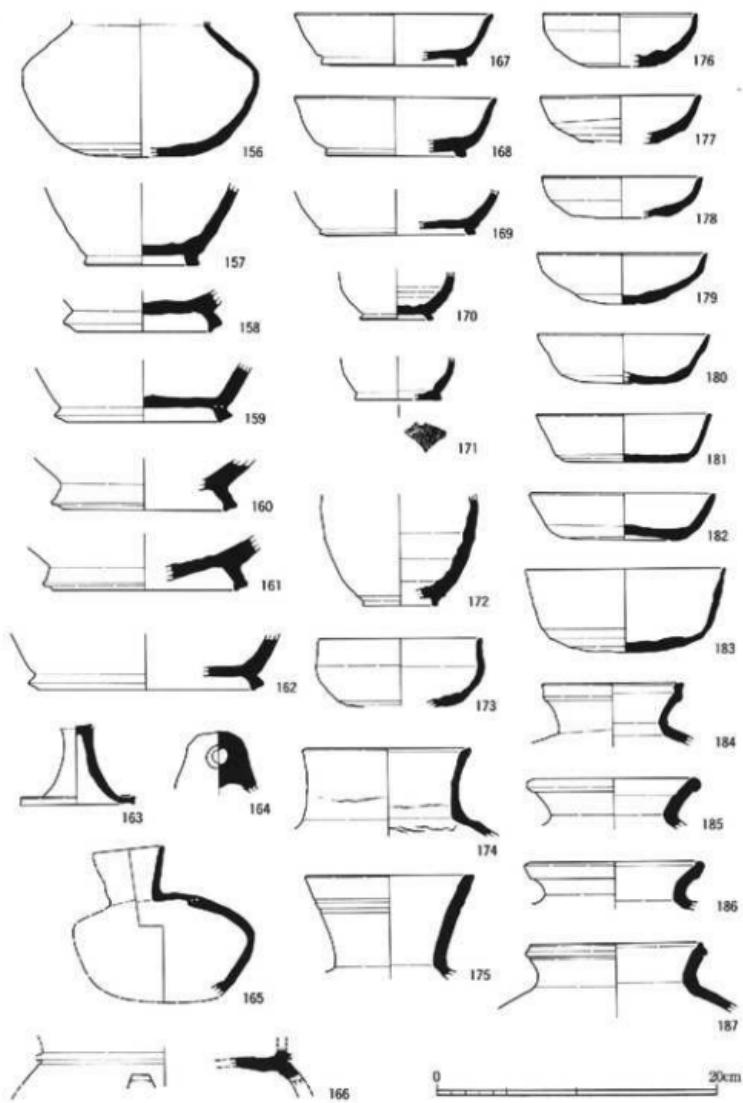
115~202は須恵器である。杯・蓋・高杯・鉢・皿・壺・甕・平瓶・堤瓶・横瓶・円面硯・蛸壺等多器種におよぶ。そのほとんどは24・27・41・79区を中心とした谷部からの出土である。109-O Xおよび189-O Rは谷部の総称である。189-O Rは安松遺跡内にも延びる。年代的には7・8世紀を中心とした遺物が出土しているが中世遺物の出土もある。比較的大きな破片を選び図示したものは88点を数える。143は125-OWより出土した杯身である。157・193は94-O Oより出土した。157は壺で193は甕である。147は96-O Oより出土した杯蓋である。166は135-O Oより出土した円面硯である。破片であるため器高等は不明である。台形状の透かしをもつ。123・162は137-O Oより出土した。123は受部をもつ杯身で162は壺である。159は138-O Oより出土した壺である。153は110-O Sより出土した蓋である。中央部欠失している。148・150・151・187・197は117-O Sより出土した。148・150・151は摘み付きの蓋である。187は横瓶の口縁部で197は甕口縁部である。158は118-O Sより出土した壺である。115・116・121・122・126・127・129・156・165・183・184・202は142-O Sより出土した。115・116・121は杯蓋である。122・126・



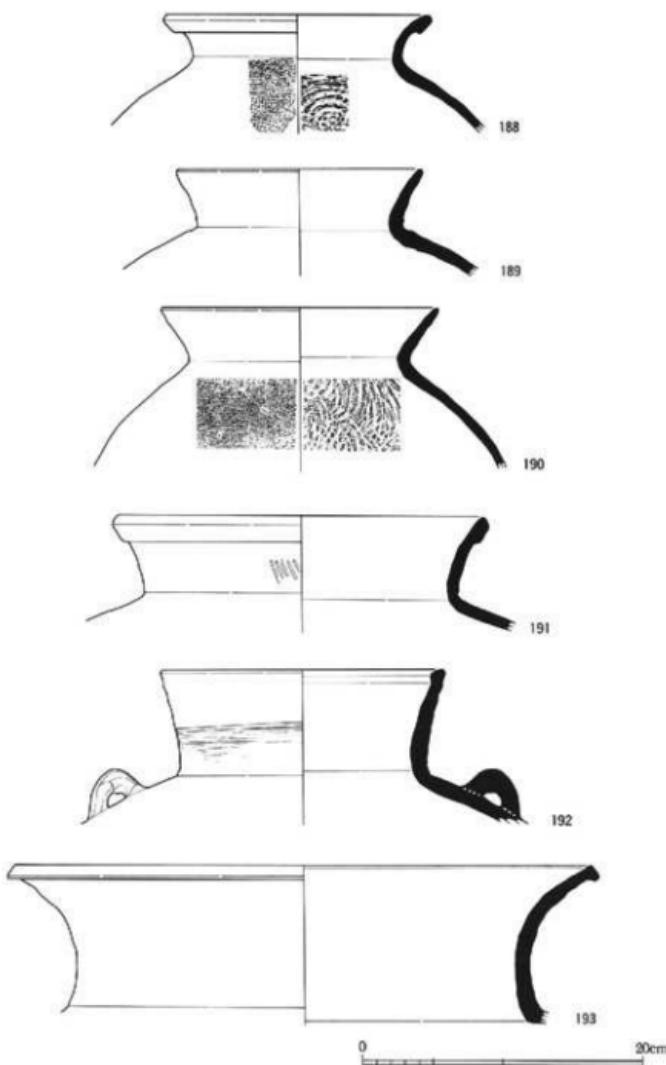
第114図 長滝遺跡遺構出土遺物（7）土師器



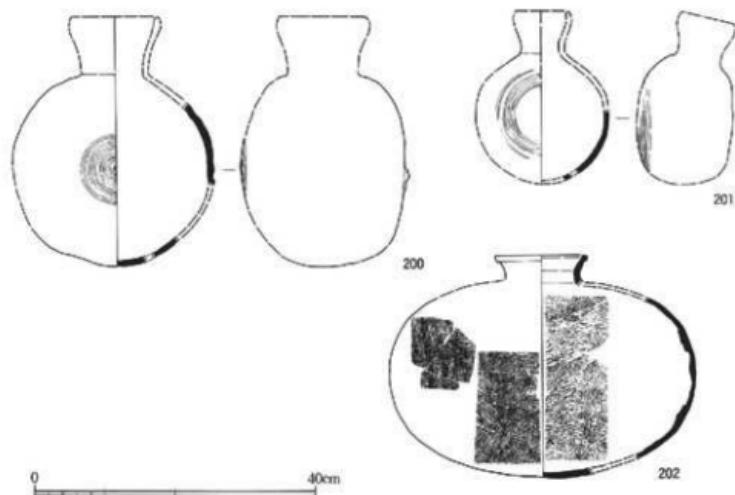
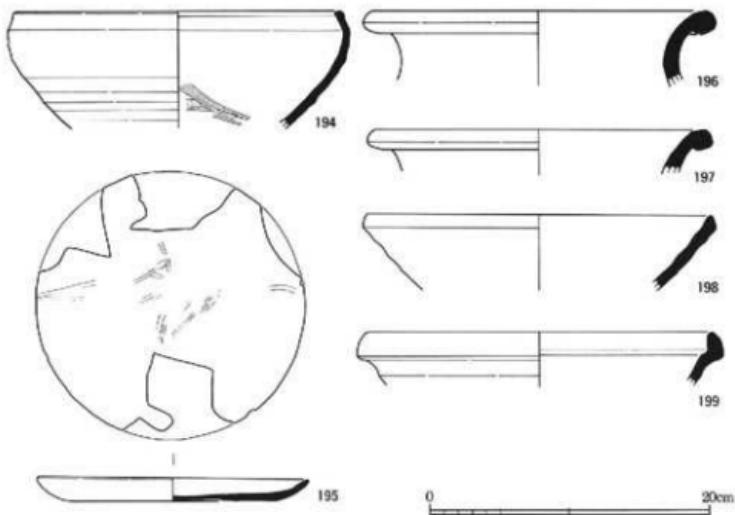
第115図 長流遺跡遺構出土遺物（8）須恵器



第116図 長滻遺跡遺構出土遺物（9）須恵器

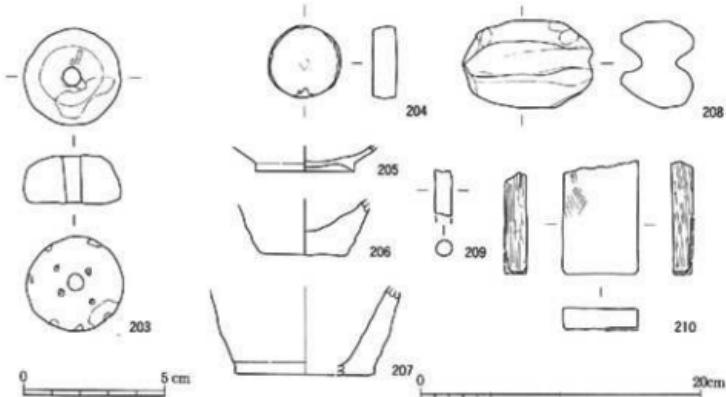


第117図 長庵遺跡遺構出土遺物（10）須恵器



第118図 長滻遺跡遺構出土遺物（11）須恵器

127・129は受部をもつ杯身である。156は壺である。165は小型の平瓶で把手はない。183は杯身でやや深いものである。184・202は横瓶で復元し得たのは202のみである。145・146・160は100-O Pより出土した。145・146は蓋で中央部欠失する。160は壺である。132・198は121-O Lより出土した。132は受部をもつ杯身である。198は東播系の擂鉢で内外面ナデ調整される。152は106-O Rより出土した蓋である。中央部欠失する。125・176は107-O Rより出土した杯身で、125は受部をもつ。161・167・180・182は120-O Rより出土した。161は壺である。167・180・182は杯身で167は高台が付く。181・188・194は189-O Rより出土した。181は杯身で、188は壺、194は鉢である。140は108-O Xより出土した受部をもつ杯身である。117～120・124・128・130・131・133～139・141・142・144・149・154・155・163・164・168～175・177～179・185・186・189～192・195・196・199～201は109-O Xより出土した。117～120は杯蓋である。124・128・130・131・133～139・141・142は受部をもつ杯身である。144・149・154・155は蓋で149・154は摘みをもつ。163は高杯の脚部で透かしはない。164は飯蛸壺である。168・169は杯身で高台をもつ。170～172は壺で171は高台ではなく底部回転糸切りされる。173は口縁部内湾気味に立上がる所以塙とした。174は平瓶の口縁部で175は提瓶の口縁部である。177～179は杯身である。185・186は横瓶の口縁部である。189～192・196は壺で192は耳が付く。195は皿で焼成は極めて不良である。199は東播系の擂鉢で内外面ともナデ調整される。200・201は提瓶で耳はない。200は大型のものである。

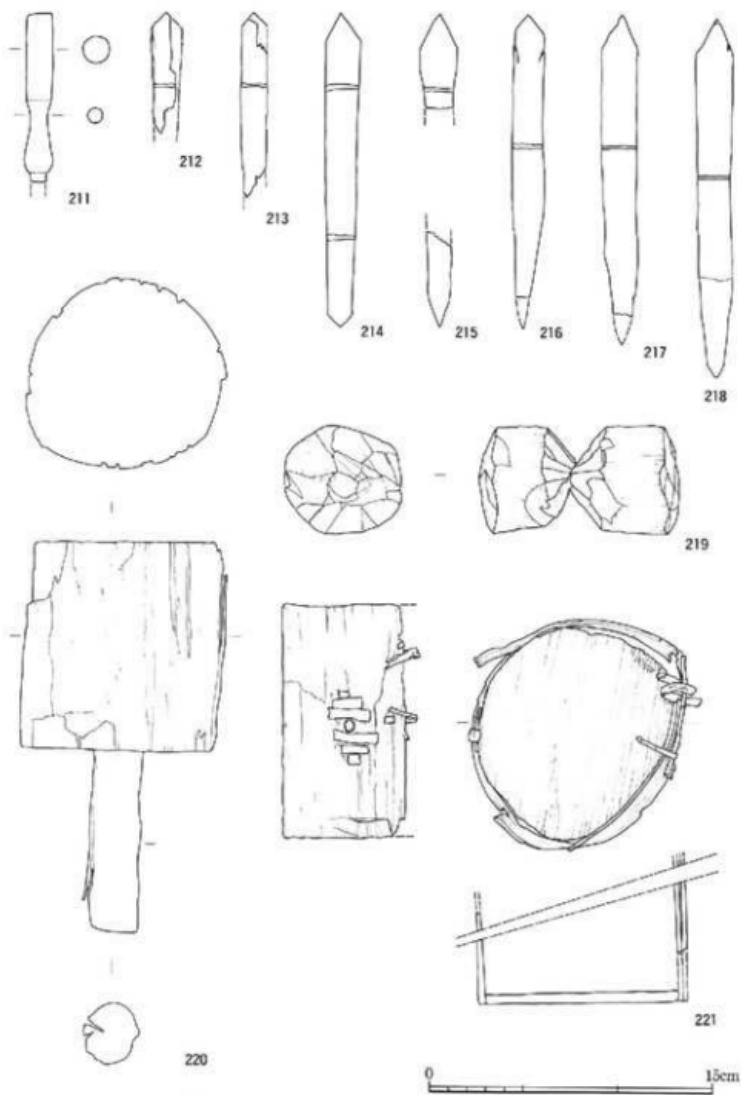


第119図 長滻遺跡遺構出土遺物（12）土器、石製品、その他

203～210はその他の出土遺物である。206・207は125-OWより出土した。中期の弥生式土器底部で磨耗が顯著である。210は233-OWより出土した粘板岩製の砥石である。205は151-OOより出土した黒色土器Aタイプで内面横方向のミガキ調整される。204は220-OOより出土した瓦転用面子である。203は117-OSより出土した滑石製の紡水車である。丸みを帯びた台形状を呈し、底部は平坦である。底部間に顯著な磨耗痕が見られる。底部には中央の穿孔部を挟んで対角状に4カ所の小孔が見られる。208は189-ORより出土した土師質の土鍤で両側面に繩巻の溝を穿つ。209は109-OXより出土した円柱状を呈する土師質の小型土鍤で両端部に紐を縛る抉りが見られる。

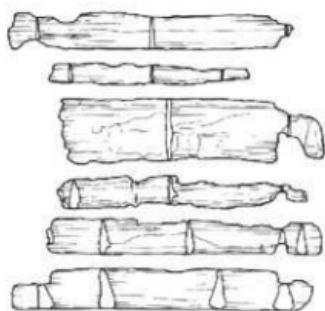
211～229は木製品および井筒材である。212～219・222は125-OWより出土した。212～218は畜串である。未実測分を含めて9点確認している。墨書きはなかった。219はやや小振りの木鍤である。222は井筒割材で木取りは柵目を基本とするが追柵、板目の木取りもある。227・228は132-OWより出土した漆器椀で共に横木取りされる。227は内外面黒漆塗りである。228は内面黒漆の上に赤漆重ね塗りされる。229は213-OWより出土した漆器椀である。縦木取りで黒漆塗りである。223・224は236-OWより出土した漆器椀で共に横木取りされ、黒漆上に赤漆重ね塗りされる。224は外面底部に楓文様を黒漆で描く。211は222-OSより出土した仏具鉢で新しい。225・226は186-OXより出土した漆器椀で共に横木取りされる。225は外面黒漆塗りで内面は不明である。226は内面黒漆上に赤漆重ね塗りされ、外面は黒漆塗りである。220・221は228-OXより出土した。220は一木作りの砧である。221は杓の容器部で破損著しい。側の打合は棒皮で固定され呑口は長方形である。小猿ではなく、柄先は側に穿孔して突き出す。穿孔部周辺の側は棒皮で補強される。底の形状は正円形ではなく、やや歪な椭円形を示し、底板と側は木釘で固定される。

230～245は包含層より出土した。磁器・青白磁・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦・黒色土器等を包含している。236・241は染付碗である。236は広東碗である。231は白磁碗で内面から外面口縁付近まで白色釉を被る。237・238は龍泉窯系の青磁碗で簡略化された蓮弁が見られる。232～234・244は須恵器である。232は東播系の擂鉢、233は杯蓋、234は短頸壺で耳が付く。244は壺で口縁部に波状文が巡る。230は黒色土器Aタイプである。239は瓦器小皿で内外面ナデ調整される。235は瓦質練鉢である。240は土師質土鍤である。242は瓦転用面子である。243は形象埴輪で帶は台形に近い。245は右巻三巴文軒丸瓦である。巴の頭は椭円形で盛り上がり、尾は2/3ほど内区を巡る。推定珠文数は16個を数える。外縁高は低く、外縁幅はやや広い。瓦当厚は薄い。

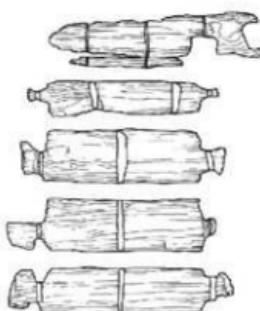


第120図 長淹遺跡遺構出土遺物（13）各種木製品

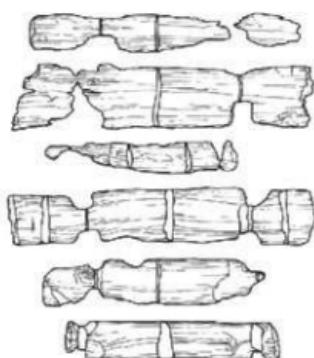
西側 内面 上から 6段



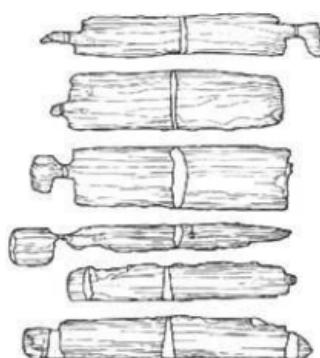
北側 内面 上から 5段



南側 内面 上から 6段



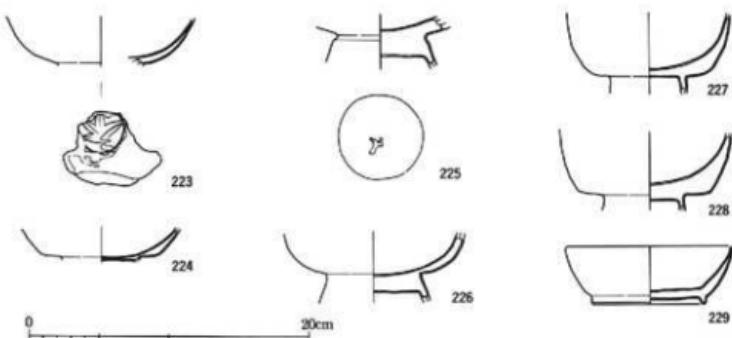
東側 内面 上から 6段



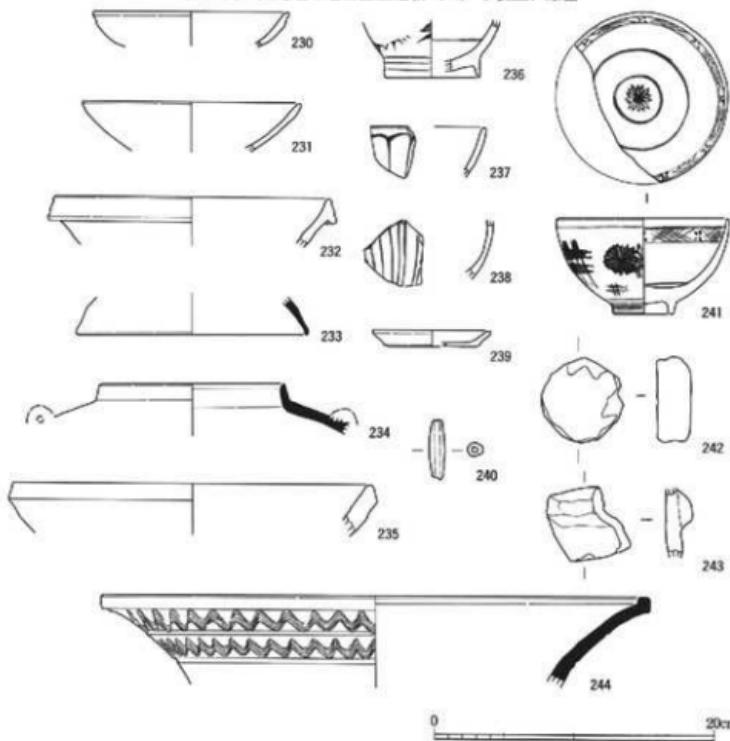
222

0 1m

第121図 長滝遺跡遺構出土遺物 (14) 125-OW井筒



第122図 長淹遺跡構出土遺物（15）木製品、漆器



第123図 長淹遺跡包含層出土遺物

第5章 安松遺跡の調査

第1節 各地区の位置と層序および検出遺構

第1項 18・19区

安松遺跡の南端部にあたる。調査前の現況はほとんど田畠に供されていた。付近の地形は北西方向に向って比高を下げる。調査地は旧飛行場主要滑走路南西脇にあたる。長滝遺跡の北部が「時代の構造物」である飛行場の建設により削平傾向にあるのに対して安松遺跡は盛土される傾向にある。

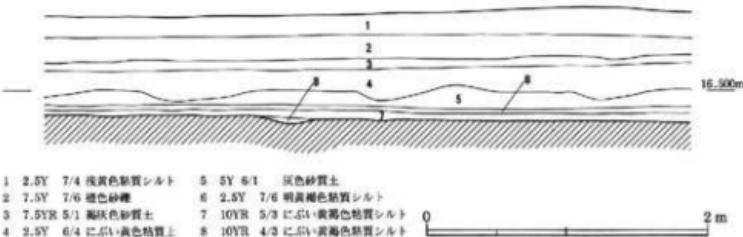
1 位置と層序（第124図～第126図）

調査地は水路と熊野街道跡と呼ばれる現在の道路部分に画され、三角形の形を示す。調査の都合上2地区に分けて調査した。

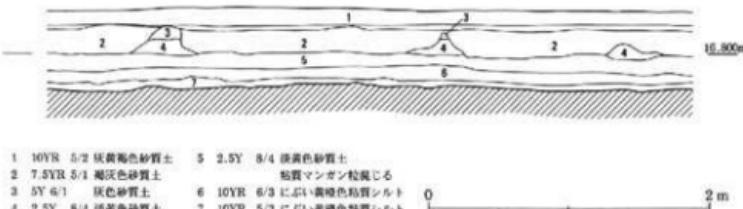
18区中央部の標高17.2mをはかる。第1層～第4層までは旧飛行場建設時の整地土である。バラス状の礫や地山シルト・耕作土などの混合土が層を成している。調査地北東端部では整地土中に近世～近代の陶磁器・瓦等の遺物を大量に包含していた。棟瓦が大部分を占めるが、中世遺物は1点もない。付近の居宅残骸を整地土中に埋設したものと思われる。第5層は旧耕作土で第6層は同床土である。第7層は中世遺物包含層である。第9層は遺構埋土で地山（明黄褐色シルト：2.5Y7/6）面で検出した。現耕作土の層厚0.2mをはかる。

19区北西部の標高17.1mをはかる。第1層は現耕作土である。第2層は旧飛行場建設時の整地土である。第3層、第4層は旧耕作土と床上である。整地前に削り取られ部分的に遺存している。第5層は近世段階の耕作土と考えられる。第6層上面に耕作に伴う小溝が多數見られる。第6層、第7層は中世遺物包含層である。土質の違いから上部と下部に分





第125図 18区基本層序図



第126図 19区基本層序図

類した。双方ともにシルトであるが第6層はやや粘質である。地山は明黄褐色シルト（2.5Y7/6上部灰色強く下部黄色強く砂質に近くなる）である。地山上面にも耕作に伴う小溝が見られるので耕作土と考えている。

2 遺構（第127図～第129図）

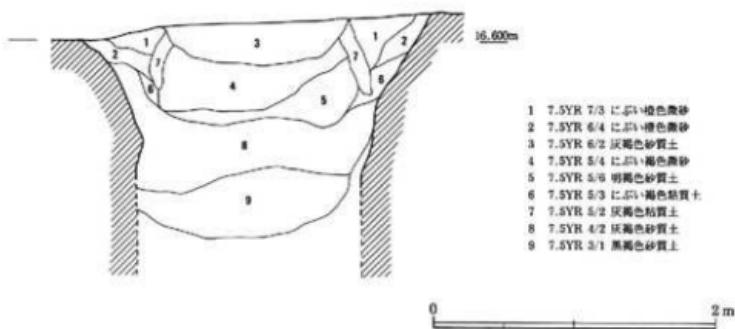
遺構は近世～近代にわたる井戸や土坑・溝を検出している。中世末頃にかかると考えられるものには土坑や溝のほか耕作に伴う小溝や区画段落ち溝を検出した。

4-OW

19区中央部で検出した。標高16.8mをはかる。13-OSに掘方の一部を切られる。長径2.6m、短径2.5mをはかり、平面形状は歪な椭円形を示す。深度は1.5mまで掘り下げたが不明である。断面形状は上部約0.8mまでは口の開いたU字形を示す。下部は長径1.6m、短径1.3mをはかる不整な椭円形を示し直に掘り込まれている。断面観察によれば井筒の痕跡と考えられる堆積土（土層No.7、No.3～5）を確認しているので、直径1.3m程度の井筒が存在した可能性がある。

5-OW

19区中央部で検出した。標高16.55mをはかる。長径4.3m、短径4mをはかり、形状は卵



第127図 19区 4 - OW断面図

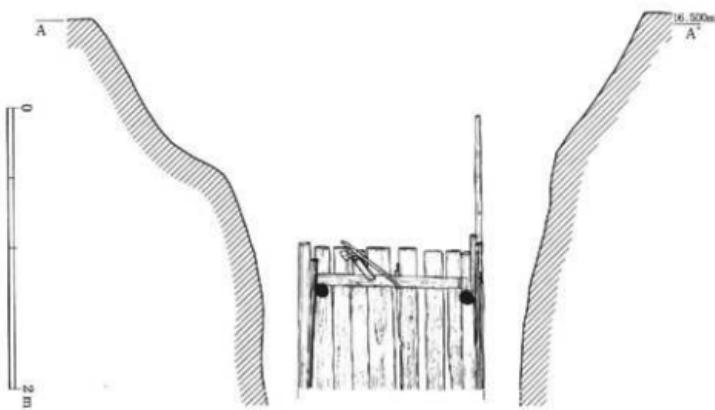
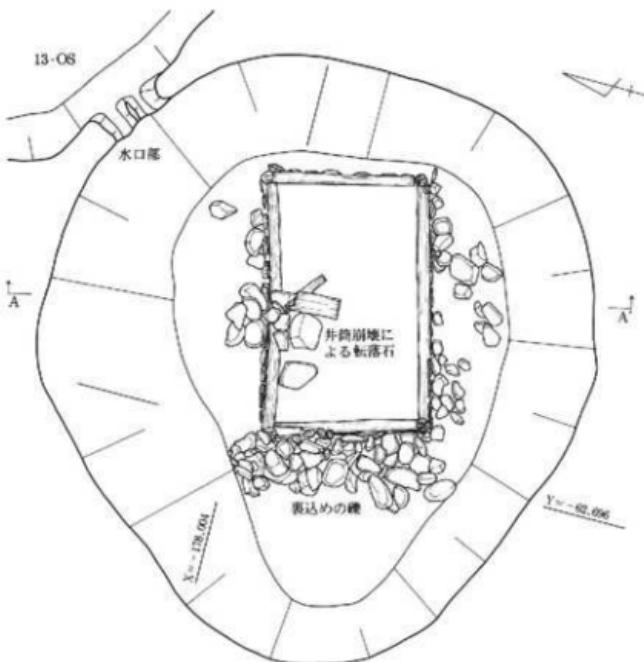
形の梢円形を示す。深度は2.7mまで掘り下がたが不明である。断面形状は深度約1mまでの上部が口の開いたU字形を示す。下部は深度約2mまでがやや上部に開き気味で、下位部分はオーバーハング気味の西側部分を除けば直に掘り込まれる。

埋土は上部1mまでがガラス・瓦等の近代遺物を含む灰色・黄色土系の砂質土や粘質土が堆積する。下部は褐灰色泥土(10Y R5/1)が堆積する。

深度1.5m付近で長径1.85m、短径1.2mをはかる長方形の井筒(井戸枠)を検出した。構造は四隅に直径8~10cmの丸太材の縦木を立てる。同じ太さの丸太材を長軸方向の横木を下にして縦木に枘穴を穿って差し込み固定する。一段分のみ確認した。側板は断面三日月状の板目端材を5~6cmの間隔をあけて側面に立て掛けける。横木との接合部には釘の使用は認められない。

井筒外の埋土は最大人頭大の大型の礫を深度1.4m付近に集中的に並べ、下位部分にはいくぶん小型の礫を褐色土系の裏込め土と共に充填している。裏込めに礫を多く使うことにより側板の固定と掘方壁面からのわずかな湧水を井筒内に取り入れる機能的な構造であったことがうかがえる。井筒内の埋土は上部が13-O-Sと同じ灰色泥土が堆積する。下部は青灰色土系の砂質土が黄色土系の地山ブロックと共に堆積する。埋土中からは染付磁器のほか近世瓦や一石五輪塔の空輪などが出土した。井筒内外の出土遺物は時期的にも変わらず、早い段階で井筒内が埋没したと考えられる。

木組みの縦木の一部が深度0.65m付近まで遺存しており、また井筒内北側の長軸部分では土圧により倒壊した側板や人頭大の裏込め礫を確認していることから、少なくとも断面形状の変化する深度1m付近まで井筒の存在を想定しうる。



第128図 19区5-OW平面・立面図

13-O S とは水口部を通じ接続する。また側板間に隙間もあることより野井戸的な水溜め機能を併せもつ。西側肩口には幅0.2m、深度0.05mの小溝が接続し西方向へ延びる。

6-OW

19区北部西端で検出した戦後の井戸である。調査地側溝部の一部分のみの検出で全容は不明であるが、断面中に旧飛行場滑走路コンクリート片が大量に投棄されているのが観察出来る。埋土は灰色泥土で埋土中からは下駄や醤油樽の栓の木製品も出土した。

その他の井戸

1・2・3-OWのうち3-OWについては近世の可能性があるが、遺物の出土もなく判然としない。1・2-OWについては近代のものである。7-OWは旧飛行場建設により移転を余儀なくされた居宅の生活用の石組みの井戸である。9-OO底部にも石組みが見えかなり深いと考えられる。ほかに19区で現代の野井戸2基を確認している。

9-OO

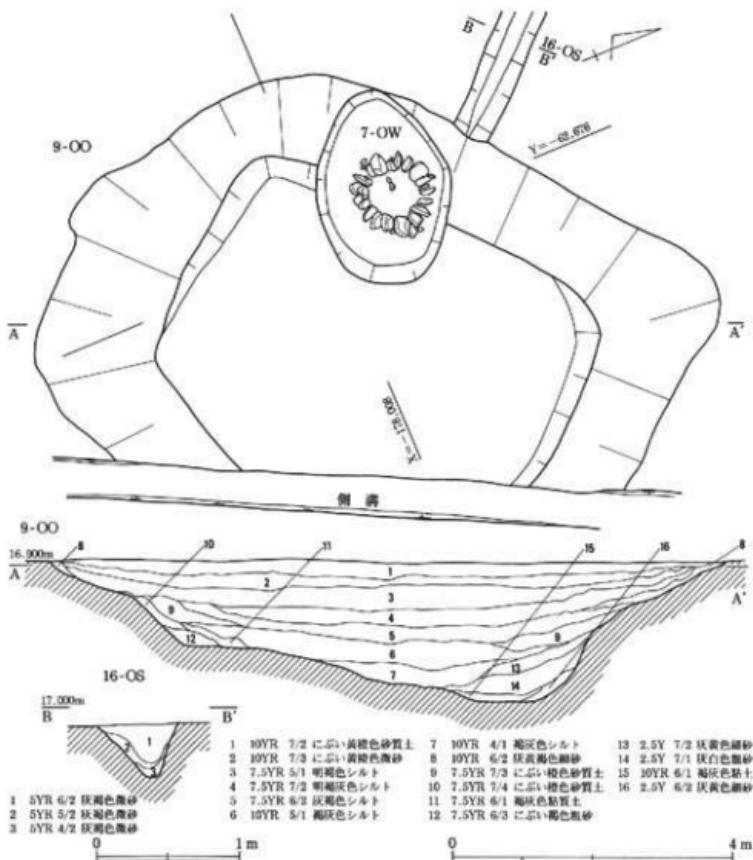
19区南東部で検出した。標高16.95mをはかる。長径8.7m、推定短径7.0mをはかる。一部調査地外であるが形状は隔丸長方形を想定している。断面形状は2段で深度0.5mまでは口の開いた皿状の浅いU字形、深度1.2mまでは口の開いた楕状のU字形を示す。底面南側はほぼ平坦で北側に向かって徐々に深度を下げる。最深部深度1.94mをはかる。底部や壁面よりの湧水はほとんどない。埋土は水平に近いレンズ状の堆積を示し、ゆっくりとした速度で堆積している。埋土中からは瓦質の羽釜や15C代の練鉢片が出土した。

西側肩口からは16-O S が北西方向に延びる。付近の開発に伴う灌漑用の水溜め土坑と考えている。その供給源は土坑が北および西側に広がる微高地の東隅部に立地することから現道路を隔てた東側の105・109区にまたがり検出した189-OR（安松遺跡では40-OR）の谷部流路が考えられる。埋土の堆積状況を考えると直接水を引き込んだとは考えにくいが、流心部より溢れ広範囲に広がり滯水した僅かずつの水を集めたものと考えられる。長滻遺跡11区で検出した186-O Xと共に付近の開発に伴う先駆的な意味をもつものである。

なお、現地調査では付近の開発の傍証を得るべく、植生の復元等を目的とした花粉分析のため、上層から下層にかけて各堆積土層よりサンプリングを行ったが、その分析結果では、花粉が検出されず植生の復元は出来なかった。

13-O S

19区から18区にかけて蛇行湾曲しながら86区で屈曲して、再び18区内で屈曲して42区へ延びる。総検出長148m、幅0.8m、深度0.2~0.3mをはかる。標高は19区南部で16.8mを



第129図 19区 7-OW, 9-OO, 16-OS 平面・断面図

はかり、42区では15.8mをはかる。北に向かい畦畔ごとに徐々に比高を下げる。溝底部の両肩部下位に幅0.5mの間隔で杭列の痕跡と横木板材を確認しているので実際の溝幅は0.5m程度のものである。各屈曲部には土坑状の水溜め部や断面三角形の石の平坦面を並列に並べた水利施設が認められる。この水利施設については水を堰止める樋板（堰板とも言う）は確認されず、水利の方法は不明である。また溝には5-OWのような水溜め機能をもつ井戸も付随している。

埋土は灰色の泥土である。埋土中からは近代～現代の瀬戸物を中心とした遺物が出土している。生活排水路としての機能と耕作関係の水利機能を併せもった溝といえる。

14-O S

19区西部で検出した耕作区画に伴う溝である。第5層上面より掘り込まれている近世溝である。検出長14mをはかり、幅0.3m、深度0.1m遺存する。

15-O S

7-O W付近から13-O Sに向かって延びる旧居宅からの排水小溝である。南東端部には煉瓦積の排水溝会所跡が見られた。

16-O S

19区南東部で検出した。標高17.6mをはかる。9-O Oに取り付く溝である。北西方向へ延び、途中19区27-O Zや28-O Zの段落ち溝・耕作小溝に切られた後13-O Sにも切られる。13-O Sから西側は比高差もあり遺存しない。切り合い関係より調査地内で検出した各O Z群に先行する灌漑用の溝と考えている。

總検出長25m、幅0.6m、深度0.38mをはかる。断面の形状は逆三角形状を示す。埋土は灰褐色微砂が堆積する。遺物の出土はないが9-O Oよりの水利溝と考えられることより当該時期に供給すべき耕作地があったと考えるのが妥当であろう。

その他の遺構

耕作地区画は、耕作に伴う小溝や幅広の区画段落ち溝の方向性やまとまり具合のほか、標高や埋土により判断した。27～29-O Zは立地条件もあり、範囲も狭く、階段状を呈する。段落ち溝を挟んだ比高差は0.05mをはかる。13-O Sから西側は比較的区画が大きくなるが、整然とした区画は認められない。32・33-O Zを除き全て中世末頃の区画と考えているが、22～24・30・31-O Zはそれぞれ近世の畦畔・溝などによって画され重複する可能性がある。

17～19・25・26-O Fはいわゆるピット列である。明確な掘立柱状の柱穴は確認出来ていない。それぞれの距離や方向性などまちまちである。簡易な柵列を想定するが、柵で囲むべき遺構の検出を見ていないので、その性格など不明である。埋土は第6層や第7層が堆積する。

第2項 83区

1 位置と層序（第130図・第131図）

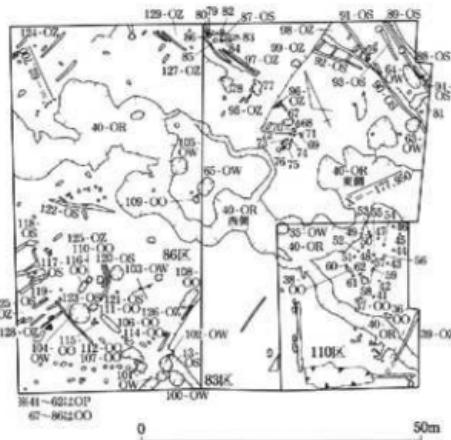
安松遺跡の東南隅に当たり、86区の東南に隣接している。調査直前は建材関係の建物であった。標高は16.70mである。調査区の形状は底辺が東を向いたL字形である。調査面積は1750m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あり、第2～3層で近世・近代の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸、土坑、溝、廻溝、段、流路を検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.85mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

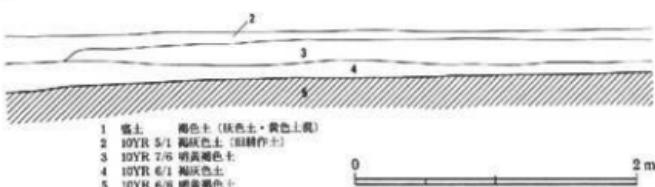
第2層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.75mである。層厚は0.1mを測る。近世・近代の遺物が出土した。

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.65mである。層厚は0.15mを測る。近世・近代の遺物が出土した。



第130図 83・86・110区概略図

1:7,000m



第131図 83区基本層序図

る。上面の高さは16.50mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 西北部に向かって低くなる。上面の高さは15.50mである。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

63-OW (第132・133図、図版100)

東端部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明である。肩部直径2.5m・深度1m、2段目直径2.0m、底部直径0.8m・深度1m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

64-OW

東端部で検出した不整椭円形の井戸である。長軸が北方向を指す。断面形状は3段で南北方向に長く、上部は南半部がテラスを有したU字形、北半部は口の開いた逆台形、下部は未完掘で不明である。肩部長径4.5m・短径1.5m、2段目長径4.0m・短径0.8m、3段目長径3.8m・短径1.5m、底部長径3.0m・短径0.8m・深度1m以上を測る。確認した埋土は7層ある。遺物は瓦器碗が出土した。

65-OW

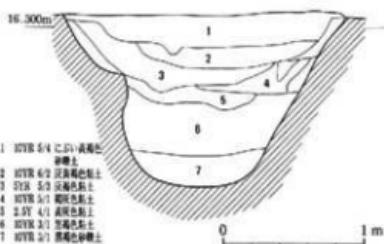
西端部で検出した不整椭円形の井戸である。西側は86区の65-OWにつながる。長軸が東北方向を指す。断面形状はU字形である。肩部長径3.1m・短径2.3m、底部長径2.5m・短径2m、深度1mを測る。確認した埋土は1層であり、青灰色粘土（10B G5/1）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

67-OO

中央部で検出した椭円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。肩部長径2.0m・短径1.5m、底部長径0.9m・短径0.45m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

68-OO

中央部で検出した不整椭円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部



第132図 83区64-OW断面図

長径1.5m・短径0.6m、底部長径1.35m・短径0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

69-OO

中央部で検出した屈折した梢円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.5m、底部長径0.6m・短径0.35m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

70-OO

中央部で検出した屈折した梢円形の土坑である。長軸が北方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.4m、底部長径0.6m・短径0.25m、深度0.07mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

71-OO

中央部で検出した屈折した梢円形の土坑である。長軸が北方向を指す。肩部長径0.4m・短径0.3m、底部長径0.3m・短径0.2m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

72-OO

中央部で検出した丸みをもつ台形の土坑である。肩部長辺0.6m・短辺0.4m、底部長辺0.45m・短辺0.25m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

73-OO

中央部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。肩部長径0.6m・短径0.4m、底部長径0.45m・短径0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR4/1)である。遺物は出土しなかった。

74-OO

中央部で検出した梢円形の土坑である。肩部長径0.5m・短径0.4m、底部長径0.4m・短径0.3m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10YR5/1)である。遺物は出土しなかった。

75-OO

中央部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。肩部長径1.0m・

短径0.8m、底部長径0.9m・短径0.7m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

76-OO

中央部で検出した不整長方形の土坑である。肩部長辺1.0m・短辺0.8m、底部長辺0.9m・短辺0.7m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

77-OO

西北部で検出した屈曲した橢円形の土坑である。肩部長径2.0m・短径1.5m、底部長径1.8m・短径1.3m、深度0.07mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

78-OO

西北部で検出した屈曲した橢円形の土坑である。肩部長径2.5m・短径1.0m、底部長径2.2m・短径0.7m、深度0.07mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

79-OO

西北端部で検出した先の尖った橢円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。西側が86-OOに切られる。肩部検出長径0.4m・短径0.3m、底部長径0.3m・短径0.2m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

80-OO

西北端部で検出した橢円形の土坑である。長軸が北方向を指す。西南側が86-OOと切り合い、先後関係は不明である。肩部長径0.3m・短径0.25m、底部長径0.2m・短径0.1m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

81-OO

東隅部で検出した東側が溝状に延びる不整橢円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。東側が94-OSに切られる。肩部検出長径4.0m・短径1.5m、底部検出長径3.8m・短径1.1m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

82-OO

西北端部で検出した椭円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。南側で87-O Sと切り合い、先後関係は不明である。肩部検出長径1.0m・短径0.8m、底部長径0.8m・短径0.6m、深度0.08mを測る。断面形状は口の開いた浅い椭円形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

83-OO

西北部で検出した屈折した椭円形の土坑である。長軸が南北方向を指す。肩部長径0.5m・短径0.4m、底部長径0.4m・短径0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

84-OO

西北部で検出した椭円形の土坑である。長軸が東南方向を指す。北側で87-O Sと切り合い、先後関係は不明である。肩部検出長径1.0m・短径0.8m、底部長径0.7m・短径0.5m、深度1.15mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

85-OO

西北端部で検出した屈折した不整椭円形の土坑である。長軸が南北方向を指す。肩部長径0.7m・短径0.6m、底部長径0.5m・短径0.4m、深度0.06mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

86-OO

西北隅部で検出した椭円形の土坑である。長軸が東西方向を指す。肩部長径0.8m・短径0.4m、底部長径0.7m・短径0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

87-O S

西北隅部で検出した東方向にほぼ直線的に延びる溝である。西北隅で調査区外へ延びている。検出長6.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

88-O S

東北隅部で検出した北北西方向に直線的に延びる溝である。両端ともに調査区外へ延び

るが、不明である。検出長11.0m、幅0.5m、深度0.17mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5 Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

98-O S

東北隅部で検出した北北西方向に直線的に延びる溝である。両端ともに調査区外へ延びるが、不明である。検出長12.0m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

99-O S

東部で検出した西北方向に延びるが、途中で緩く曲がるくの字形の溝である。西北端は98-O Zに切られ、中間地点で98-O Zを切っている。東南端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長25.0m、幅0.5m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5 Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

100-O S

東北部で検出した北北西方向に直線的に延びる溝である。98-O Zを切り、北北西端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長7.5m、幅0.5m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5 Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

99-O S

北部で検出した西北方向に不整に延びる溝である。西北端は99-O Z（段）を切る。検出長9.0m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5 Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

101-O S

東隅部で検出したほぼ直線的に延びる溝である。北北西端は調査区外へ延びている。検出長6.0m、幅1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5 Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

102-O S

東隅部で検出した北方向に直線的に延びる溝である。南端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長4.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

103-O Z

西北部で検出した鋤溝群である。条数は6条あり、西南から東北に延びている。長さ1.0

～2.0m、幅0.2m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5 Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

96-O Z

中央部で検出した鶴溝である。条数は1条であり、南から北に延びている。長さ1.5m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5 Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

97-O Z

西北部で検出した鶴溝群である。条数は3条あり、東南から西北に延びている。長さ8.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5 Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

98-O Z

北部で検出した鶴溝群である。条数は10条あり、西南から東北に延びている。長さ2.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5 Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

99-O Z

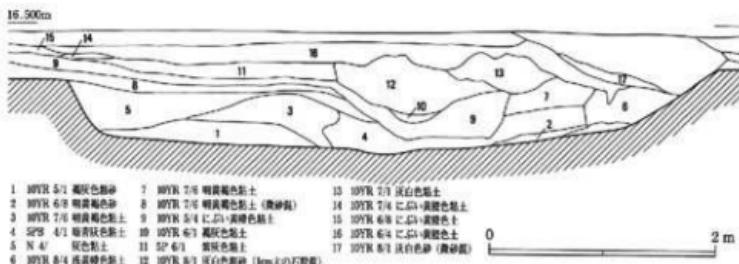
西北部で検出した第5層を削り込んだ段である。西北側が低くなってしまっており、高低差は0.3mである。段の上面は16.26mで、割合平坦である。下面是15.96mで、同じく平坦である。低い部分には耕作土が堆積していた。

40-O R 東側

南端部で検出した、南東～西北に向かって屈曲し、西南方向に枝分かれする流路である。西端は86区の40-O R、南端は110区の40-O Rに続く。長さ18.0m、幅8.0m、深度0.55mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は8層で、①褐灰色土（10 Y R5/1）、②灰黃褐色土（10 Y R6/2）、③にぶい黄橙色土（10 Y R7/4）、④にぶい黄橙色土（10 Y R6/3）、⑤灰白色粗砂（10 Y R7/1）、⑥褐灰色土（7.5 Y R4/1）、⑦黒褐色土（7.5 Y R3/1）、⑧灰褐色砂（5 Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

40-O R 西側

中央より西部で検出した、途中で分流し、西方向と東から北方向へ蛇行しながら延びる流路である。東南端は110区の40-O R、西端は86区の40-O Rに続く。長さ12.0m、幅は中央で6.0m、深度0.6mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は17層である。遺物は出土しなかった。



第133図 83区40-O R西側断面図

第3項 86区

1 位置と層序 (第130・134図)

安松遺跡の東南部で83区の西に隣接している。調査直前は民間会社の用地であった。標高は16.30mである。調査区の形状は長辺の一辺が西を向いた長方形である。調査面積は2145m²である。

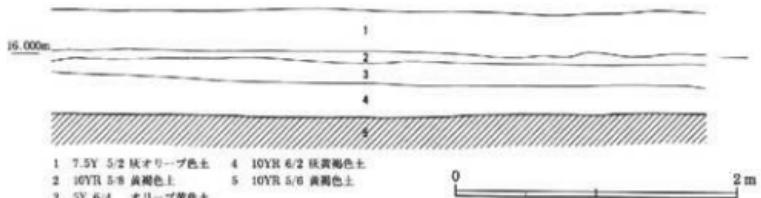
調査により確認した土層は基本的に5層あり、第1～3層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、土坑、溝、鋤溝、流路を検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.3mを測る。現代の耕作土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第2層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.00mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.90mである。層厚は0.1mを測る。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第4層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.80mである。層厚は0.2mを測る。



第134図 86区基本層序図

地山である。遺物は出土しなかった。

第5層 北方へ向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さは15.60mである。層厚は0.1mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構（第135・136図）

100-OW

南端部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は2段で、上部は口の開いた逆台形、下部は未完掘で不明である。肩部直径2.85m・深度0.4m、2段目直径2.0m、底部直径1.4m・深度1.35m以上を測る。確認した埋土は6層である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

101-OW

南端部で検出した円形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明である。肩部直径1.8m・深度1.0m、2段目直径1.8m、底部直径1.6m・深度1.35m以上を測る。確認した埋土は1層で、灰色粘土（7.5Y5/1）である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

102-OW

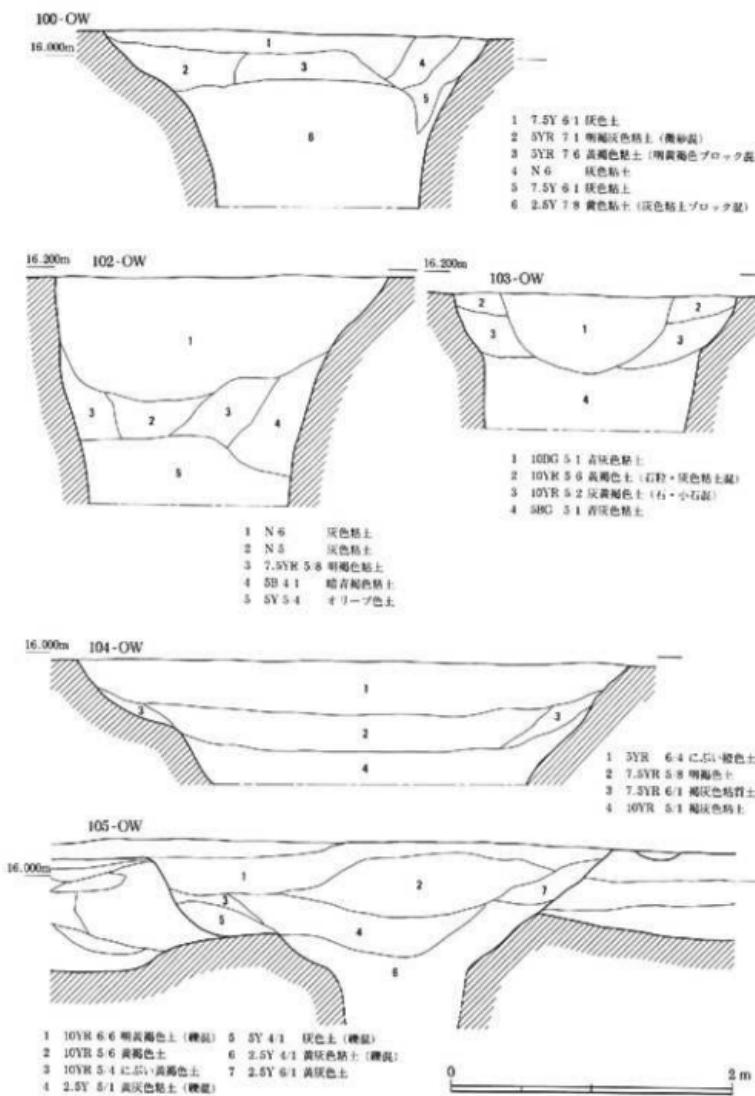
南端部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は2段で、上部は口の開いたU字形、下部は未完掘で不明である。肩部直径2.35m・深度0.3m、2段目直径2.0m、底部直径1.4m・深度1.6m以上を測る。確認した埋土は5層である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

103-OW

中央部で検出した円形の井戸である。断面形状は2段で、上部は口の開いた浅いU字形、下部は未完掘で不明である。肩部直径2.0m・深度0.4m、2段目直径1.55m、底部直径1.4m・深度0.95m以上を測る。確認した埋土は4層である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

104-OW

西南部で検出した円形の井戸である。断面形状は2段でテラスを有し、上部は口の開いたU字形、下部は未完掘で不明である。肩部直径3.85m・深度0.45m、2段目直径2.9m、底部直径2.1m・深度0.8m以上を測る。確認した埋土は4層である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。



第135図 86区100・102~105-OW断面図

105-OW

東部で検出した不整円形の井戸である。断面形状は西北西側が2段でテラスを有し、上部は口の開いたU字形、下部は未完掘で不明であるが調査終了段階ではU字形であった。肩部直径3.2m・深度0.55m、2段目直径1.6m、底部直径0.9m・深度1.2m以上を測る。確認した埋土は7層である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

65-OW

東辺の中央部で検出した弓形の井戸である。東側は83区の65-OWに続く。断面形状はU字形である。肩部弦長2.3m、底部弦長2.0m、深度1.0mを測る。確認した埋土は1層で、青灰色粘土（10B G5/1）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

106-OO

西南部で検出した細長く屈曲した椭円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径4.0m・短径1.0m、底部長径3.8m・短径0.8m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

107-OO

南部で検出した屈曲した椭円形の土坑である。肩部長径3.5m・短径2.0m、底部長径3.3m・短径1.8m、深度0.08mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R5/1）である。遺物は出土しなかった。

108-OO

南部で検出した不整椭円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径4.0m・短径1.5m、底部長径3.8m・短径1.3m、深度0.15mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（7.5Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

109-OO

東端部で検出した不整円形の土坑である。肩部直径1.2m、底部直径0.8m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

110-OO

西南部で検出した不定形の土坑である。肩部長径0.8m・短径0.7m、底部長径0.6m・短径0.5m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

111-OO

西南部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径1.8m・短径1.0m、底部長径1.6m・短径0.8m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

112-OO

西南部で検出した不整円形の土坑である。肩部直径1.3m、底部直径0.6m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

113-OO

西南部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が東北方向を指す。肩部長径1.8m・短径1.0m、底部長径1.6m・短径0.8m、深度0.425mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

114-OO

南部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。肩部長径1.4m・短径0.6m、底部長径1.2m・短径0.4m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

115-OO

南部で検出した梢円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。肩部長径1.4m・短径1.2m、底部長径0.5m・短径0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（7.5Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

116-OO

西南部で検出した湾曲した梢円形の土坑である。肩部長径2.1m・短径0.7m、底部長径1.8m・短径0.5m、深度0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（7.5Y R4/1）である。遺物は出土しなかった。

13-O S

86区の南端に位置する、くの字形の溝である。西南端が18区の13-O S、南南東端も19区の13-O Sに統く。検出長13.0m、幅1.5m、深度0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

117-O S

西端部で検出した底辺が東を向いたL字形の溝である。検出長6.0m、幅0.2~0.5m、

深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

118-O S

西端部で検出した西方向へ湾曲して延びる溝である。西端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長4.0m、幅0.4~0.8m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

119-O S

西端部で検出した東北東方向に直線的に延びる溝である。検出長4.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

120-O S

中央部で検出した北方方向に曲線的に延びる溝である。検出長4.0m、幅0.2~0.6m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

121-O S

中央部で検出した北北東方向に曲線的に延びる溝である。検出長7.0m、幅0.4m、深度0.02mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

122-O S

中央部で検出した西北西方向に直線的に延びる溝である。検出長12.0m、幅1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（7.5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

123-O S

西南部で検出した北北西方向に直線的に延びる溝である。128-O Zと直交し、切っている。検出長10.0m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

124-O Z

北部で検出した鶴溝群である。条数は7条あり、西南から東北に延びている。長さ0.5~6.0m、幅0.3m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

125-O Z

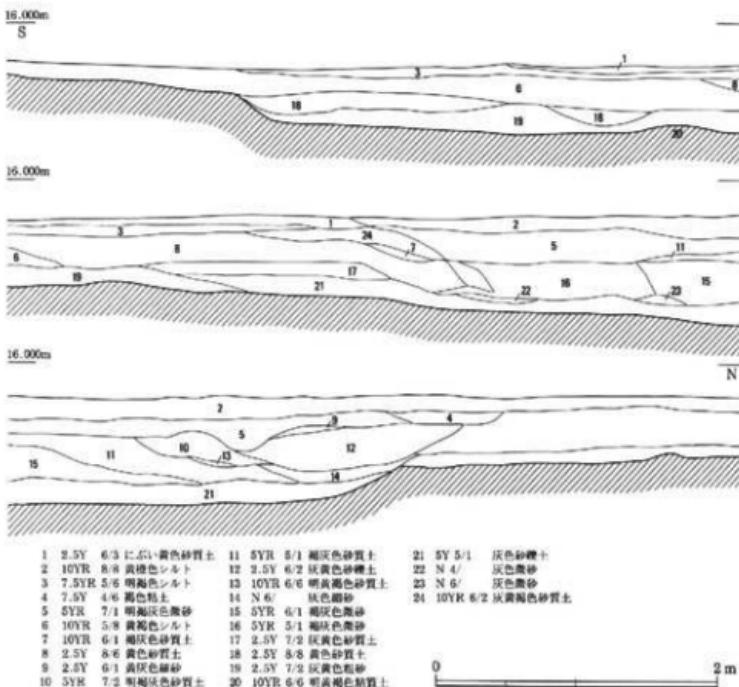
西南部で検出した鶴溝群である。条数は5条あり、東から西に延びている。長さ0.5~2.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

126-O Z

南部で検出した鶴溝群である。条数は3条あり、西南から東北に延びている。長さ1.0~10.0m、幅0.3m、深度0.16mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

127-O Z

北部で検出した鶴溝群である。条数は3条あり、西南西から東北東に延びている。長さ



第136図 86区40-O R断面図

1.5m、幅0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

128-O Z

西部で検出した鋤溝群である。条数は4条あり、西南西から東北東に延びている。長さ5.0m、幅0.2m、深度0.07mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

129-O Z

東北隅部で検出した鋤溝群である。条数は3条あり、東南から西北に延びている。長さ5.0m、幅0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(7.5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

40-O R

中央部(西北～東南)で検出した、東南～西北へ蛇行しながら延びる流路である。東端は83区の40-O R西側、西北端は42区の40-O Rに続く。総検出長53.0m・東南端検出長4.0m・中央部検出長10.0m・西北端検出長12.0m、幅3.0～10.0m、深度0.62mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は24層である。遺物は出土しなかった。

第4項 110区

1 位置と層序 (第130・137図)

安松遺跡の東南端で83区の南に隣接している。調査直前は工場であった。標高は17.80mである。調査区の形状は底辺が南を向いたL字形である。調査面積は693m²である。

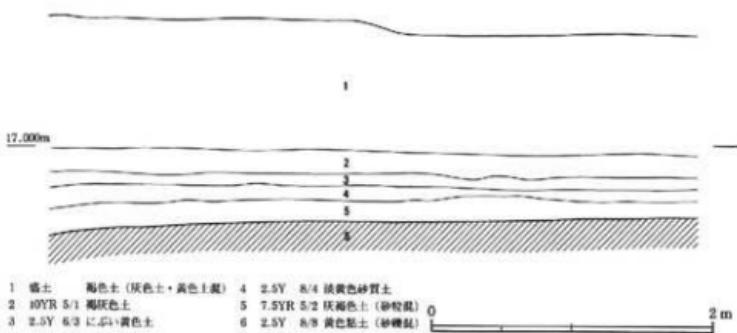
調査により確認した土層は基本的に6層あり、第5層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第4層上面で井戸、土坑、畦畔、流路、ピットを検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.9mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.90mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.80mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 全域に水平堆積している。上面の高さは16.70mである。層厚は0.1mを測る。



第137図 110区基本層序図

遺物は出土しなかった。

第5層 南に向かって厚くなり、南半部に堆積している。上面の高さは16.60mである。層厚は0.1mを測る。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 北に向かって約0.4m低くなっている。上面の高さは16.50mである。層厚は0.2mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 道構（第138図）

35-OW

西北端部で検出した円形の井戸である。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。40-ORを切って掘り込んでいる。肩部直径2.2m、底部直径1.5m、深度0.8m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は陶磁器・瓦が出土した。

36-OO

東南部で検出した不定形の土坑である。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では浅いU字形であった。肩部長径1.4m・短径0.5m、底部長径1.2m・短径0.35m、深度0.06mを測る。確認した埋土は1層であり、褐灰色土（10YR4/1）である。遺物は出土しなかった。

37-OO

中央部で検出した梢円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径1.0m・短径0.4m、底部長径0.8m・短径0.3m、深度0.12mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土（10YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

38-O O

中央部で検出した不整指円形の土坑である。長軸が北北西方向を指す。肩部長径1.4m・短径0.4m、底部長径1.2m・短径0.3m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。

遺物は出土しなかった。

39-O Z

東南部で検出した第6層を削り込んだ畦畔である。北側が低くなってしまい、高低差は0.08mである。段の上面は16.80mで、割合平坦である。下面は16.72mで、同じく平坦である。低い部分には灰褐色土(7.5Y R5/2)が0.1m堆積していた。東北端は調査区外へ延び、西南端は19区へ延びるが、不明である。

40-O R

中央部で検出した、南隅部から北にかけて蛇行し、北隅部で扇形に広がる流路である。北端は83区の40-O R西側、南端は109区の40-O Rに統く。長さ38.0m、蛇行部分の中央部で幅3.0m、扇形部分で長軸径15.0m・短軸径6.5m、深度0.57mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は10層である。遺物は須恵器、土師器、瓦器片が出土した。

41-O P

東部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土(5Y R5/2)である。遺物は出土しなかった。

42-O P

東北部で検出した不定形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土(5Y R5/2)である。遺物は出土しなかった。

43-O P

東北部で検出した不定形のピットである。直径0.3m、深度0.05mを測る。埋土は1層で、灰褐色土(5Y R5/2)である。遺物は出土しなかった。

44-O P

東北部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、



第138図 110区40-O R断面図

灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

45-O P

東北部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.05mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

46~49-O P

東北部で検出した円形のピットである。いずれも同規模・同形のピットで、直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

50-O P

東部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.24mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

51-O P

東部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

52-O P

東北部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

53-O P

東北部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

54~58-O P

東北部で検出した円形のピットである。いずれも同規模、同形のピットで、直径0.2m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

59-O P

東北部で検出した円形のピットである。直径0.1m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

60-O P

中央部で検出した円形のピットである。直径0.1m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（5Y R5/2）である。遺物は出土しなかった。

61-O P

中央部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、

灰褐色土（5YR5/2）である。遺物は出土しなかった。

62-O P

中央部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、
灰褐色土（5YR5/2）である。遺物は出土しなかった。

第5項 42区

1 位置と層序（第139図）

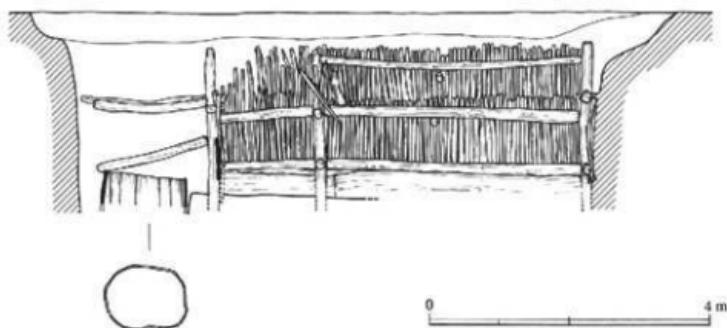
本調査区は安松遺跡東端寄りに位置し、
第2次世界大戦当時陸軍明野飛行場佐野分校
に建設された滑走路部分に該当する。調
査前は宅地や田畠として利用されていた。

かつてそのような施設が当調査区にあっ
たことは、他以上に著しく地形改変されて
いる可能性を示唆するものであった。しか
し調査の結果、盛土下層に旧耕作土層が確
認できたことは、比較的良好な遺構・遺物
の残存を期待させた。



第139図 42区概略図

16,000m



第140図 42区135-O I 立面図

2 遺構（第140図）

調査の結果、中世に遡ると思われる流路跡40-O Rおよび近世～近代の水利施設を検出した。40-O Rは調査区南東（46区がその初源）に源を発する流路の一部で、118区周辺で検出された池跡に向かう。流路・方向は、基本的に蛇行しているため一定しない。埋土の状況から、幾度となく流水・灌水を繰り返し埋没したと判断される。出土遺物はなかった。

近世～近代の遺構には、用排水路と思われる溝や耕作に伴う溝、井戸跡などが含まれる。井戸跡は検出した5基いずれもが素掘り井戸であったが、全調査対象地の中でも特に本調査区周辺に集中しているらしい。また135-O Iは、長さ9m・幅4m・深さ2.6m以上の土坑内部に板材や杭を組み合わせた構造物である。周辺の状況を考慮すると、水利施設とも考えられるが、明確な機能・用途は不明である。

第6項 14・15・20区

安松遺跡の南部に位置する。調査地は旧飛行場主要滑走路跡地にあたる。調査前の現況は田畠で、畦畔ごとに北東および北西方向に比高を下げる。

1 位置と層序（第141図）

調査地は北側の道路を挟んだ89・99区の40-O R（長瀧遺跡では189-O R）が形成する浅い谷地形の南東肩部分にあたる。現況では北東および北西方向に比高を下げるが、層序では若干の差がある。

14区の標高15.75m、15区の標高は15.35mをはかる。14区と15区は14区の南西部を除き基本的に層序はあまり変わらない。第1層は現耕作土で層厚

0.15mをはかる。第2層は旧飛行場建設時の整地土で層厚0.2mをはかる。15区では戰後の現耕作土に伴う整地土の層厚が0.1mをはかるが14区にはない。第3層は旧耕作土（灰白色シルト：7.5Y5/1）で層厚0.05～0.1mをはかる。第4層は旧耕作土の床土部分に相当するが、灰白色シルト（7.5Y7/1）で層厚0.05～0.1mと薄く、第3層を含めて日根郡



佐野村「切図」に見える「上三ヶ尻池」の池底の堆積土かもしれない。第5層はにぶい橙色シルト（7.5Y R7/4）で14区の一部分にのみ堆積し、層厚は0.1mをはかる。第6層は明黄褐色シルト（10Y R6/6）・黄橙色シルト（10Y R8/8）を示し、浅い谷地形部に小疊と共に流れ込んだ堆積層である。層厚0.1mをはかる。第7層は14区にのみ存在し、灰黄褐色シルト（10Y R5/2：マンガン斑顯著）を示す中世遺物包含層である。地山は黄褐色（10Y R5/6）・黄橙色（10Y R7/8）を示すシルト層である。

20区の標高は南東部16m、北西部15.6mをはかり、北西方向に向かって比高を下げる。第1層は現耕作上で層厚0.2mをはかる。第2層～第4層は旧耕作土である。それぞれ第2層褐灰色砂質土（10Y R6/1）層厚0.1m、第3層灰黄色砂質土（2.5Y7/2）層厚0.15m、第4層ににぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）層厚0.1mをはかる。第4層は近世の耕作土である。地山上部にはにぶい橙色粘質土（2.5Y6/4：3cm前後の礫含む）がのるが、14区においては調査担当者の認識の相違により削り取られている。結果的に20区検出の遺構も14区において検出されなかった。地山下部はにぶい黄橙色砂疊（10Y R6/3：3cm前後の礫が多い）で20区では所々露呈する。14区内では南西部の高まりにおいて確認しているが、地山上部土層は完全に削り取られてしまった。

2 遺構

遺構は旧飛行場建設時の井戸・溝・耕作区画と近世～近代の溝・土坑・耕作区画や段丘疊上の扇状地状に堆積した土層中に中世遺物を包含する土坑のほか自然流路などを検出した。

14区の遺構

20区から延びる溝2条のほか20・42区にまたがる土坑など5基と20区から延びる自然流路1条を検出した。

140・146-O S

20区から並列して北北東方向に延びる旧飛行場建設時に存在した溝で約0.8mの畦畔を挟む。140-O S 標高15.05m、検出長15m、幅1.1m、深度0.15mをはかる。断面は口の開いた浅いU字形で埋土は灰黄褐色シルト（10Y R4/2）が堆積する。146-O Sは標高14.95m、検出長14m、幅0.3m、深度0.2mをはかる。断面はU字形で埋土は灰色シルト（7.5Y5/1）が堆積する。

155-O O

20・42区にまたがり調査検出した水溜め土坑である。第5層上面より掘り込まれる。標

高15.1mをはかり、長径5m、短径4m、深度1.45mをはかる。形状は椭円形を示し、断面は幅広のU字形で埋土は上層が灰色粘土（7.5Y6/1）、下層がオリーブ黒色シルト（7.5Y3/2）が堆積する。

156~159-OO

地山面で検出した土坑群である。標高14.9~15mをはかる。156-OOは長径1.6m、短径0.6m、深度0.2mをはかる。形状は椭円形を示す。断面は幅の広いU字形を示し、埋土は灰黄褐色砂質土が堆積する。157-OOは長径1.4m、短径1.2m、深度0.3mをはかる。形状は椭円形を示す。断面は口の開いたU字形を示す。埋土は4層あり、上層から①にぶい黄橙色土（10YR7/3）②褐灰色シルト（10YR6/1）③灰黄褐色土（10YR6/2：マンガン斑顯著）④にぶい黄橙色土（10YR7/4：地山ブロック混じる）である。158-OOは長径0.9m、短径0.5m、深度0.05mをはかる。形状は椭円形を示す。断面は口の開いた浅いU字形を示す。埋土はにぶい黄橙色シルト（10YR7/2：マンガン斑顯著）が堆積する。159-OOは長径1.5m、短径1m、深度0.2mをはかる。形状は椭円形を示す。断面は口の開いたU字形を示す。埋土は灰黄褐色土（10YR6/2：マンガン斑顯著）が堆積する。それぞれ中世遺物の細片を含むが図示し得るものはない。

154-OR

20区からおおむね西に屈曲しながら西北西方向に延びる。標高15.4~15mをはかる。総検出長42mをはかる。南東側は段丘疊層中に立地しており、遺物も包含しないことから西北西に延びる流路とは性格を異なるものと考えられる。疊層が湧水の水道の役割をはたし、以降中世遺物細片を含む流路が形成されたと考えている。幅0.8~2.3m、深度0.1~0.2mをはかる。埋土はにぶい黄橙色土（10YR7/3：灰白色シルトブロック及び5~10cmの疊合む）が堆積し、埋土中には土師器・瓦器・瓦質土器の細片を包含する。出土遺物は極細片で図示し得ない。

15区の遺構

旧飛行場建設時の遺構は検出していない。標高14.7mの地山面で土坑2基、溝1条を検出したのみである。耕作関連遺構であると考えるが判然としない。

160・161-OO

160-OOは直径0.3m、深度0.15mをはかる。161-OOは直径0.15m、深度0.1mをはかる。それぞれ第6層が堆積しており、断面は直に近い。遺物の出土はない。

検出長3m、幅0.5m、深度0.2mをはかる。埋土は第6層が堆積し、断面は口の開いたU字形を示す。遺物の出土はない。

20区の遺構

旧飛行場建設時存在の井戸1基・溝8条・耕作区画4区画と旧飛行場建設時以前の溝2条・耕作区画2区画や自然流路1条を検出した。いずれも地山面で検出した。南東部の標高15.45~15.5m、中央部15.4~15.6m、北西部14.7mをはかる。

138~143・145・146-O S、147・150~152-O Z

138-O Sは南部で検出した。北に延び東に直に屈曲する。検出長30m、幅0.5~0.8m、深度0.1~0.2mをはかる。屈曲部は括れ東側で土坑状の水溜め部を確認した。括れ部には杭が遺存しており樋が存在したようである。樋板は確認していない。埋土は灰色土系の泥土が堆積する。145-O Sは括れ部から北に直進する溝である。直接接続しないが、138-O Sからの水を水利施設を通じて受けていると考えている。検出長9m、幅0.6m、深度0.15mをはかる。断面は口の開いた浅いU字形を示し、埋土は上層が黄灰色砂質土(2.5Y6/1)、下層が灰白色粘質土(2.5Y7/1)が堆積する。これらの溝に画されて西側には151-O Z、東側には147・150-O Z耕作区画が存在する。

141~143-O Sは西部から中部にかけて検出した。138~145-O Sともども151-O Z耕作区画を画する溝である。西側の一段低い部分で検出した。重なりあい東西方向に延びる。東端部には136-OWの野井戸が存在し、139~140~146-O Sが直行して北に延びると考えられるが接続部は調査地外であり判然としない。152-O Z耕作区画はこれらの溝に画されて存在すると考えている。検出長6~20m、幅0.4~0.5m、深度0.05~0.1mをはかる。断面は口の開いた浅いU字形で埋土は灰色土系の泥土や砂質土が堆積する。なお14区北東端部の155-O O方向に延びると考えられるが、順序の項のごとく削られ全容は不明である。

137~144-O S、148~149-O Z

南東部で検出した。北東方向に延び北に湾曲する溝である。東側の148~149-O Z耕作区画を画する。耕作小溝の方向性により二つに分けたが一つの区画かもしれない。また南端部には144-O Sがあって、南側が1段高くなることから南端部にも区画を想定している。137-O Sの検出長30m、幅0.3~0.4m、深度0.05mをはかる。断面は浅い皿状で埋土は浅黄色砂質土(5Y7/3)が堆積している。144-O S検出長4m、幅0.3m、深度0.03mをはかる。断面は浅い皿状で埋土は第4層(灰オリーブ色粘質土:7.5Y6/2)が堆積している。

153-OR

南部から北西方向に湾曲する。途中湾曲部で二股に分かれ再び合流し北西方向に向かう自然流路である。検出長32m、幅0.9m、深度0.15mをはかる。断面は口の開いた浅いU字形で埋土はにぶい褐色粘質土(7.5Y R6/3)が堆積する。遺物の出土はない。底面の一部に段丘疊が露呈する。

第7項 89区

1 位置と層序(第142・143図)

安松遺跡の東南部寄りで98区の東南に隣接している。調査直前は和泉生コンクリートの工場敷地であった。標高は16.30mである。調査区の形状は底辺が南を向いた多角形である。調査面積は903m²である。

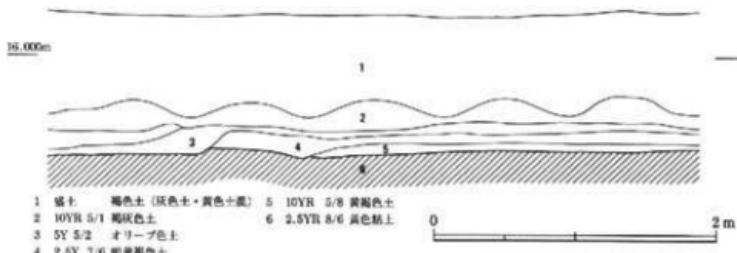
調査により確認した土層は基本的に6層あり、第1～3層で近・現代の遺物が出土した。造構の検出面は1面で、第6層上面で溝、鋤溝、流路を検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.7mを測る。現代の盛土である。遺物は現代の陶磁器が出土した。

第2層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.60mである。層厚は0.1mを測る。耕



第142図 89区概略図



第143図 89区基本層序図

作土（畑の歴）である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第3層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは15.50mである。層厚は0.05mを測る。旧耕作土である。遺物は近・現代の陶磁器が出土した。

第4層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは15.50mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第5層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは15.40mである。層厚は0.1mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第6層 黄色粘土（2.5Y8/6）で、全域にはば水平堆積している。上面の高さは15.30mである。層厚は0.4mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

165-O S

東南部で検出した北北東～南南西方向と西南西～東北東方向とが交わる、頭が南南東を向いたT字形の溝である。北北東端・東北東端は124区へ、西南西端は調査区外へ延びる。検出長25.05m、幅0.3～0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、灰黄褐色土（10Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

166-O S

中央部で検出した南南東方向に緩やかな曲線気味に延びる溝である。北北西端は調査区外へ延びる。検出長7.0m、幅0.6～0.8m、深度0.1mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層で、灰黄褐色土（10Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

167-O Z

中央部で検出した鋤溝群である。条数は2条あり、北北西から南南東に延びている。長さ2.0～3.0m、幅0.2m、深度0.05～0.1mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

40-O R中央

西部で検出した流路である。検出面での平面形状は中央で屈曲した楕円形である。東南端は調査区外へ延び、北北西端は攪乱坑に切られる。長さ8.5m、幅3.0m、深度0.28mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、暗紫灰色粘土（5P4/1）である。遺物は出土しなかった。

40-O R東側

東南部で検出した流路である。検出面での平面形状は隅丸三角形である。西南端は調査

区外へ延び、東端は擾乱坑に切られる。長さ5.0m、幅2.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、暗紫灰色土(5P4/1)である。遺物は出土しなかった。

40-O R西側

西隅部で検出した流路である。検出面での平面形状は長方形で、東南肩部を検出している。西北部は98区へ延びるが、不明である。東北端・西南端は擾乱坑に切られる。長さ2.5m、検出幅3.0m、深度0.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、暗紫灰色粘土(5P4/1)である。遺物は出土しなかった。

第8項 97区

1 位置と層序(第144・145図)

安松遺跡の東南部寄りで道路予定地の東北辺に当たり、72区の東北に隣接している。調査直前は工場倉庫であった。標高は15.80mである。調査区の形状は長辺の一辺が西南を向いた長方形である。調査面積は782m²である。

調査により確認した土層は基本的に7層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第7層上面で井戸、溝、ピットを検出した。

第1層 西北に向かって少し低くなり、全域に広がっている。層厚は0.6mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

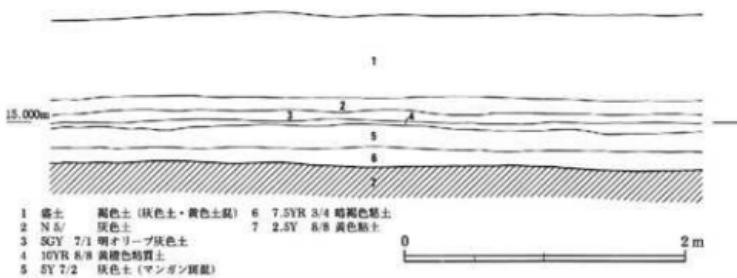
第2層 西北部が約0.3m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは15.20mである。層厚は0.1mを測る。旧耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 西北部が約0.3m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは15.10mである。層厚は0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第4層 西北部が約0.3m低くなり、全域



第144図 97~99区概略図



第145図 97区基本層序図

に広がっている。上面の高さは15.00mである。層厚は0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 西北部が約0.3m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは15.00mである。層厚は0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

第6層 西北部が約0.3m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは14.80mである。層厚は0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第7層 西北に向かって約0.3m低くなる。上面の高さは14.70mである。層厚は0.1mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

178-OW

東北端部で検出した弓形の井戸である。肩部弦長2.8m、深度0.55mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層で、下から暗灰色粘土(N3/0)が0.3m、青灰色粘土(G6/1)が0.25mである。遺物は出土しなかった。

179-OW

西北部で検出した不整円形の井戸である。肩部直径2.6m、底部直径1.8m、深度0.68mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層で、下から灰色粘土(N5/0)が0.5m、黄灰色粘土(2.5Y6/1)が0.18mである。遺物は出土しなかった。

180-OS

東南部で検出した東北東方向に直線的に延びる溝である。西南西端は浅くなり途切れるが、72区の180-OSに続き、東北東端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長12.0m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

181-O S

西北部で検出した東北東方向に直線的に延びる溝である。溝側面に護岸のため杭を打っている。東北東端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長16.0m、幅1.5m、深度1.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y4/1：疊・粘土混じり）である。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

182-O S

中央部で検出した東北東方向に延びる溝である。西南西端は72区の182-O Sに続き、東北東端は調査区外へ延びるが、不明である。検出長17.0m、幅1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

183-O S

西北部で検出した、屈曲して東に延び底辺が南を向いたL字形の溝である。検出長6.0m、幅0.4m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

184-O P

西部で検出した梢円形のピットである。長径0.4m、短径0.35m、深度0.06mを測る。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

185-O P

中央部で検出した不整円形のピットである。直径0.3m、深度0.1mを測る。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

186-O P

中央部で検出した不整梢円形のピットである。長径0.2m、短径0.15m、深度0.15mを測る。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

187-O P

中央部で検出した不整円形のピットである。直径0.1m、深度0.2mを測る。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

188-O P

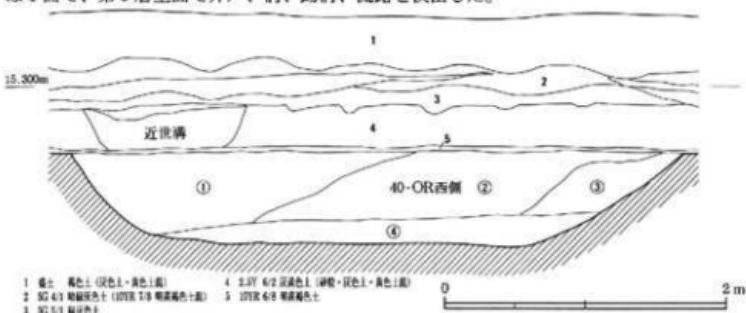
中央部で検出した不整円形のピットである。直径0.3m、深度0.05mを測る。埋土は1層で、褐灰色土（5YR5/1）である。遺物は出土しなかった。

第9項 98区

1 位置と層序（第144・146図）

安松遺跡の東南部寄りに当たり、72区の南西に隣接している。調査直前は個人住宅であった。標高は15.80mである。調査区の形状は底辺が南西を向いた台形である。調査面積は1466m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第5層上面で井戸、溝、鋤溝、流路を検出した。



第146図 98区基本層序図

第1層 全域に広がっている。層厚は0.4mを測る。盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 全域にはば水平堆積している。上面の高さは15.40mである。層厚は0.2mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.20mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

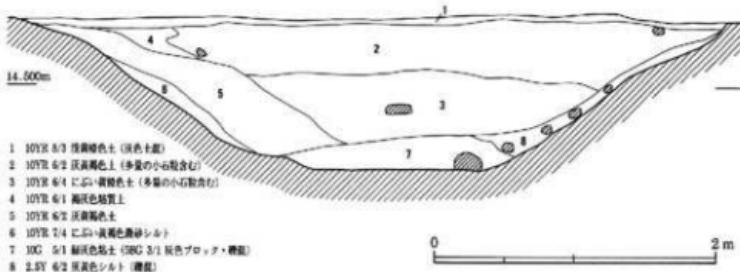
第4層 全域に広がっている。上面の高さは15.10mである。層厚は0.3mを測る。整地土である。遺物は出土しなかった。

第5層 北西へ向かって約0.3m低くなり、全域に広がっている。上面の高さは14.80mである。層厚は0.1mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構（第147図）

169-OW

東端部で検出した不整隅丸長方形の井戸である。長軸が北東方向を指す。断面形状は2



第147図 98区169-O W断面図

段でテラスを有し、上部は口の開いたU字形、下部は逆台形である。肩部検出長辺10.0m・短辺5.2m・深度0.2m、2段目長辺4.5m・短辺3.3m、底部長辺9.5m・短辺3.0m、深度0.55mを測るが、北東端が1段深くなり、深度1.1mとなる。埋土は8層である。遺物は出土しなかった。

170-O S

中央部で検出した北東方向に緩やかに屈曲して延びる溝である。北東端は169-O Wとつながる。検出長9.0m、幅1.5m、深度0.46mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層であり、灰色粘土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

171-O S

北隅部で検出した西南西方向に直線的に延びる溝である。東北東端は72区の171-O S、西南西端は71区の171-O Sに続く。検出長12.0m、幅1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

172-O S

北部で検出した南西方向に延びる溝である。南西端は攪乱坑に切られている。検出長4.0m、幅0.8m、深度0.3mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y4/1)である。

173-O Z

北部から西北部で検出した鋤溝群である。条数は約15条あり、東から西に延びている。長さ1.0~6.5m、幅0.1~0.2m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

40-O R西側

西部で検出した、緩く曲線的に南から北へ延びる流路である。西南端は99区の40-O Rに続く。長さ18.5m、幅3.0~4.0m、深度0.46mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は4層で、①にぶい黄褐色土（10Y R5/3）、②黄褐色粘土（10Y R5/6）、③黄橙色粘土（10Y R7/6）、④にぶい黄橙色砂疊土（10Y R6/3）である（第146図）。遺物は出土しなかった。

40-O R東側

南隅部で検出した流路である。検出面での平面形状は屈曲した椭円形である。99区に統き、長さ6.0m、幅5.0m、深度0.35mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は3層で、下から黄褐色粘土（7.5Y R8/8）が0.1m、黄褐色砂混じり粘土（2.5Y 5/4）が0.2m、にぶい黄褐色粘土（10Y R5/4）が0.5mである。遺物は出土しなかった。

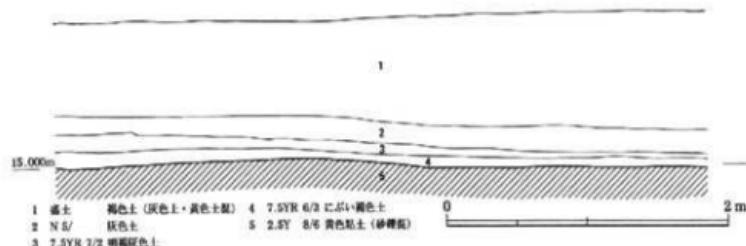
40-O R中央

南西辺中央部で検出した流路である。検出面での平面形状は半截した不整椭円形である。99区の40-O Rに統く。長さ5.5m、幅2.0m、深度0.5mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は2層で、下から黄橙色粘土（7.5Y R8/8）が0.25m、黄橙色粘土（10Y R8/6）が0.25mである。遺物は出土しなかった。

第10項 99区

1 位置と層序（第144・148図）

安松遺跡の東南部寄りで98区の西南に隣接している。調査直前は空地であった。標高は16.10mである。調査区の形状は直角の対辺が南を向いた直角三角形である。調査面積は



第148図 99区基本層序図

784m²である。

調査により確認した土層は基本的に5層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第5層上面で溝、流路を検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.85mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 水平堆積し、中央部でなくなっている。上面の高さは15.25mである。層厚は0.15mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.10mである。層厚は0.05mを測る。床土である。遺物は出土しなかった。

第4層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.05mである。層厚は0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

第5層 全域に広がっている。上面の高さは15.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。

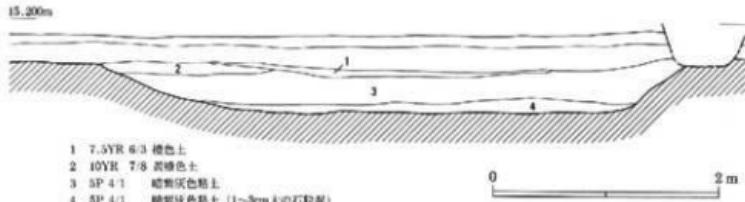
2 遺構（第149図）

168-O S

調査区のはば中央部を南から北に直線的に延びる溝である。北端は浅くなり、消滅する。南部で一旦途切れるが続き、南端は調査区外へ延びる。検出長19.0m、幅0.6~1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y 4/1）である。遺物は出土しなかった。

40-O R

東端部で検出した流路である。検出面での平面形状は半截した不整梢円形で、北側肩部分の形状は屈曲する。両端は98区に続き、長さ26.0m、幅2.5m、深度0.22mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は4層ある。遺物は出土しなかった。



第149図 99区40-O R断面図

南部で検出した流路である。検出面での平面形状は半截した橢円形で、北側肩部分の一部を検出した。南側は調査区外へ広がっている。長さ7.0m、幅1.5m、深度0.22mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、暗紫灰色粘土(5P4/1)である。遺物は出土しなかった。

第11項 70~73区

1 位置と層序

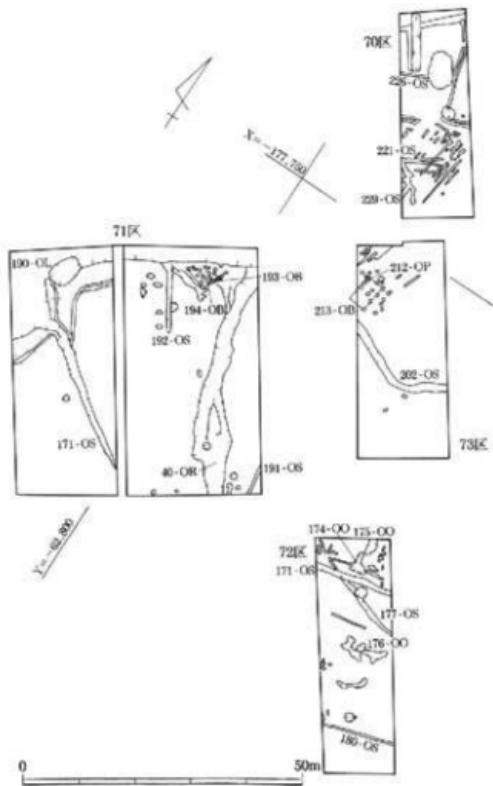
(第150図)

上記4カ所の調査区は、他の調査区と複雑に接しているため調査区間の連続性は乏しい。調査前は、宅地並びに耕作地として利用されていた。

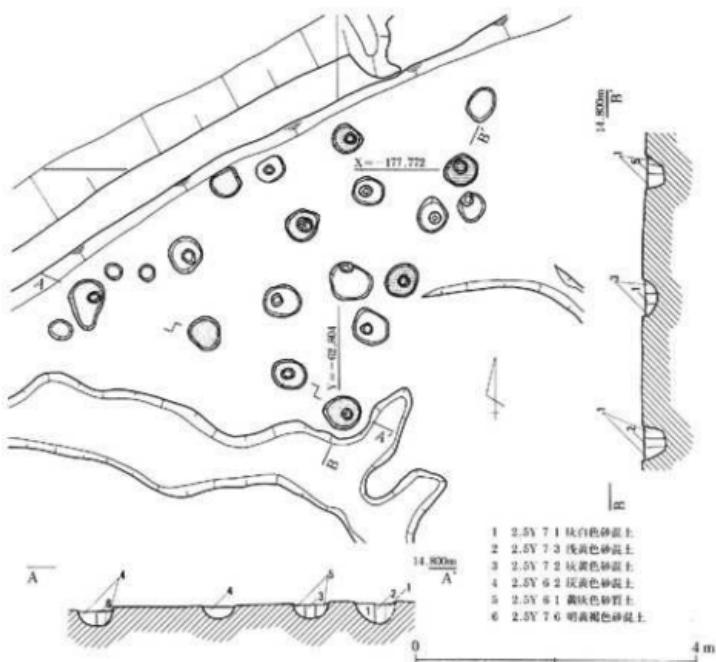
当調査区も旧陸軍の飛行場に近接しているが、盛土を施したに過ぎず、危惧した著しい擾乱はなかった。

2 遺構 (第151~154図)

検出した中世の遺構は、70区の221-O S、71区の192-O S、193・194-O B、72区の177-O S、174-O O、73区の212-O P、213-O Bである。このうち71区の40-O Rは42区の調査概要で記述したように、46区から延びる流路跡の末



第150図 70~73区概略図



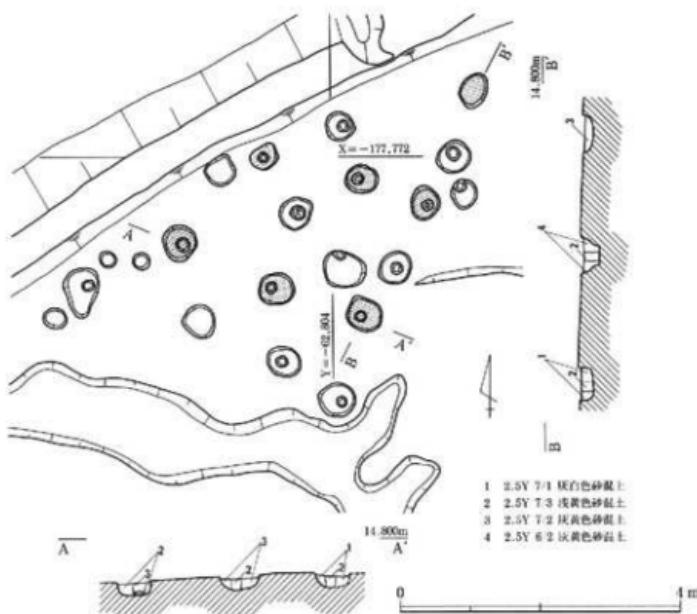
第151図 71区194-O B平面・断面図

端部分に相当する。その他70・72区で検出した溝群は、当該期の耕作に伴う用排水路と考えられ、近世・近代のそれとは、掘削方向が異なる。

71区で検出した194-O Bは2間×3間分を、また193-O Bは2間×2間分をそれぞれ確認したが、柱穴の切り合い関係がないため先後関係は不明で、三ヶ尻池築造によって幾分か削り取られている。

73区の213-O Bは、2間×3間の南北棟の建物跡である。建物北西隅の柱穴aを掘削するに先立ち、212-O Pが掘られており、埋土から瓦質羽釜片が出土した。地鎮に関する遺構ではないかと思われる。

検出した近世～近代の遺構は、71区で検出した三ヶ尻池の一部および同池へ水を供給するための171-O Sなど、専ら耕作に伴う用排水路跡である。



第152図 71区193-O B平面・断面図

第12項 111区

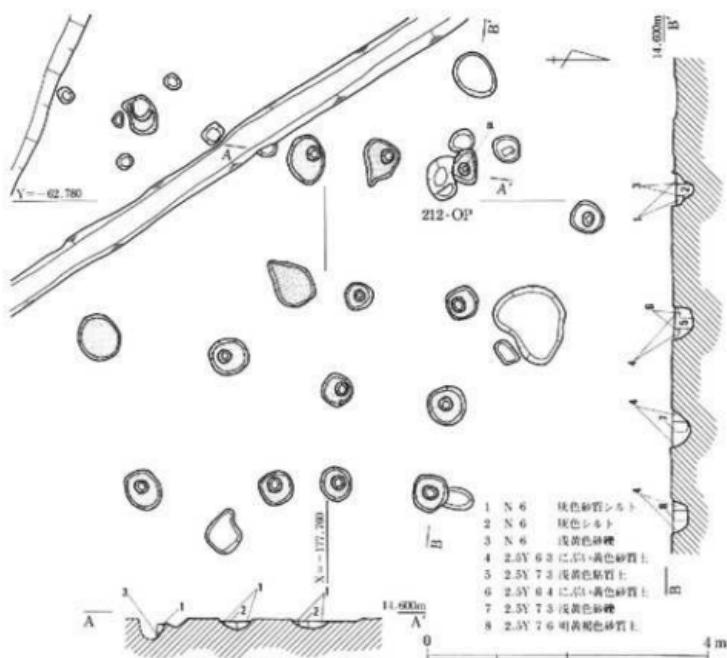
1 位置と層序 (第155・156図)

安松遺跡の中央部で112区の東南に隣接している。調査直前は個人住宅及び畑であった。標高は15.80mである。調査区の形状は底辺が東南を向いたL字形である。調査面積は835m²である。

調査により確認した土層は基本的に6層あり、第2～5層で近世以降の遺物が出土した。遺構の検出面は1面で、第6層上面で井戸、土坑、溝、鋤溝、池、ピットを検出した。

第1層 全域に水平堆積している。層厚は0.4mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

第2層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.40mである。層厚は0.1mを測る。耕作土である。近世以降の陶磁器が出土した。



第153図 73区213-OB平面・断面図

第3層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.30mである。層厚は0.2mを測る。近世以降の陶磁器が出土した。

第4層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.10mである。層厚は0.05mを測る。近世以降の陶磁器が出土した。

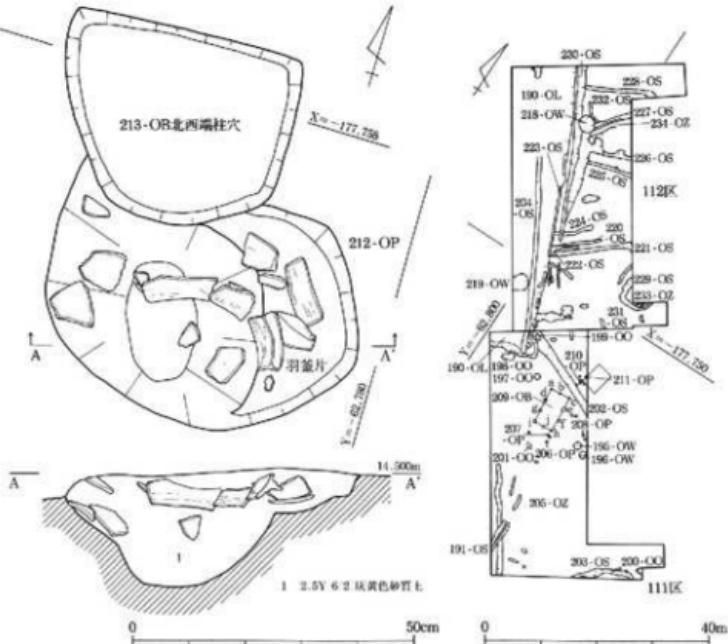
第5層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.10mである。層厚は0.1mを測る。近世以降の陶磁器が出土した。

第6層 全域に水平堆積している。上面の高さは15.00mである。地山である。遺物は出土しなかった。

2 遺構

195-OW

東部で検出した円形の井戸である。肩部直径2.0m、底部直径1.6m、深度0.83m以上を測る。断面形状は未完據で不明であるが、調査終了段階では口の閉じたU字形であった。



第154図 73区212-OP平面・立面図

第155図 111・112区概略図

確認した埋土は1層で、褐灰色粘土（10Y R4/1）である。近世以降の陶磁器が出土した。

196-OW

東北辺の中央部に接して検出した円形の井戸である。肩部直径1.2m、底部直径0.8m、深度0.8m以上を測る。断面形状は未完掘で不明であるが、調査終了段階では口の閉じたU字形であった。確認した埋土は1層であり、褐灰色粘土（10Y R5/1）である。近世以降の陶磁器が出土した。

197-OO

北部で検出した不整橢円形の土坑である。長軸が北北東方向を指す。東北側が攪乱坑により切られている。肩部長径1.4m・短径1.4m、底部長径1.2m・短径1.0m、深度1.04mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色粘土（10Y R4/1）である。近世以降の陶磁器が出土した。